豪奢の舉として最も世人の艶稱を受るなり

（一）（案）地名の轉訛混雜甚しきは此書の常例とする所なれども此カンジギュといへる地名程茫洋の觀ある者はあらず佛の支那學家ポーシア氏は之を以て老過一名南掌（ラオ・ナンチャング）とし更に其中の一州支那人の所謂八百媳婦（パベシフ）を指すものと爲せり而して其當時の首府なる遮羅四北部のジムメ河上の蒙買（モングマイ）と指定すれどガルニエ氏は緬甸東邊の江東の稍〻東南に在る蒙樣（モングヨング）にて今猶ほ其遺趾を存すと言へり兎に角湄公河邊の江莽も其地域内に屬すべし方輿紀要に曰く八百大甸は古の蠻夷の地なり其土酋に妻八百あり各一寨を領す因て八百媳婦と名く東北に南格剌山あり雲南の車里との界なりと予は竊に以爲らくカンジギュは南掌國の支那音ナンシャンゲッの轉傳變訛せしものなるべしと

雲南河迷州

第四十七章

アム國

アム國も亦東方に在り（一）人民は皆な元朝に服屬し居れり象教宗徒にして家畜の肉と穀菜を食とす一種固有の方言あり國内多く牛馬を産し旅商に鬻て印度に輸出す水牛も亦牡牛と共に土地牧草に富み且善良なるが爲に生産夥し人民は男女齊く手腕臂足脚を間はず金銀の環を帶ぶ女子の分は殊に價格貴重なる物とす此國とカンジギュとの距離は二十五日程にしてカンジギュより孟加拉迄（ベンガラ）は二十日程なり（一本に三十日程）次に此地より八日程の地位にあるソロマン國を逃ぶべし

（一）（案）アムは一本にアニュ又アニンとあり是れ雲南の東南界に在る阿迷（アミ）州のことなりアニンゲなり方輿紀要に古の蠻夷の地なり元の初阿寧（アニング）萬戶府を立つ明の洪武十五年改て阿迷州を立つとある者是なり志に曰く阿寧（アニング）は古の蠻名なり今爲て阿迷と爲すと

貴州威寧地方

第四十八章

ソロマン國

ソロマン國は東方に在り（一）居民は象教徒にして固有の方言あり元帝の臣僕とす身材高くして容貌美なり顔色は清白の方よりは褐色の方なり行爲方正にして戰爭に勇敢なり市街城邑多くは險峻なる山上に在り死體は火化して其灰とならざる骨は箱に納て山上に運び巖洞中に藏し野獸の爲に侵さるゝことなからしむ邦内黄金の産出甚だ多し普通の通用小貨には印度より來る貝子（たからがい）を用ふ但此類の通貨は前二章に出せしカンジギュ及びアムの兩國にも同く通行するなり飲食共に既に前文に述べし所に同じ

（一）（案）ソロマン一本にはトロマンともコロマンともあり何れが是とも定め難し兎に角貴州の邊境に居る蠻族を謂ふに外ならず皆な苗族の種類にして其最なる者を羅々蠻（ロ・マン）狫猓蠻（ロ・マン）の族とす爰にソロマン、トロマン又コロマンといふは羅々蠻（ロ・マン）若くは狫（キ）羅蠻（ロマン）の轉訛なるべし此等の種族は今に貴州の四北部大定府地方に多く住すと云ふ左ればコロマンは大定府治内の威寧地方を

四川叙州成都府直隸州及び河間府

謂ふに似たり

第四十九章

チンチグイ。ジヤンフ。ジングイ及びバザンフの諸市府

ソロマンを去て東の方へと進み河水に沿て十二日間の旅行を爲す兩岸處々に市府城邑多し而して終に宏大華麗なるチンチグイ府に達す（一）居民皆な象教宗徒にして元朝の臣民たり商工を以て專業とす一種の樹皮にて布を織る其觀甚だ美なり男女共に常に夏の衣服とし用ふ男子は勇敢なる戰士たるに足る朝廷の押印ある紙幣の外別に貨幣なるものなし

（一）（案）チンチグイ。又チンチツウ又シヤルグルとも又シヤルグルともあり更にフニルグル又クイギウともありて諸本區々一定せず之を諸圖に求むるにフニルグルは貴州の普安路（フガシル）と音韻稍〻相似たれども次の本文に十二日にて成都に達すとあるに考ふれば距離遠きに過ぎ方位も順路にあらず貴州の威寧地方なるソロマンより十二日間水に沿て行くといひ殊に宏大華麗の府市と云ひ夫より河水に依りて行き成都に達すといふを見れば普安路にあらざること知るべし因て之を地圖に探り音韻に合せ考ふるにシヤルグルとあるもの蓋し叙州（シヤウチヤウ）の轉訛せしに似たり叙州（シヤウチヤウ）とすれば威寧地方雲南の昭通（チヤオトング）より舟行して直に爰に到るべく夫より成都に行くも河水に沿て水陸行共に容易なりといふ因て今定て叙州を指すものとす

是に於て前後を通考するに著者が逸る所の州國行路の方向順序は或は實踐もあり或は傳聞をも交へたるものあり今は四より東北に向て進みつゝあるなり試に其地名と距離とを糾れば孟加拉（ベンガラ）より起り三十日程にて南掌（アンシヤンガホン）地方即今の江湖に抵り夫より二十五日程にて阿迷（アミ）州に達し次に八日程にて貴州威寧地方に着し河水に沿て十二日程四川の叙州（シヤウチヤウ）に抵り夫より同く河水に沿て十二日程成都府に達せるものとすべし合計八十七日程と爲る中に就て孟加拉（ベンガラ）は第四十五章に註せし如く著者は足跡を印せずして只傳聞に據り述べしまでにて距離位置共に明示せず却て之を緬甸の南境に在りとし歸路貴州四川に赴くに當ても西南端より程を起して東北に向ふとあるに顧れば緬甸南部の皮求（ペグ）を緬甸人はペゴーと稱するより乃ち之を以てベンガラと誤記せしより起りしものなるべしとはユール氏の說なり如何にも左もあるべし次に第四十八章のソロマン國を阿迷（アミ）州より八日程とあるより雲南の東境なる羅平（ロピング）なるべしとの說もあれど夫より十二日間河水に沿てチンチグイに達しチンチグイより同く河水に倣て又十二日にて成都に達すとあるに據れば羅平にては依るべき河水なく又二十四日にては距離遠くして成都に達すべくもあらず因て前說の如く之を威寧地方としチンチグイを叙州（シヤウチヤウ）と爲したり之を威寧地方とすれば阿迷（アミ）州より八日の短時日にては達すべからず其里程には必ず間道あるべし顧ふに著者の實際の行程は雲南府より直ちに昭通（シヤオトング）に出で舟行にて叙州（シヤウチヤウ）に抵り又舟行にて成都に歸りたるにて南掌といひ阿迷といひ威寧といふも皆な傳聞より來りしものと思はるユール氏も亦此の如く說けり

此州內には虎多く居民其跳梁を怕れて市外に在て夜眠するの危險を冒す者なし又河水を航する者は岸に近く敢て船を泊する事なし蓋し虎は能く水に入り泳で船に達し人を掠て去る故に往來の舟は必ず中流に碇を投ず水深く安全なればなり此邦には又巨大獰猛の獒犬を見る其勇猛にして有力なるや人若し其數頭を伴はゞ能く虎と相敵するに足る豫め弓と矢とを備へ斯して犬を伴て進む虎と逢はゞ其猛獒を使嗾す猛獒は即ち進て虎を斃ふ虎は自然の性として平生身を護るの一樹を擇

び置き巨獒をして我背後を襲ふを得ざらしめ常に敵を前面に受るやうにす此天然の性に由て巨獒の襲ひ來るを知れば速に其樹の方に向て緩〻漫〻徐歩して退き敢て急走して卑怯の振舞を示さず是れ其傲慢なる天性の然らしむる所なり斯く從容として慢歩する中に獒犬は疾行して之に近づき人は箭を放て之を射る虎は是に至て犬を捉まんとするも犬の進退の快捷に及ぶべくもあらず乃ち引返して舊に依て慢々として行く未だ舊位置に到らざる中に早く既に許多の箭を負ひ數回犬に咬まれて力衰へ流血甚しくして僵る斯くして遂に人の爲に獲らるゝなり

邦内繭絲の製造最も盛なり河水の航路至便にして諸城を通過し以て大に之を諸方に輸出せり人民の生業は全く商業に在り行程十二日を終ればシヂンフの都府に達す（二）是は嶋に（第三十六章）既に載せたり是より旅行二十日（七十日の誤）間にして嶋に一回通過せしジングイ（三）に達し夫より更に四日にしてバザンフの市府に抵る（四）バザンフは乞解（キタイ）の疆内に屬す嶋の往路より此地方に歸り來れば即ち其南方に在るなり居民は象教信徒にして死者あれば其體を燒く此地には基督教徒も亦稍之あり教會堂を有せり庶民皆な帝の治下に隷し民間には政府發行の紙幣ありて流通す其生計は商工業に在りて絹絲の製出最も多く金襴を織り又最好の肩巾を製す此府の領内には附屬の都市城邑少なからず又一大河ありて府郭外を貫流す其便に憑て無量の商品常に帝都に搬運せらる是れ其帝都との交通の爲に許多の運河を開鑿しあればなり此地の事は此に止め更に三日間の行程を進めて他の一市チャングルと名くる地を紹介すべし

（二）（案）爰にシヂンフとあるは四川省の成都（チングフ）府の事にて既に本篇の第三十六章に出でたり而して其處にはシンヂンフと記せり傳寫の誤謬多きは之を以ても知るべし

（三）（案）ジングイは直隸省の涿州（たくしう）にて嶋に本篇の第二十八章にはグーザと記せり誤謬の甚しきを見るべし

本篇第二十七章盧溝橋より説き起し涿州より西行して山西陝西四川を經て西藏の境に入り還て雲南より緬甸に出で之より東北行して南京（即ち老撾）を過ぎ雲南の東南境より貴州の西北邊を經て四川に還り之より往路に由り再び涿州に抵り是に於て南方の大路を取り山東省に向て歩を進めんとするなり

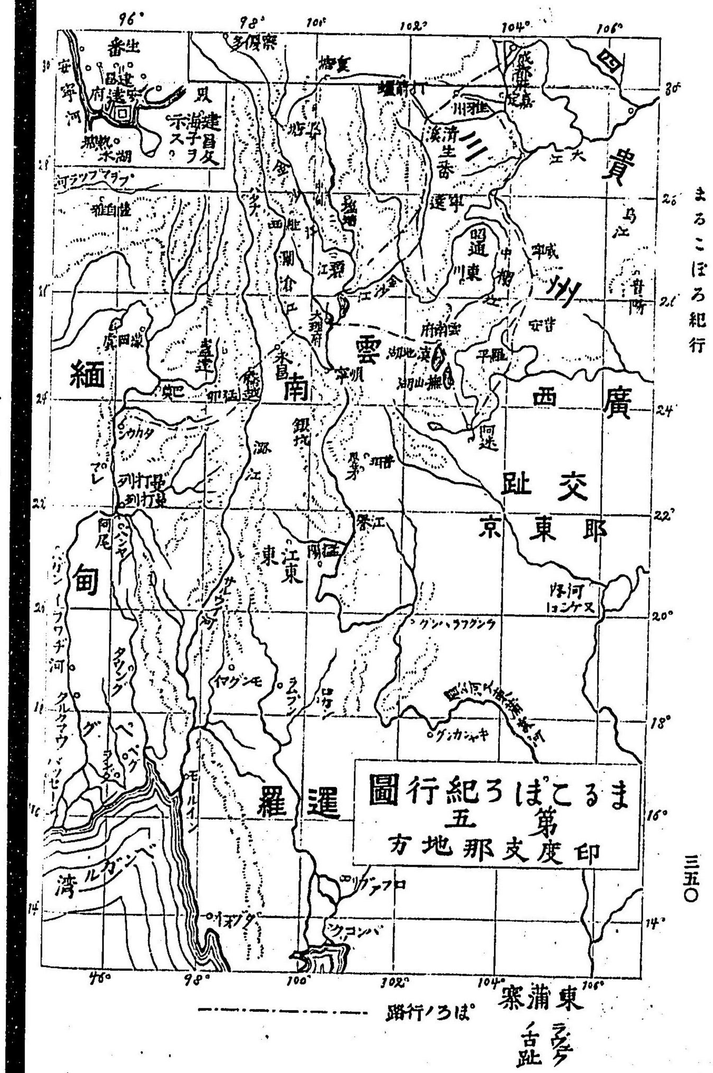
（四）（案）バザンフとは河間府（ホキヤンフ）の訛なり北京の南支那里四百十里に在り南に滹沱河あり北に高河あり水陸の要衝に當り四方の供億皆な取て給すと元史地理志にもあり交通至便の地なり

直隸省治州

第五十章

チャングル市

チャングルは南の方に在る一大府なり乞觶（キタイ）の疆内にて帝の版圖に屬す（一）居民は偶像を崇信し死體を火葬す民間には政府發行の紙幣通用す府内及び其周圍の各地に於て多量の鹽を製す其方法左の如し土地に含鹽性の土あり大に之を堆積して其上に水を灑げば水は土塊に浸透して鹽分を溶解



他合して流下し來る之を渠中に集め夫より深さ四インチに過ぎざる甚だ濶き鍋に送り火に上せ能く煮て後放冷結晶せしむ斯くして製せし鹽は純白にして良好なり諸方へ輸出せられ政府之より著大の歳入を得るなり此地方には香味善き桃實を產すること多し其形殊に大にして一箇の重さ金量二ポンドの物もあり

次にチャングリと名くる一市を述ぶべし

(一)河間府の東南に第二階級の市邑あり河間府の治下に屬す之を沧州（チャングヤオ）と名くチャンゲル又はシャンゲルといふは訛するなり(案)今は天津府の屬州なり天津の沧州鹽山等の處に鹽場ありと衛志に見えたり世に天津桃と稱する物多くは此邊より產するなり

山東德州今の陵縣

第五十一章

チャングリ市

チャングリも亦乞解（キカイ）疆域内の一市にて南の方に在り(一)元帝の版圖に屬して人民は象教徒なり同く政府發行の紙幣を通用すチャングル（沧州）より此に至る距離は五日程なり其間に市府城邑數个所あり俱に帝の版圖に屬す何れも商業繁昌の地にて之に課する稅金も實に莫大の高に上る市内を貫て一大河流る廣くして且深し商品の運搬甚だ盛大にして生絲藥劑其他高價の品料最も多きを占

む(二)此地の事は此に止め次にッヂンフと稱する一都市に及ぶべし

(一)(案)チャングリは德州の訛にて今の濟南府の陵縣なりマースデン氏は山東省の首端衛河々畔の德州を謂ふものと爲せど左にはあらず今の德州は元の時は却て陵縣と稱せり大清一統志に漢の安德縣隋の開皇九年德州を置く唐宋金元亦德州と曰ふ明の永樂七年陵州を改て德州と爲し而して德州を以て陵縣と爲し濟南府に屬す本朝之に因るとあり左れば今の陵縣は舊時の德州にて今の德州は往時の陵州なること明かなり

(二)(案)一大河とは馬頰河一名鵞馬河を謂ふ武定府を經て直隸灣に入る

第五十二章

ッヂンフ府

チャングリ（德州今の陵縣）を去て南行六日重要繁盛の城市數个所を過ぐ民皆な偶像を崇拜し死體を火葬す何れも帝の臣民にして民間には其紙幣を通用す商工を以て生業とし食料至て富饒なり六日の行を終てッヂンフと稱する一都會に達す(一)往古は壯麗の一首都なりしが帝遂に兵力を以て之を服從せしめたり府郭の外園苑を以て圍繞す佳菓異草に富み人の居住をして最も愉快ならしむ濟南路治を置き著名なる州縣十一を支配す何れも商業殷盛の地にして生絲を產すること夥し此地は帝が之を征服せし時迄は其王の政府の所在地なりき帝曾て大臣中の一員ルカンソルなる者を此府に遣して其政を執り七萬の騎卒を統率して此地方を防禦するの任に當らしめたりしが此者今は自ら豐德富有地の主宰として有力なる軍兵を麾下に擁する身となりたるに心驕り一二七二年(一二六二の誤)主君に背て叛逆を企て之が爲に謀を以て府內の主なる者を誘て彼が惡事に加擔せしめ之に由て此地方一帶の諸市諸城に通じて一齊に叛を起さしめたり(二)帝此謀叛の擧あるを聞くや否や重臣の中より一はアングルといひ一はモンガタイといへる兩人を選び十萬の軍に將として此方面に出發せしめたり(三)官軍の近づき來るを知てルカンソルは時を移さず敵軍に讓らざる兵勢を集合し成るべく神速に戰場に赴かしめたり是に於て双方共に死傷算なく遂にルカンソルは殺されて軍兵は自ら散々に逃走せしが官軍北るを逐て多く之を殺し多く之を虜にせり而して捕虜は帝の前に送りて首領輩は死刑に處せられ他は皆免されて帝に服事し自後忠實の誠を失はざりき

(一)ッヂンフは山東の首府濟南府の訛誤なり(案)濟南府は周に齊の地たり漢の初分て濟南郡を置き文帝之を濟南國と爲す後魏以來宋の初に至る迄或は齊州と曰ひ或は齊郡と曰ふ政和年間濟南府と爲し以て今に至る山東布政使司の在る所なり

(二)(案)ルカンソルは一本にはリタン、ザンゴンとあり リタンは人名李璮にてサンゴンはチャンゲキョンの訛即ち將軍の支那音なれば再三轉訛して二語が一語と成りたるなり李璮は元に降りたる李全の子にて元の憲宗に仕へ江淮大都督に迄爲りしが忽必烈帝位に即くに及で南歸の心即ち元に背き宋に降るの志あり自ら完繕益兵の計を爲し其子彥簡を開平より召し濟南益都等の城壁を修築し遂に元の皮兵を殲し連海の三城を以て宋に歸降す京東郡を以て父の元に降りし過を贖はんと謂ふ宋帝仍

て詔して瓊に保信寧武軍節度使を授け京東河北路の軍馬を督視せしめ齊郡王に封じ其父全の官爵を復すと通鑑輯覽等に見えたり事は宋の理宗の景定三年元の世祖の中統三年即ち西曆の一二六二年に在り本文一二七二と爲すは羅馬數字の誤寫より來りしものと思はる其王の政府の所在地なりとは李璮宋に歸降して齊郡王に封ぜられ此に政府を立て居りしを云ふなるべし

(三)(案)兩將の名一本にはアゲル。マンゲクダイとしてアゲルは乃顏の父にて世祖の遠き從弟哀塞兒の事マンゲクダイは右翼千夫の長にて曾て伯顏の征南軍に從て大功ありたりと註したれど兩將共に其名は何かの誤寫なるべし殊に伯顏の征南軍云云とあれど巴顏の世祖に登用されしは遙に後の事なり此時の事は史に諸王哈必齊に命し諸道の兵を總て瓊を擊たしめ復た丞相史天澤に命じて往かしめ仍天澤に詔して專征せしめ諸將皆な其節度を受く又天澤の從子史樞及び阿珠に命じ各〻兵に將として濟南に赴かしむ瓊の師衆出でゝ輜重を掠め將に城に及ばんとす北兵遽へ擊て大に之を敗る瓊退て城を保ち史天澤之を圍む瓊城の將に破れんとするを知り妻妾を手刃し舟に乘て大明湖に入り自ら水中に投ず水淺くして死する能はず元兵の爲に獲らる史天澤之を殺す蓋文炳經略使と爲り山東以て安しとあり波斯人羅古人などは哈必齊のことをアゲルといひ史天澤をマンゲクダイといひしにはあらざるか尙後の考を待つ

第五十三章

シンゲイマッ府

ッヂンフ(濟南府)より南の方へ三日進み行けば其間商業工業の盛なる幾多の市街要塞地を過ぐ人民は象教徒にして帝の臣民なり國內山禽野獸に富み食料に供して餘あり三日の行路を終れはシンゲイマッ府(濟寧州)に達す(一)重要華麗の一大都會にして商品製造山積す此府の居民は總て象教信徒にして皇帝に臣屬し政府の紙幣を通用す其驅內殊に其南部に水深き一大河あり居民は之を二支に分つ一支は東方に流れて乞觧(北部支那)の境を過ぎ一支は西流して蠻子(南部支那)驅內の方に通過し去る(二)此河水を往來する船舶其數甚だ多く舉げて算ふべからず南北兩地間の運輸の交叉點にして日用必需品有無相通の關鍵なり日夜霎時の間斷なく貴重の商品を積て來往織るが如き船舶の多きと大なるとを見る時は何人も驚かざるはなしシングイマッを去て南行十六日其間斷えず數多の商市城街を過ぐ國內通じて象教を信奉し元帝に服屬し死體を火葬し政府發行の紙幣を通用す八日にしてリングイ府(沂州)に達す(三)甚だ重要なる大都會なり人民尙武の風ありて工業商業盛なり鳥獸多く產し各種の飲料食品に富むリングイを去て南に行くこと三日多くの都市城邑を過ぐ皆帝の治下にして居民總て象教を奉じ死體を火化す此三日の行路を行き了ればピングイ(邳州)と稱する良都會に到る(四)日用の諸品一も備らざるはなく朝廷に納入する貢租極て巨額に達す之より豐饒佳良なる數州を過て南行二日程シングイ(宿遷)と名くる一大都に達す(五)商工の業甚だ盛昌なり住民皆な象教宗徒にして死屍を火葬す紙幣を通用し元朝に服從す土地米穀小麥の產に富む之より進み行けば都府市街城邑數多あり國內極て綺麗なる有用の犬あり小麥を產すること

多し人民は都て上文の諸國の者と相似たり

(一)(案)シンゲイマツはモルレイ及びポウシャ兩氏の説に據れば濟寧州の事なりマツは馬頭(マトウ)にて運河の通商港を謂ふと其れ或は然らん

(二)(案)一大河とは運河を謂ふなり江南徐州府の沛縣より入り來て濟寧州の西を過ぎ北の方德州に至り直隸に入り天津にて白河に合す

(三)(案)リンゲイ一本にリンジュとありモルレイ氏は臨城縣(リンチンシエン)のことゝすれど臨城は南北陸路經る所の一驛に過ぎず今の嶧縣(イエキエン)は金には嶧州として州治を蘭陵縣(ランリンシン)に置けり或は蘭陵の訛したるにはあらざるか重要なる大都會とあれば沂州府は唐以來臨沂縣(レンイエン)を以て州治若くは府と爲したればリンイヤウの訛してリンジウと成りしにて方位は少し離れたれど沂州を謂ふにはあらざるか

(四)(案)ピンゲイは一本にピンジュとあり江蘇省徐州府邳州(ペイチヤウ)の訛なり運河の東岸に在り

(五)(案)シンアイは一本にシジュとあるを其とす徐州府の宿遷(スウチエン)を謂ふなり舊時の泗州(シシヤウ)の地なればシジュと稱するは誤にあらず運河其西北に在て張家巡口に至り中河水に接す

黄河及び淮安府と清河縣

第五十四章

大河カラモラン及びコイガンズとクアンズの兩府

二日程の旅行を終れば再び大河カラモラン(黄河)に達す(カラジャン即ち雲南に赴く時一回此上流を渡りたり)其源は法師王ジョンの所領地に發す河身廣きこと一哩にして深きこと最も甚し大船巨船十分の荷を積て航行すること自在なり(一)無量の大魚多に漁獲せらる此河の海口より凡そ一哩程上りたる處に停泊港あり一萬五千艘の船を繫留す而して其船は何れも馬十五頭人員二十名其外之を艤裝する船員及び之に相應する需用品食料等を積み得べき者とす(二)是れ帝が命じて常に之を艤裝準備し一朝近海の島地に一揆謀叛の起ることあるか若くは遠隔の地に遠征を要することあるに當り直に兵員を送るの用に備へんが爲なり此等の船はコイガンズ(淮安府)を距ること遠からざる河岸に接近して停泊し居るなり(三)其對岸にクァンズの市街あり前者は大都會にして後者は小なり(四)此河を渡れば乞解(キカイ)の地既に盡て身は初て有名なる蠻子(マンジ)(南部支那即ち宋の舊領地)の疆内に入るなり但此迄說き來りし所にても乞解地方の事は既に盡きたりと速了せざらんことを要す余が述べし所は僅かに二十分の一にして只予が當時旅行せし通路に當りし市府のみに止まる其左右各方に在る市府や若くは中間に在る幾多の土地は悉く皆な說き漏せしことゝ知るべし若し之に說き及ばゞ大卷巨册と成つて讀者の疲勞を招ぐこと多きを恐るればなり故に蠻子(マンジ)地方に就ても右に類する各地は暫く措て說かず先づ其地方の大體を說明し而して後其都府に及び話說の序に隨て之を述べんとす

(一)(案)カラモランは黄河の蒙古名にて黒河の義なり黄河の河道は古より變移常なく有史の初には二派に分れて直隸灣に注ぎ其最も北なるは現今の天津の下部白河の河道に依て流れしものゝ如く此二派の外に南の時には南の方に一派分れて濟河の方に流れ濟南府を流るゝ濟河即ち近古迄大清河と名けし者に會せしが周に至り一派起り河南開封府より東南淮河の方に赴き淮南の北を流れて海に入れり現今の地圖に淡黄河と記して其形を存するもの即ち是なり然るに魏晉の頃には專ら濟河を單獨の河道として流れ蒙古の時に至る迄は此大河水の大部分は直隸灣内に注入せしが乃ち蒙古の頃に及で其河道全く淮河の方に轉移して專ら之に由て海に注ぐことゝ爲れりマルコポロが漫遊の頃は既に此河道を流れて近世迄は其儘存續し而して山東方面に向ふ水は黄河上流より來る泥土を淤積して洲嶼を爲し山阜を形成し海の方への出口は或は時に此山地の南に移り或は時に北北に變じたり元末に至り河道を直隸灣に注入する舊道に復せんと企畫せしが怨嗟の聲四方に起り元の亡滅も幾分か之が爲に速度を加へたりといふ現朝の咸豐元年に至り黄河暴漲して開封府の東大約三十哩の地點に於て其北堤を破り續て二年三年の洪水にて益北破壞を大にし六百年を經て再び直隸灣に向へる舊河道に復し山東四南部の低地を過ぎて運河に達し濟寧河に入り濟南の北を過ぎて海に達するに至れり當時マルコポロの渡過せし舊河道は全く堰沒して多くは耕地に變じ多數の村落も亦隨て點々散在することゝなり清江浦(チンキヤンプ)の如き大市場も愈に舊時の南岸より擴張して遂に北岸に及ぶに至れり此河道の大變化に由て運河も亦破壞せられ臨城縣の南數里の間は航通自在の水路と成れり

(二)一萬五千艘とあるは過多に失するに似たり蓋し傳寫の誤なるべし伊太利の舊搨要本には十五隻とあり然れども是は餘りに反對に過少に失せり如何にや停泊港も一本には海口より一日程の地とあるもあり

(三)コイガンズは位置と名稱の相類する上より考ふれば淮安(ホワイガン)府たること論なし是は淮河の東南岸に在て運河線之を横殺り小切割を以て河水と相會する處なり

(四)(案)クァンズ一本にはカイゲイ又カイクイとあり海州(ハイチウ)の訛とも見ゆれど夫にては地理懸隔して實に稱はず昇首鎮(カイチウ)か

と見れば昇は寶應の南に在て淮安の對岸にあらずユール氏は河道の變に因て他に轉ぜしものなるべしと云へり河道變轉前の圖志に據るも似よりたる地名あらず細かに查搜するに淮安府の對岸には清河縣(チンクホ)ありき大清一統志に清河縣城の舊趾は黄河の北岸に在り元の至元十五年に築き南の方小清河に枕せり乾隆二十六年山陽縣の地を拆て清江浦運河の南岸に移し趾つとあり其舊趾こそ即ち著者の所謂クァンズたりしに似たり

宋朝の滅亡

第五十五章

貴重なる蠻子(マンジ)地方(南部支那即ち宋の領地)及び帝の之を征服せし方略

蠻子(マンジ)の疆域は世に東洋の極富極美の地と稱せらる(一)一二六九年頃はファクフルと尊稱せし帝王の領有せし所なり(二)其勢力と富力とに於ては前百年間其地に在位せし諸帝に比すれば迥に超絶せし君にして其性和平其行仁慈士民皆な之に悅服し大河四境を繞て國力强盛地球上の人にては之を侵さんとするも到底不可能の事と稱せられたり當時世の評説既に此の如くなりしより其結果として帝自分にも自ら兵事に惰て心を此に留むることなく國民にも武技を習錬するに勉めしめず版圖内の都府は何れも嚴重に城壘を築き深き溝を以て圍み各方共に射程の廣さありて充分に水を湛えたり帝は之に頼て敵の來襲は永遠有得べからざる事と思はれて騎軍を養ひ兵力を蓄ふことには毫も意を致さず其常に心を用ひ慮を費す所は專ら淫樂を盛にし歡娛を增さんとする事のみに在

りて宮中常に大約一千人の美婦を蓄へ絶えず其傍に侍せしめて以て一身の歡樂を極めたり帝は實に平和と正義の愛好者なり乃ち嚴に之を施行し之を管理せり苟も人にして如何の事たるを問はず些少たりとも他人を抑壓し若くは損害を加ふる事あれば其人の位階を問はず公正の法を以て之を罰せり假令ば貨物を堆積せし商舗ありて其主人の不注意にもせよ明放しの儘ありし時何人たりとも此に侵入するを許さず些少の品なりとも之を盗み去るものあれば必ず之を罰す是れ實に帝が正義を重ずるより致す所なり諸方より集る各種の旅人も邦内到る處夜といはず昼といはず聊も危害を受くるの虞なし帝は最も宗教心に富み鰥寡孤獨貧窮の者を恤み母親困窮して養育の力なき小兒を救て之に助力を與ふるもの年々二萬以上に到る而して此輩其年頃に成長すれば手技手工を學ばしめて後男女相配して夫婦たらしめたり(三)

(一)(案)蠻子とは南部支那一體を稱する名にて當時宋朝の領地即ち當時の黄河以南の地なり(ペルシヤ)ふなり波斯人の所謂摩秦の轉訛なり摩秦は印度人が南部支那を摩訶秦(マハチン)といひしより轉ぜし語にて大秦國と云ふ義なり而して黄河以北の地即ち契丹が金朝より奪略せし北部支那は總て之を乞歸(キタイ)と稱するなり蠻子(マンジ)又南紀(ナンキアス)斯とも稱ふ南朝の變音にて即ち南宋の謂なり

(二)ファクフル又ファグフル又バグブルともいふ往時波斯人亞剌比亞(ペルシヤ アラビア)人が支那帝を稱するに用ひし語なり波斯(ペルシヤ)語にて支那の天子を譯せしなりバグブルは天神の子の義とす即ち當時の宋の天子度宗皇帝を指すなり

(三)(案)度宗位を嗣て以來酒色に耽り手を權奸賈似道に拱し衰弊甚しきを致せり本文云ふ所史と相同じ

蒙古の皇帝忽必烈(クブライ)可汗の性質習慣に至てはファクフルとは雲泥の相違なり其終生の樂は悉く軍事の上に在て諸國を征服し領土を擴張せんとするの思想ならざるはなし既に無數の邦國を略して日に月に版圖を大にし今は蠻子(マンジ)の全體を征せんとするの意を以て之が爲に騎歩の大軍を招集し其名をチンサン、バヤンといへる將軍に指揮の權を委任せり バヤンとは百眼(ひやくまなこ)の義なり(四)此役は一二七三年の事にて無數の船を艤裝して其指揮の下に置き之を以て蠻子(マンジ)地方の襲擊に進ましめたり既に蠻子の地に上陸するや直にコイガンズ(淮南府)に進入し居民に降を勸め其從はざるや直に之を攻擊すべきを令すべきに左はなくして其儘次の市府に進み又其勸諭に從はざるを見て第三に進み第四に進入せしも其結果何れも同じかりしかば最早其背後に許多の都府を敵國の儘殘し置くは其軍の力の强大なる上に更に帝の命に由り内地より同數の新兵力を加ふること近きに在るにもせよ隨分危險の事と思ひて先づ一府を攻擊せんと決し大なる活動と神出鬼沒の方略とを以て之を蹂躙し府内の居民は一切之を屠り盡せり其風聞早くも他の諸都府に傳播するや各地の士民驚愕一方ならずして魂魄に附かず自ら進て急ぎ降伏せんことを申出せり是に於て遂に新舊の兩軍を合せてファクフル帝の禁城たるキンサイ府に進軍せり(五)ファクフル帝は未だ曾て戰爭の何物たるを夢見せし事もなく況して如何なる兵事にも關係せしことなき人なれば斯る人の常として周章狼狽の狀其極

に達し只管身の安全のみを計らんとて豫め變事に備へ置きし船舶に一切の財寶貴重の動產を積て遁逃し府內の事は擧て皇后に委任し力の及ぶ限り終極迄も之を防禦せんことを命せられたり蓋し皇后は女性なれば假令敵手に落ることあるも自ら其身を保つに足るべしと思はれたればなり夫より帝は海に出で要害堅固の一島に達し崩殂の時迄は島中を以て行在所と爲られたり（六）皇后は右の如くにて後に殘され玉ひしが其後世に百眼を有する首領ありて出で來ることあれば格別なり然らざる限は何人といへども帝の皇位を奪ふことは必無なりと曾て占星者より帝に奏せしことある由を聞き玉ひしを以て此言を信じて大に其意を强くし都府は日々夜々に窘迫緊縮せらるゝにも拘はらず天地間の人類にして眼を百箇も持てる者は到底あるべき事に非ずと思ひ定めて都は決して陷落せざるものと確信せられたり然るに敵軍を指揮する將軍の名を問はれしに开はチンサン、バヤンとて百眼の意義なる由を聞かれ驚愕一方ならず占星者の預言の如く皇帝をして帝位を失はしむる者實に此人の上に在りと信じ婦女子の情として周章狼狽に甚しく最早拒禦を爲すの氣力もなくして直に降伏せらるゝことゝなれり蒙古軍は斯くして京城を略取し引續て其餘の市府城邑を服從せしめ皇后は忽必烈帝の方に送られたり帝は之を待つに尊崇の禮を以てし其位階の尊榮を支ふるに必要なる手當を給せり燈子地方一帶の征討は此の如くにして實行せられたり今は將に此地方の各都市の事を述べんとするに先づコイガンズ府を擧げ論ずべし

（四）（案）チンサン、バヤンは中書左丞相伯顏を謂ふなりチンサンは丞相（チャンクレヤング）の訛なり伯顏一に巴延にも作る伯顏は蒙古巴林部の人にて波斯に在て宗王旭烈兀（フラク）に事へ（至元二年入て事を奏せしに忽必烈（クブライ）帝其形の偉なると言の厲きを見て此は諸侯王の臣に非ずとて遂に留て國政を與り議せしめ至元十一年（一二七三）右相より左相に進み史天澤と倶に諸道の兵を總べたりしが天澤は病にて召還されしを以て諸軍總て伯顏の節制に聽（まか）せられ十三年に至り臨安府を下して宋遂に亡びたりバヤンは蒙古語にて富の義なり姓となりて其音譯は卜顏とも孛顏ともあり通例史文には伯顏とあり本文百眼の奇談あるを見れば當時宋人は伯顏を百眼とも記したるものか开は兎もあれ支那蒙古其他の言語に通じたる著者の言としては餘りに滑稽の沙汰といふべし或は後人の想像より成る攙入說なるやも亦知るべからず

（五）（案）キンサイは京師（キングチエ）の訛なり臨安（リンガン）を稱す今の杭州（ハングチヤウ）府なり

（六）（案）此條は史の事實と合はず著者の遺忘より出でたるなるべし元の兵を宋に出し其襄陽等を陷れしは度宗の時なれども度宗帝は至元十一年甲戌の七月を以て崩じ繼で位に即きしは年僅に四歲の恭宗陽（ヤン）といへる帝の次子にて謝太后朝に臨て政を執れり故に伯顏（バヤン）の兵を率て浙に入り江を濟り諸州を攻略せしは之と同年なれど一箇月後の事なり而して帝都臨安を下し帝及皇太后全氏等を以て北に去りしは至元十三年丙子なり是に於て度宗の長子益王昰（ヒ）福州に在て位に即きたれど元兵に迫られ海舟に乘て潮州に走り惠州の甲子門（今の海豐縣の東海口）に次（やど）り表を奉て元軍に降り十四年丁丑九月潮州の淺灣に遷り又廣州の虎頭門に走り南海中の井澳に至り七里洋に奔り高州府外の海中硇州に漂泊して遂に卒し其弟昺之に嗣ぎ廣州府大海中の厓山に遷る厓山は鉅海中に在り奇石山と相對立して兩厓の如く潮汐の出入する所なり固より鎭戍あり以て天險と爲し扼して以て自ら固むべしと爲せり官民兵は多く舟に居れり十六年己卯二月兵既え海に赴きて死す宋統遂に絕ゆと支那の諸史に出づる所皆な此の如し是に由て之を觀れば舟に乘て海に入りしは無論度宗にてはなく其子の恭宗にてもなく其庶兄なる益王昰と

に達し只管身の安全のみを計らんとて豫め變事に備へ置きし船舶に一切の財寶貴重の動產を積て遁逃し府内の事は擧て皇后に委任し力の及ぶ限り終極迄も之を防禦せんことを命ぜられたり蓋し皇后は女性なれば假令敵手に落ることあるも自ら其身を保つに足るべしと思はれたればなり夫より帝は海に出で要害堅固の一島に達し崩殂の時迄は島中を以て行在所と爲られたり（六）皇后は右の如くにて後に殘され玉ひしが其後世に百眼を有する首領ありて出で來ることあれば格別なり然らざる限は何人といへども帝の皇位を奪ふことは必無なりと曾て占星者より帝に奏せしことある由を聞き玉ひしを以て此言を信じて大に其意を强くし都府は日々夜々に窘迫緊縮せらるゝにも拘はらず天地間の人類にして眼を百箇も持てる者は到底あるべき事に非ずと思ひ定めて都は決して陷落せざるものと確信せられたり然るに敵軍を指揮する將軍の名を問はれしに开はチンサン、バヤンとて百眼の意義なる由を聞かれ驚愕一方ならず占星者の預言の如く皇帝をして帝位を失はしむる者實に此人の上に在りと信じ婦女子の情として周章狼狽俄に甚しく最早拒禦を爲すの氣力もなくして直に降伏せらるゝことゝなれり蒙古軍は斯くして京城を略取し引續て其餘の市府城邑を服從せしめ皇后は忽必烈帝の方に送られたり帝は之を待つに尊崇の禮を以てし其位階の尊榮を支ふるに必要なる手當を給せり蠻子地方一帶の征討は此の如くにして實行せられたり今は將に此地方の各都市の事を述べんとするに先づコイガンズ府を擧げ論ずべし

（四）（案）チンサン、バヤンは中書左丞相伯顏を謂ふなりチンサンは丞相の訛なり伯顏一に巴延にも作る伯顏は蒙古巴林部の人にて波斯に在て宗王旭烈兀に事へ至元二年入て事を奏せしに忽必烈帝其形の偉なると言の厲きを見て此は諸侯王の臣に非ずとて遂に留て國政を與り議せしめ至元十一年（一二七三）右相より左相に進み史天澤と俱に諸道の兵を總べたりしが天澤は病にて召還されしを以て諸軍總て伯顏の節制に屬せられ十三年に至り臨安府を下して宋遂に亡びたりバヤンは蒙古語にて窘の義なり姓となりて其音譯は卜顏とも孛顏ともあり通例史文には伯顏とあり本文百眼の奇談あるを見れば當時宋人は伯顏を百眼とも記したるものか并は兎もあれ支那蒙古其他の言語に通じたる著者の言としては餘りに滑稽の沙汰といふべし或は後人の想像より成る撰入説なるやも亦知るべからず

（五）（案）キンサイは京師の訛なり臨安を稱す今の杭州府なり

（六）（案）此條は史の事實と合はず著者の遺忘より出でたるなるべし元の兵を宋に出し其襄陽等を陷れしは度宗の時なれども度宗帝は至元十一年甲戌の七月を以て崩じ繼で位に即きしは年僅に四歲の恭宗帝といへる帝の次子にて謝太后朝に臨て政を執れり故に伯顏の兵を率て浙に入り江を渡り諸州を攻略せしは之と同年なれど一箇月後の事なり而して帝都臨安を下し帝及皇太后全氏等を以て北に去りしは至元十三年丙子なり是に於て度宗の長子益王是福州に在て位に即きたれど元兵に迫られ海舟に乘て潮州に走り惠州の甲子門（今の海豐縣の東海口）に次り表を奉て元軍に降り十四年丁丑九月潮州の淺灣に還り又廣州の虎頭門に走り南海中の井澳に至り七里洋に奔り高州府外の海中碙州に漂泊して遂に卒し其弟昺之に嗣ぎ廣州府大海中の厓山に還る厓山は鉅海中に在り奇石山と相對立して兩岬の如く潮汐の出入する所なり固より鎭戍あり以て天險と爲し扼して以て自ら固むべしと爲せり官民兵は多く舟に居れり十六年己卯二月兵隙を窺海に赴きて死す宋統遂に絕ゆと支那の諸史に出づる所皆な此の如し是に由て之を觀れば舟に乘て海に入りしは無論度宗にてはなく其子の恭宗にてもなく其庶兄なる益王是と

之に瞞で立ちし衛王昇の二人なれば木文直に度宗の如く説きしは疎雑甚しきに似たり

第五十六章

コイガンズ府

コイガンズ(淮安府)は南東と東との間にある極て華麗富有の都會にて蠻子疆域の首端に在り其位置は既に前に述べたる如く大河カラモランの河岸に近きを以て無數の船舶來往絶間なく許多の委託商品一旦此府に入り來り而て此河水に依て各地方に輸送せらる當地食鹽產出の量夥しく曾に地方の消費に供するのみならず諸方へ輸出する者も亦多し政府之に由て巨額の歲入を獲るなり(一)

江蘇省淮安府

(一)淮安府は黃河を距ること大約五哩なり大運河を以て其間を連絡せり土地低く運河の水平以下に在り

第五十七章

バウギン市

コイガンズ(淮安府)を距て東南に行くと一日程道路石を甃きて甚だ綺麗なり乃ち蠻子の疆域に入る甃道の兩側に甚だ廣き湖水あり水深くして航通の便あり(一)此一路を除きては蠻子地に通ずる道なし然れども舟路の便に依れば交通甚だ便なり蒙古の大軍を指揮せし大將軍が全軍を率て上陸し以て之を襲擊せしも都て此舟路の便に由りしなり一日の行程を終れば著明の一都會バウギン(寶應縣)に達す(二)居民皆な象教を信じ死屍を燒き紙幣を通用し元廷に臣從す工商を以て生業とし多く繭絲を製し金襴を織る生活必要の品一として豐富ならざるはなし

江蘇省寶應縣

(一)案東に大縱湖あり西に寶應湖あり土地卑濕甃路を以て運河の堤防を爲し水平より高くして運河と湖水とを分隔す

(二)バウギン(バウイング)は寶應の轉訛にして江蘇省の寶應縣を謂ふなり

第五十八章

カイン市

高郵州

バウギン(寶應)より南の方一日行程を隔てゝ整齊廣大なる一市府ありカイン(高郵)と稱す(一)居民は都て象教徒にして紙幣を以て通貨とし元帝の臣民なり府內商工の業盛にして魚類に富み山禽野獸も亦夥し殊に雉の多きことはヴェニスの銀貨グロード一片に當る程の小銀塊を以て孔雀大のもの三羽を買ひ得るにて知るべし

(一)カインは高郵湖畔運河の東岸に在る高郵(カユ)州なることは明了なりカォユはカユに變じ語尾のUを誤てNとなり遂にカインと轉じたるなり高郵は低き地にして運河の水平より二十尺以下に在りて城壁は運河の對岸より見えざる程なり

泰州及通州

第五十九章

ティンゲイ及びチンクイの兩市

前章の市より一日程許多の村落と田圃間を過てティングイ（泰州）と稱する一都會に達す（一）甚だ大ならずといへども人生必用の諸品は一として豐富ならざるなし居民皆な象教徒にして元帝に隸屬し其紙幣を通用す多くは商賈にして許多の商船を所有せり山禽野獸甚だ多し此市府の位置は東南の方に在り左りの方即ち其東の方三日路を隔てゝ海に達す其中間の地に製鹽場數个所あり多量の鹽を製す

（一）ティンゲイは泰州（タイチャウ）の轉訛せし者なり著者が旅行の路筋外にして運河の東二十五哩程の處に在り水路に依て交通自在なるに似たり

次に建設整備せし一大都府に達す之をチングイと名く（二）之より隣邦諸州に鹽を輸出し其需用に供して尚ほ頗る餘あり年々鹽稅を以て國の歳入に資する其高甚だ大にして殆ど信じ難き程なり此地の人民も偶像を信奉し元帝に臣從する者なり

（二）案）チングイは通州（ツンクチャウ）の轉訛せしものなるべし楊子江河口の北岸に在て泰州よりは三日路といふべき程の地に當るキングスミル氏は之を儀徴縣（イチンクヒエン）に當てたり音相似たれども其地は運河の西に在れば然るべからざるなり

第六十章

ヤンゲイ府マルコポロ氏甞て此府の執政官たり

チングイ（通州）を去り東南に向て進めば重要なる都會ヤングイ府に達す（一）此府は最も重地にして州縣二十四を領す元帝の版圖に屬せり居民は象教徒にして貿易工藝を以て生業とす各種の兵器諸般の武具を製造するが故に軍兵をして多く此地方に屯營せしむ府内には前に口述せし地方の行政官所謂十二大臣の一員在勤して陛下の命を帶て民を治む著者マルコポロは嘗て帝の特命を奉じて此任に在り三年の間此府の執政長官たりき

（一）案）ヤンゲイは楊州府（チングチャウ）たること論なし只其方位を東南とするは四方に向てといふべきを誤りたるなり此地は禹貢の楊州の域にて古は廣陵郡とも名けしが隋に至り楊州に改め總管府を置き其後唐宋を歷て元の至元十三年大都督府を建て江淮等の處の行中書省を置き翌年楊州路の總管府と改め十五年には淮東道の宣慰司に屬し十九年淮南行省を置き二十一年には行省を杭州に移せり著者マルコポロが此地に在て政治に關せしは至元十九年即ち西曆の一二八二年淮南行者を此に置きたる頃なるべし左れど當時マルコポロが淮南一路即ち江蘇一帶の總督たる重職に在りしとは思はれず蓋し或は楊州府尹位のことにて牧民官の一部に在りしには相違なかるべしユール氏も此一條は傳聞者の誤聽より出でたるものと爲せり官制の事は第二篇第十九章の註釋に出せり

安徽省安慶府

湖北襄陽府

第六十一章

ナンギン地方

ナンギン(安慶)は西方に在る蠻子(マンジ)疆域内の著明なる一大地方なり(一)居民は皆な象教徒にして元帝の臣民なり盛に商業貿易に從事す生絲を製し各種の模樣の金襴銀襴の類を織出すこと甚だ多し五穀の產出豐富にして家畜も夥しく狩獵に供すべき禽獸の類も多し虎豹の類も亦少なからず貢租を納むる其高甚だ大なり殊に商賈の貿買する貴重なる諸品より徵收する所を以て最とす

次に宏壯なる都府サヤン府の事を述ぶべし

(一)(案)ナンギン(ガンギング)は安慶の轉訛せしものなるべし今の安徽省の安慶府は元には安慶路として總管府を置けり楊州よりは正に西方に當れり

第六十二章

ニコロポロ、マフェポロ兄弟二人の獻策に賴て略取せしサヤンフ府

サヤンフ(襄陽府)は蠻子(マンジ)疆域内の著明なる都會なり其下に富有廣大なる州郡十二を領せり(一)商業工業最も盛大に行はるゝの地にて居民は死體を火葬し象教を信奉す元帝に隷屬する臣民にして其發行の紙幣を通用す生絲の製產甚だ夥しく金線を交へし至美精好の絹織物を製す諸種の鳥獸多し大都たるに必要なる事物は一として具足せざるはなく他の蠻子(マンジ)の地方は元に降伏せしにも拘はらず三年の間攻圍を受けて能く其久きに耐え帝の攻略する所と爲らざりしも畢竟其力の非常なりしに因るなり殊に之を攻め落すに困難なりしは城の北方を除くの他は軍兵をして近つくを得ざらしめしに由る是れ他なし城の三面は水を以て繞らし其便に由て絶ず城中へ物資の供給ありて不足を告げず之を妨ぐるは攻圍軍の力に能はざりし所なればなり(二)此情報の帝に達するや他の諸國は既に已に悉く征服せしに獨り此地のみ久しく抵抗して降らざるとは如何にも心外の至りなりとて叡慮を惱まし玉ふこと甚しかりき時に帝宮に滯在せしニコロ、マフェオの兄弟の聞く所となり兩人直に帝に見えて奏しけるは西國には目方三百斤の大石を投げて能く府内の家屋を粉碎し居民を壓殺すべき機械あり其式に倣て建造せんと欲す勅許あらん事こそ願はしけれと可汗其計畫を聞て叡感淺からず直に令を降して必要の材料を準備し熟錬の鐵工木工を選拔して兩人の指揮の下に置き玉へり其職工の中には最も工技に熟達せし二三の聶斯托爾(ネスタル)派の基督教徒も居たり數日の後兩人の指導に遵ひ工事完く竣りて數箇の大彈努(じゃるん)成れり乃ち帝と諸臣の前に於て試驗を行ひしに效果甚

だ著しく毎回目方三百斤の大石を投じて一失なきを示せり是に於て之を船に積み軍隊の方へ送り遣りサヤンフ(襄陽)府城の前面に据付けたり先其一壓に由て第一石を投せしに一屋宇の上に落下し其重量と彈飛の勢とに由て屋宇は十の八九迄破碎壞倒せり之を見たる城中の人々は驚愕一方ならず大雷一時に天より落ち來るものと爲し速に降伏するには若かずと一統評決を爲すに至れり因て款を納るゝの全權委員を送りしに他の各地に許可せられし者と同一條件の約束にて降を納れられたり此異常なる妙計の好結果を現はせしに由て兩ヴェニス人の名聲一時に雷の如く轟き信用平生に倍加し來りて滿廷君臣の賞贊口を絶たざりき

(一)(案)サヤンフ府は湖北省の襄陽府(シヤングヤングフ)の訛なり兩漢以來襄陽郡の地にて元には河南江北行省に屬し明には湖廣布政司に屬せり今は一州六縣を領す

(二)(案)兄弟二人が忽烈帝(クブライ)の命を奉じて羅馬法王に使してパレスチンのアクルに著せしは一二六九年の四月なり法王クレメント第四世の寂せしは其前年(一二六八)の十一月グレゴリー第十世が嗣て法王の位に登りしは一二七一年の九月なれば兄弟二人が此法王より帝への返信を受てアクルを出發せしは其年の末よりは早き筈なし之より本文にあるが如く旅行三年半を經て北京に達せしものとすれば一二七四年即ち元の至元十一年の冬迄は兩人共元帝の皇居に至りし筈なし左れば支那の歴史に信據して襄陽の陷落を至元十年二月とすれば兩人の北京着は襄陽陷落の一年半餘の後となる之を事實とすれば本文マルコポロの口述せし所は痴人の夢の如くなるべく若し亦其述べし所を實とすれば本文に嚮に途中に三年半を費やせしとあるを一年半か二年に短縮するか然らざれば襄陽の陷落を支那の史に載する所よりも二年程後に在りし事と爲さざるべからず宋の領地中に於て此地は最後に降伏せりと著者が反覆斷言する所を見れば其陷落が其實二年後なりしやも亦知るべからず今左に通鑑輯覽を拔萃して參考に供す至元四年(一二六七)十二月襄陽を取らんと欲して先づ河南南陽府の白河口に城く五年(一二六八)九月阿珠劉整船五千練卒七萬を以て圍城を築き襄陽に倍る六年(一二六九)正月諸路の兵を括り襄陽の師を益し長圍を築き久駐必取の基を立つ十年(一二七三)元將阿哈雅(阿鶻人)樊城(アンチング)を攻め四域人獻する所の新礮法を得て遂に外郭を破る二月之を移して襄陽に向ふ一礮其臨樓に中る聲震雷の如し城中恟々諸將城を踰て降る者多し阿哈雅(アルハヤ)乃ち城下に至り元主降す所の詔諭を宣す詔に曰く爾等孤城を拒守する今に五年力を爾が主に竭る固より其れ宜し然ども勢窮り援絶ゆ數萬の生靈を如何せんや若し能く款を納れば悉く赦して治ることなく且還擢を加へんと城將呂文煥乃ち出でゝ降り阿珠襄陽に入るとあり此文に據て考ふれば初て新礮法を用ひしは襄陽にあらずして樊城攻圍の時なり而して其礮法を西域人より獻ぜしも必ずしも樊城攻圍の時とはいはず或は其以前の事なりしやも知るべからず然れば則ち兄弟兩人が初て元廷に著せしは恰も帝が襄陽を取らんとて白河口に城を築きし頃なれば或は其時の献策なりしを本文には遙かに後の事となりしにはあらざるか今は何れとも分明なり難し

眞州即ち今の儀徴縣

第六十三章

シンゲイ市及び大江

サヤンフ(襄陽府)を去て東南に進むこと十五日程にしてシンゲイ市に達す(一)甚だ大ならずと雖も商業繁昌の地なり此地に屬する船舶は實に驚くべき程多數なり是れ其位置世界第一の大河なる

大江に接近し居るが爲なり江の廣さ十哩に及ぶ處もあり八哩六哩の處もあり其長さに至ては海に注ぎ入る處迄百日の行程以上に及ぶ此江の斯くも洪大なるは遠き國々より發源せし無數の河水何れも舟行に適する程のもの處々より來て之に會流するに由るなり（二）兩岸には許多の都市大邑ありて羅列し其數二百以上に及ぶ州郡の數も十六を算ふ何れも此流域に立て舟楫交通の便あり商品の運輸實に盛大を極め現に之を目擊せし者にあらざるよりは其數量を聞ても信を證かざる程なり然れども其河道流域の長きと之に會流する河水の多きとに思ひ至らば東西南北遠近の各地各處に運搬供給する物貨の無量なる價金の莫大なる容易に算へ得難しといふも過言にはあらず中に就て其最もなるは食鹽なり當に大江の便と會流する河水の利とに由て兩岸の各地に運搬し去るのみならず夫より再び內地遠隔の處々に輸送し行くなりマルコポロ曾てシングイ市に在りし時一萬五千艘に下らざる船を見たりといふ而して尙此外沿岸の諸市諸港に繫留し居る船を算ふればシングイ市に在るものよりも更に一層多數なるべし此等の諸船は一種の甲板を以て覆ひ一墻一帆のみを具ふるに過ぎず其載量は普通大約ヴェニスの四千カンタリにて中には其以上一萬二千カンタリに至るものもあり（三）船中には檣と帆との（動索不動索）に麻綱を用ふるのみにて其外麻製の綱具を用ふることなし土地最も多く籐を產す既に前にも論せし如く長さ十五歩に至る者もあり甲端より乙端迄縱に割て極て薄き片と爲し綯りて長さ三百歩の綱に作る其製極めて巧妙にして力能く麻製の物と相匹敵す各船何れも流に溯る時は此綱を用ひ十馬又は十二馬を繫ぎ魚貫して之を曳かしむ此流域には處々岸邊に丘山巖岡發え立ち上に寺觀浮圖の見るべきものあり人家村落の絡繹するもあり

（一）（案）シングイは眞州（ヒンチャウ）の訛なり漢の廣陵江都二縣の地にて宋の大中祥符六年初て眞洲と爲す明の洪武三年改て儀眞縣（イチンヒエン）と爲し淸の雍正に至り儀徵（イチンヒエン）縣に改む本背地名を訛してシングイと稱する者三處あり其一上篇第五十二章にあるは四夏の四寧州の訛なり其二は即ち此眞州なり其三は次の六十七章の蘇州にして即ちスチャウを訛したるなり尙其章に辨すべし

（二）（案）大江一に揚子江と名く源を四川省の西北松潘衛の邊外なる峨山に發し南流して叙州に至り金沙江に會し東流盧州に至て沱江來り會し東北に流れ重慶に至て淸水と嘉陵江白水江渠江の三巨水と會し涪州に至り涪陵江南より來り入り夔州を過ぎて瞿塘峽と爲り白帝城の南を經て灩澦堆と爲る江流中至險の處なり巫山の北を過ぎ東南流して湖北の界に入り巴東三峽と爲る宜昌荊州沙市を經て岳州の北に至り澧水沅江湘江資水の四巨水の會流せし洞庭湖に通じ東北流して漢陽と武昌を過ぎ漢水四北より來り會す之を漢口と曰ふ東南流して黃州を過ぎ大冶の東北黃石港を經て江西の界に入り川幅頓に廣く波濤澎湃なり鄱陽江と謂ふ又九江と名く彭蠡湖の大水を受けて東北流し江南の界に入る安慶池州を過ぎ蕪湖を經て太平府に至り尙ほ東北流して江蘇の江寧即ち金陵を過ぎ東流して儀徵に抵る東北の運河臨江津を控て南北往來利涉の處なり鎭江に至り南方の運河來り會し杭州地方に通ず瓜州に至り金山屹として江中に峙つ其東に漁山あり皆な江中の形勝と稱す儀徵より瓜州に至る實に天下の吭口を占め百貨漕運の關門たり之より下江陰通州を過て遂に海に入る源頭より此に至る實に經度に於て十八度の差あり流域の長さ殆ど千百五十里に過ぐ（案此里七千六百六十里）

(三)一頓はヴェニスの二十カンタリに當る故に四千カンタリは二百頓にて一萬二千カンタリは六百頓なり

第六十四章

カインゲイ市

カインゲイ市は前述の大江の南岸に在る一小都會なり米麥諸穀年々爰に聚るもの其量甚だ大なり而して其大部分は爰より大部に運輸して帝京の需用に供す(一)蓋し此地は河水湖水に依り且甲乙兩大河を連絡して船楫の便を通せんが爲に勅に由て開鑿せし廣濶深水の河水とに賴り敢て路を大洋に取て危險を侵すことなく舟行安全に蠻子(マンジ)の諸州即ち南部支那と乞歹(キタイ)の諸州即ち支那北部とを交通する要衝に當る處なり其工事の壯大なる人をして驚歎せしむ國の內部を貫通するに費やせし大工力と其延長廣袤の洪大なるとに人々の驚くのみならず尙其沿道無數の都市州郡に大利便を與へ大効益を爲すを知るに至ては殆ど驚倒せざるものなし其兩岸には强固濶大の高堤あるを以て是れ亦人をして陸路旅行の至便を得せしむ江中カインゲイ市に對する處に一島あり全體岩より成る上に一大寺院あり僧侶二百常に玆に住し偶像に事ふる勤務を怠らず是れ一宗の本山にして他の許多の寺院僧舍の上に在て之を管轄す(二)

瓜州鎭

次にチャンギャンフと稱する都會を述ぶべし

(一)(案)カインゲイは一本にはカイシヲとあり又東南の方に在りに作る宜しく從ふべしカイはクワの轉訛にして瓜州(クワチヤウ)を謂ふなり前章の眞州即ち儀徵縣より東南に當るなり共に江の北岸に在り本文南岸に在りに作るは當初マースデンの誤譯なり大清一統志に瓜州鎭は江都縣の南四十里の江濱に在りといひ元和郡縣志に昔は瓜洲村たり蓋し楊子江中の沙磧なり沙漸く漲出して狀瓜の字の如く遂に楊子渡口に接す唐の開元以來漸く南北咽喉の處となるとあるもの是なり居民商賈湊集の地とす運河の一支此地の四南に至り江に入る江南の糧を運び來て運河に入る門口なり

(二)(案)金山を謂ふなり寺あり江天寺と稱す通じて金山寺と名く妙高臺留雲亭の勝あり

鎭江府

第六十五章

チャンギャン府

チャンギャン府は蠻子(マンジ)地方の一都會なり(一)民皆な偶像教徒にして元帝に臣屬し其紙幣を通用す貿易製造を以て生業とし一體に富有なり絹絲金線を以て錦繡を織る各種の禽獸多く狩獵に最も妙なり府內に聶斯托爾(ネスタル)派基督教の三大寺あり一二七八年の建立なり當時同派の僧馬兒薩剎(マルサルシス)といふ者勅命を奉じて三年間教務を統攝せり此等の寺は皆な此人の檢校創建する所に係る今に猶ほ依然として存在す(二)此地を去て次にティングイグイに說き及ぶべし

まるこぽろ紀行

(一)(案)一本にはチンキャンフとあり鎮江府を謂ふなり三國の時吳初め此に都し後秣陵に移し東日鎮を置く唐に丹陽と曰ひ宋に至て鎮江と曰ふ府治は丹陵縣に在り大江の東南に在り抗蘇川運の港口にて古より繁華の地なり

(二)(案)馬兒樂剎は阿昧尼亞其他東方の基督教僧侶中に普通に用ひらるゝ姓名と見えて現に唐の建中二年西安府に建立せし大秦景教流行中國碑の中にも同樣の姓名あり支那にて昔時景教といひしは羅斯托爾派の基督教のことなり

第六十六章

ティンゲイゲイ市

チャンギャンフ(鎮江府)を去り東南に行くと四日其間許多の市街城砦を過ぐ居民は何れも象教宗にて手工と商業を以て生活し元帝に服屬して其紙幣を通用す四日の旅程を終ればティングイゲイの市府に達す(一)市街甚だ大にして且綺麗なり多く生絲を產し各種多樣の絹帛を織る生活に必要なる諸物の生產夥しく山禽野獸も潤澤にして狩獵に妙なり但居民は其性卑劣にして殘忍酷薄なり丞相伯顏(所謂百眼)が此蠻子方面を征服せし時府城受領の爲に麾下の兵一隊と若干の阿蘭傭基督教兵をして往かしめたり(二)到れば則ち先づ大妨害に逢遇せり抑も此地は二重の城壁を以て圍み內城外城に分劃せり阿蘭傭諸兵は其第一の外城內に入り多量の良酒の貯へあるを見出せり久く行軍戰爭に從事して疲勞缺乏に苦みし者爭でか之を看過し得ん其渴を醫せんとて何の思慮もなく酣飲酩酊して前後も知らず熟睡せり內城に籠り居し市民は敵兵の地上に醉臥せしを見て直に出で來て盡く之を殺し一人も遁れ歸りたる者なし丞相伯顏は其派出軍の殺戮に逢ひしを知り憤怒忿恚非常に甚しく別に一軍を送て攻て其城を破り男女老幼の別なく悉く居民を屠り殺さしめ以て其讐を復せり(三)

(一)(案)ティンゲイゲイは一本にはチンジンジュとあり鎮江府より運河に沿て四日の行程を隔つる地といへば常州府たること勿論にて即ちチャンゲチャウフの轉訛せし者なるを知る

(二)(案)阿蘭你人一に阿蘭阿速といひ又單に阿速ともいふ漢書に奄蔡國其名を阿蘭聊國と改むとある者是なり之を四洋の書に徵するに春秋戰國の時裏海黑海の北に粟特族居住せり後に奄蔡族(突厥の一部)匈奴に逐はれ東方より來て粟特族に服屬し裏海の西高喀斯山の北に居て年久く國を傳へ後阿蘭と稱し又阿蘭你と曰ひ又阿思とも稱す成吉思汗四征の時哲別速不台二將の爲に征服せられ其後入て仕へし者多し

(三)(案)元史に至元十三年十一月(一二七五)元の伯顏常州に至り兵を會せて城を圍む城將力戰して固く守る伯顏人を遣して之を招くも終に聽かず伯顏怒て城外の居民を役し土を運て壘を爲さしむ土至り人を併て之を築き民を殺し膏を煎て油を取て以て礮を作り其牌杖を焚き日夜攻て息まず諸軍勇を奮ひ四面並び進む城遂に破る伯顏命じて其民を屠るとあれど元史譯文證補に元の世祖の時費尼斯國の人馬克波羅入て元に仕ふ著書に云く阿速人多く軍籍に入り天主教に從ふ伯顏江南を平らげ師常州に至る城將降らんと乞ふ阿速軍城に入る城中瓦礫を蓄ふること甚だ多し酣飲して醉て臥す兵民盡く之を殺して拒ぎ守る招降すれども從はず乃ち攻て其城を破り悉く其衆を屠ると元史伯顏傳の說と異なり而して城を屠りしは異ならず史書の紀述は時として私家の著錄の眞なるに及ばざることあり之を採て常州府志を補ふべしとあるは本文を謂ふなり

蘇州府及び浙江省湖州府

第六十七章

シングイ及びアジウの兩府

シングイは廣大華麗の都府なり周圍二十哩に及ぶ(一)住民は象教徒にして元帝に臣隷し其紙幣を通用す生絲の產出殊に夥しく之を製織して自己の消費に供す彼等皆な一般に絹布を纏ひ居るのみならず他の市場へも持出して販賣す居民の數驚くべき程多くして中には巨萬の富を有する者も少なからず然れども皆な卑屈怯懦の民なり專ら商賣製造を以て生業と爲すのみにて其他を顧みず若し彼等にして大に其氣力を發作し其才能を活用して以て進取の策を講じ剛毅の擧動を爲せしならば啻に燈子(マンジ)の全疆を服從せしのみならず更に他の方面に迄も其力を及ぼし居たらんも亦知るべからず此地良醫多く輩出し能く病性を審別して巧に對症の藥を投ず有名の學者も亦出づ即ち我輩の所謂哲學者流なり外に術士巫祝の輩も亦多し(二)附近の山には最良の大黄を產し全國に輸送す(三)生姜の生出も亦夥し此邦の貨幣大約ヴェニスの銀貨一グロートに中るものを出せば新鮮の物目方四十ポンドを得べし其賣買の價低廉なること此の如しシングイ府の治下には重要富饒なる郡縣市邑十六个所あり何れも工藝商業の繁昌地なり世人キンサイ(京師)といへば直に天の都と解するが如しシングイ(蘇州)といへば必ず地の都と解するなり(四)シングイを去て次はヅジウ府なり爰にも亦生絲の產出甚だ盛大にして商賣工匠極て多し州内最好精美の絹帛を製織して各地に搬出す(五)此地に就ては其他述ぶべき要件なし因て次に移り燈子(マンジ)驅内の主要の大都會キンサイの事を論ずべし

(一)(案)本篇第六十三章の註に論ぜし如く本書にはシングイを以て呼ぶ者三个所あり何れも輒誤ならざるはなし本章のシングイは蘇州(スチャウ)の轉訛せし者なり蘇州は周の初、吳の太伯の邑にして春秋の時は吳國の都なり漢書地理志にも吳に三江五湖の利あり江東の一都會なりとあるが如く川澤汪衍陸海の便あり稱して沃區と謂ふ人文最も開け歷代名士顯せし者多し三江は楊子江松江婁江を謂ひ五湖は大湖菅湖蓠湖洮湖滆湖を謂ふ其實は一湖なり

(二)(案)隋書にも君子禮を尙び道教隆治とあり此に謂ふ所は儒流道士佛徒を指すなり

(三)(案)土產は錦綾絹紗羅紵綵緞を以て主要とす未だ大黄を產するを聞かずユール氏曰く大黄は上海より輸出あれども上流の漢口より來る漢江は遠き西方の國より受るなりとマースデン氏曰く是は四夏の四寧を本書には同くシングイと誤稱せし故に此蘇州の誤稱シングイに混じ四寧の部に述べし文を此に誤入せしものなるべしと論じ得て明かなり

(四)(案)マースデン曰く著者稱〻用語に誤ありといへども支那の常語に頭上には天堂あり下には蘇杭ありといへるを引き來て天上地上の安樂國たるを形容せしに過ぎずと

(五)(案)アジウは湖州(ホチャウ)の誤稱なり浙江省の一府にして太湖の南岸にあり三國には吳に屬し吳興郡の地なり今の府治は烏程と歸安とに在り李心傳報國寺の記に蠶桑の富浙右に甲たり土潤て物豐かに民信ありて俗早かなりとあり綾紬綿絹を產出すること多く殊に綿絹は湖絹と稱して有名なり産も亦湖産の稱あり太湖は縱橫三百八十三里裏面三万六千頃蘇浙二省に跨りて湖邊

奇石多し

第六十八章

貴重宏麗なるキンサイ府

京師即ち臨安府今の杭州府

第一節　グジウ(湖州)を去て行くこと三日其間許多の城市村落を過ぐ何れも人煙稠密にして富饒なり人民は象教徒にして元帝に隸屬し其紙幣を通貨とす食料の品富豐なり三日の旅程を終り貴重宏麗なる一都府に達す之をキンサイと稱す天の都の義なり(一)其宏壯華麗なる其歡樂無比なる全世界中之と比肩すべき都會なく居民自ら之を認て極樂世界と爲すより出でたる名なり著者マルコポロは屢〻此地に遊び能く注意し能く熱心に之に關する實境事態を精査したり左の紀事は其の要を摘て略説する所なり普通の算定にては此府は周廻百哩ありといふ(二)其市街も運河溝も廣袤甚だ大なり市場の設數處あり非常に廣濶なり無數の市人能く茲に集合し得るやう其比例を以て施設を濶大にせり當府の位置たるや一方には清澄明淨の湖水あり(三)一方には廣大無邊の江水あり江水は大小數十の運河に據て府市の各部に流通し府内の汚物は悉く湖(江)水に運び去て終に海に入る(四)之に由て空氣大に清淨純潔となるのみならず府内各部の水陸運輸交通の便甚だ大なり街道

西湖

錢塘江上流は浙江

水路共に充分の廣さあるを以て街上には車馬絡繹し水上には船楫往來已む時なく市民需用の貨物を運搬して綽々餘裕あり之を市民に問へば皆な云ふ府内大小の橋梁概數一萬二千なりと主要なる運河の上に架して大街公道の間を連結する橋梁は高く穹窿形を爲し往來の船舶帆墻を立てし儘自在に其下を通過すべく兼て街路上の車馬は其上を經過し街路と穹窿の頂點との間斜而緩(ゆるやか)なるを以て往來に勞せず其構造實に絶妙なり若し此府にして橋梁の數此の如く多からざれば人衆日夜彼此の往來最も不便を極むるなるべし(五)

(一)(寒)キンサイは京師の轉訛せしものなり今の浙江省杭州府なり隋の錢塘の地にて唐五代宋に杭州と曰ひ南宋建炎年間行在を建て名を改て臨安府と曰ふ紹興年間都を此に定む當時其帝都なりしを以て京師と稱せしが元に至ても民間には其名殘り居りしものと見ゆ今の府治は錢塘縣に在り著者既に漢語に精通すと稱せらる然るに此には京師を釋して天の都府の義と爲す怪むべし葛禮の錢塘賦にも東南の都會繁盛の樂土とあり著者は京師は天國極樂世界の如しと云ひしものが轉じて直に京師の字義となりしにはあらざるか

(二)(寒)周廻百哩とは支那里の百里を謂ふなり然らざれば稍〻多きに過ぎたり臨安志に古の錢唐州城は隋の楊素創設し周廻三十六里九十步なりしが唐の大順元年吳越王錢鏐新夾城五十餘里を築き後又羅城を築き周七十里となり宋の紹興年間内城及び東南の外城を增築し舊城に附すとあれば著者の時代には周廻百里にに下らざりしなるべし宋の故宮は仁和縣の鳳凰山に在り元の至元十四年悉く火に燬けたりと云ふ

(三)(寒)湖水は西湖を謂ふなり都府の西側にあるを以て名く甚た大ならずといへども風景の絶美なると水の明淨なるより世

界に有名なり直徑大約三四哩琉璃一碧の鏡面を現し島々山々其間を點綴して風光明媚盡も及ばざる所なり

(四)(案)錢塘江を謂ふ南宋の故都臨安府は實に其上に在りき上流は浙江にして富陽縣に入て富春江と曰ひ錢塘仁和兩縣の界を經て錢塘江と爲る東の方海寧州の界に至り海に入る風波險惡海潮奔騰逆流すること數百里富陽縣富春江に至て初て平かなりといふ古來觀潮に有名なる處なり

(五)(案)橋梁の數は頗る誇大に過ぐロッサフ氏は三百六十橋を數へたり稍〻其當を得たるに似たり

第二節　府外には府を圍て一大壕渠あり延長凡そ四十哩に達す甚だ廣くして前に述べし大江より流れ入て水常に充滿す是は昔此地方に王たりし者が幾代かに鑿り開きし所なり江水漲て岸に溢れんとする時は其餘水を導て此壕に通じ兼て都城防禦の用にも供せしなり (一)掘取りし土砂は內側に積上げたるを以て其地を圍繞して數个所の小丘の形を存す府內には街頭兩側一帶に無數の商店あるの外尙十个所の十字街大市場あり四角形の廣場にして四邊各長さ半哩あり其前面に當て大道路あり路幅四十歩にして府の一端より一端に一直線に直通す而して無數の低き橋ありて之を橫截し頗る便利を極む此市場の全面積は四哩にして互に相距ること四哩とす大道路に並行し市場の向側に一大壕渠あり其前岸には廣大なる石造倉庫數棟あり印度其他諸邦より來る商賈蹟をして市場近くに身を置くの便に供し商品の藏貯商業の執行をして容易ならしむ各市場に每週三日間市を開き會する者四五萬人あり市に出でゝ所要の食料品を供給す邦內麋鹿野兎家兎鴫雉雞鶉鬪雞の如き各種の鳥獸に富み家鴨鵞鳥の類に至ては其數殆ど擧て算ふべからず湖中に於て容易に孵化飼養せられ繁殖甚だ盛にしてヴェニス銀貨一グロートを投ずれば鵞鳥雌雄一双と家鴨雌雄二雙を買得べし(「と」字は「又は」の誤なるべし)府內又屠場數所あり牡牛牝牛野羔羊仔の如き食用の家畜を屠殺し以て富人及び大官輩の食膳用に供す下級の人民に至ては之に指を染むることを得ず何種を問はず如何なる不潔の肉にても厭ふことなく之を食うて疑懼する所なし四季を通じて各種の野菜果實市場に出づ殊に梨實は非常に大にして一箇の重量十ポンドもあり內部は白くして糊の如く香味最も良し桃も亦季節に至れば盛に出づ黃白の二種ありて風味甚だ佳なり葡萄は此地に產せざれども乾したる儘他の地方より多く來る釀酒にも用ふれども土人は餘り貴ばず米と香料を以て自國にて製造せし酒を常用とす

(一)江水の溢流を壕渠內に入るゝとは餘なり湖水溢流の時大江の方へ餘水を導き泄さしむるなり

海より府に至る距離は十五哩にて日々江水の便に依り魚類を送り來ること其量甚だ大なり湖水にも亦多量の魚を產し四季之を漁するを以て專業と爲す者殊に多し斯くも多量の魚類を市場へ送り來らば如何にして能く賣捌くを得るやと疑ふ人もあらんが其市に上るや日々數時を出でずして忽ち一尾をも餘さざるに至る一餐每に魚と肉とを併せ食ふ蒙族の一階級のみの需用に供して猶ほ然

り府内居民の衆多なる想像するに餘あり十个所の市場は其周圍何れも高樓を以て取圍み其下部は店舗にて各種の製造盛に行はれ諸品の賣買至て繁昌なり中に就て藥種香料飾物眞珠類の賣行き盛なり自國製の酒のみを專門に販賣する店もあり彼等は斷えず之を釀造し適當の價にて常に新鮮の物を出して顧客の需に供す市場に接して之に通ずる數條の道路あり中に冷水浴場を設けし處あり各下男下婢を置き來浴の男女に侍して澡洗の役を執らしむ蓋し此地の人は幼時より常に冷水に浴するを習慣とし最も健康に益ありと爲すに因る然れども各浴場何れも別に溫浴の一室を設け置き外來の客にて冷水に慣れず寒冷を懼るゝ者の用に供せり諸人皆な日々其身體を洗ふを以て一般の習俗とす食事前に於て殊に然りとす

第三節　市街の他の部には娼婦の住居あり其數畧て算ふべからず市場近邊は最も彼等に利なるを以て多く其邊に住するのみならず市內各部何れを問はず彼等の居らざる處はなし裙屐羅綺珠玉を粧ひ粉黛衣香人を薰倒す設備十全佳麗の家に住ひ多くの婢女に侍らる此等の妖姝麗姫幼より教養心を盡し嬌痴諛媚戲謔作要の術に長じ如何の人に對しても一言一動笑を献じ媚を呈す此地に客たる者一度此仙路に入て其魔力に引かるゝ時は千條の繩に縛られしが如く此媚惑の妙術に由て魂を迷はし志を蕩かし遂に迷境を脫すること能はざるなり斯く淫樂に沈醉しては故郷に歸るもキンサイ即ち天都に在りし時の事を夢想し再び樂土に遊ばんことを熱望して已まざるなり又他の街衢には醫家占星家等の住家あり此輩又讀書習字其他諸般の藝術を教授す此徒にして市場廣街の周圍の家屋中に住する者もあり各市廣街の一方に二大屋宇あり帝より命ぜられし官吏ありて茲に住し外來商賈の間に起り若くは土着商人の中に生ずる爭論の裁判を司どる兼て其附近の諸橋梁に相當の護衛を設き其勤惰を監視し其過失を斷じて之を罰する任をも帶ぶるなり

上文に述べたる府の一端より一端に迄直達する大道の兩側には廣大なる邸宅ありて各〻園苑を具へ而して其近傍には工匠の住家あり各自其店舗に在て種々の職業に從事す人若し暫く街頭に立て一瞥し各異諸種の職業の爲に市民の街上を往來する者瞬間も絶ゆることなく其數の衆多なるを見る時は此の如き群衆庶民が生活を保つに充分なる食料の準備は如何にして爲すを得べきや或は不可能の事なるべしと思ふべけれど若し開市の日に當て無數の商民市場に群集し船又は車にて運搬し來りし貨物を堆積して廣き市場の地を埋め悉く之を賣り盡すを見れば前の考の間違なりしを覺るに至る僅に胡椒の一品に就て其數量を聞くも五穀肉菜酒漿雜貨等一切食物の全量を略ぼ推測することを得べし著者曾て稅局の官吏より聞けり胡椒一品の日々の輸入は四十三荷にして一荷の量は各二百四十三ポンドなりと

第四節　府内の人民は象教宗徒にして紙幣を以て通貨とす男女共に顔容端正にして美なり商賈他の諸邦より絹布を輸入し來る外此キンサイの治下の土地にて絹布を產出する量も莫大なるを以て人民の多くは常に絹服を用ひ居るなり此地方に行はるゝ手工職業の中に他邦に勝れて巧妙にして普く世に入用視せらるゝ者十二種あり一種業毎に工場の數大約一千に下らず一工場毎に職工を使用すること十人十五人或は二十人に至る稀には四十人以上もあり各其備主に服屬す富豪の工場主に至ては自ら手を勞することなく日夜優遊富家貴族の態度を爲す其妻女をも亦優遊逸居少しも勞作に關せしむることなし彼又前述せし如き花柳の街に徘徊し名妓仙娃を擁して華奢柔弱の生活を送る其衣服は絹帛珠玉より成て價の貴きこと實に想像の外なり古より世々の帝王法律を被して凡そ市民たる者は必す父の職業を守るべきことを規定せりと雖ども其家富で能く其職業を保守し職工を使役して父祖の事業を營み得る者には手工を親らせざることを許さる家屋の構造善美を盡し之を修飾するに多く彫刻の細工を以てせり繪畫彫刻建築裝飾の意匠を凝らす嗜好の甚しき之れが爲に彼等が年々費す所の金額を聞かば何人も驚かざる者はなしキンサイの土着人民の性質は極て溫和なり彼等が前の主君たりし前朝の諸帝が既に自ら平和を好み尙武の氣慨毫もなかりしを以て之を見慣うて人民一統平靜穩和の風習と爲り何人も兵器を操るの術を知るものなく各家兵器の類を

蓄ふる者さへなし彼等の間には終年喧嘩口論の爭を聞きたる事なし其商業を營み工業に從事するにも最も公平正直を以て旨とし敢て人を欺くことなし人と相接するに互に友情濃かにして同町に住する者を見れば男女に論なく唯其近隣といふ迄にて殆ど一家族かと思はるゝ程なり其家庭内の風を見れば妻女に對して最も敬愛を表し聯かも狐疑嫉妬を懷くことなく苟くも既婚の婦人に對して敢て猥褻無作法の言を發する者あれば無上の破廉恥漢と見做さるゝなり商業の爲に他方より此地に來る旅客に對しても能く懇篤信實を盡し招き來て自由に其家に到らしめ歡待厚遇を爲し商業上に關して成るべく好都合を得らるゝやう注意助力を與ふるを常とす之に反して凡そ兵士と見れば之を嫌ふこと殊に甚しく帝の親衛兵と雖ども其範圍を出づることなし是れ其世々の同人種の主君たる帝王の朝家を滅されたるを憶ひ起して之を忘れざるに因るなり

第五節　湖水の邊には貴人高官の華麗廣大なる邸第あり其數を知らず寺院僧堂も亦多く無數の僧侶此に住して禮佛の勤行を爲す湖水の中心近くに二島あり二島共何れにも宏壯なる一大屋宇あり て無數無限の堂あり室あり屋外には數箇の亭榭あり府内の人婚禮とか又は豪奢なる饗宴を催す時には此一島に來る所要の品物平生に準備ありて一として缺くることなく器皿拭布食卓布等に至る迄府民の公費を以て曾て買收保存しあり屋宇の建築も亦其費金より爲るなり時として百組以上の

宴會婚姻又は他の招待の爲に一時に集ふことあるも何れも箇々別々に一堂一室又は一亭榭を占めて衝突することなく豫め之を知て配置せしものゝ如し之に加へて湖上には無數の華舫遊船の設あり長さ十五歩より二十歩に至る廣くして平なる床板ありて十人十五人若くは二十人を納るゝに足る而して水上を遊行するに左右に傾くの患なく或は婦人同伴或は男子のみ相伴うて湖上に舟游を爲し之を樂まんとする者は各一華舫を備ふ華舫は斷えず整齊準備しありて時を移さず呼べは乃ち來る花毬食卓其他宴席に所要の器具一切皆な備はる船室の上は平坦なる屋蓋を以て覆ふ舟人此に居り長き棹を用ひ湖の底を突き(湖の深さは一二尋に過きず)舫を進めて往かんと欲する處に至る船室の内面は各色を以て彩色を施し種々の繪畫を以て飾る船の全體も亦彩色を施して裝飾す兩舷共に窓の設あり或は閉ち或は開き乘客食卓に就きながら諸方を眺め船の過ぐるに隨ひ景色の移り變るを見て其眼を娛ましむるの用に供す水上に在て此娛樂の法を取るは之を陸上の娛樂に比すれは勝ること萬々なり湖は都府の一方に在て其廣さ殆ど府の全長に亘るを以て船上に立ち遙に沿岸を望む時は宮殿去て寺院來り忽ちにして尼庵忽にして苑囿或は喬木或は深林山上に立ち水涯に聳え凡そ陸上の美觀佳景陸續として眼眸の中に入り來る同時に我と同樣の幾多の華舫齊しく游客を載せ嬉樂を恣にし連綿として我を過ぎ行くを見る之を要するに此地の居民は其日の勞を畢り商業の取引を終るや否や其餘閑は妻妾と共に水上に華舫に乘り陸上に車を驅り和樂歡娛の中に送るより他は爲すべきことなしと思へり府内の街上に車を驅て游ぶも亦居民の娛樂の一なれば今聊か其梗概を述ぶべし

先づ第一にキンサイの市街路上は悉く石又は煉瓦を敷詰め府より蠻子地方一帶の諸州に通ずる主なる大道も亦悉く同樣なる事と知らざるべからず是が爲に各地に旅行する者も幸に泥土に由て脚を汚す患なきを得るなり但馬背にて大急行する朝廷の早飛脚の如きは敷石の上を馳驅すべからず故に道路の一部分は何れか一側に於て殘し置き敷石を爲さず前述せし市の一端より一端に達する大道路は兩側共に幅十歩迄石と煉瓦にて敷詰め中間の部分は小砂利にて埋め中高に築きて雨水を流して能く流れ去らしめ近傍の壕渠中に入りて路をして常に能く乾かしむ小砂利の部分は絶えず車の通行往來するに適せしむ車は形長くして上は車蓋あり絹布の帳幕座褥あり六人を納るゝに足る男女共に車を驅るを以て娛樂と爲す人は日々之を備て使用するの風あり故に市街に入て一見すれば終日許多の遊歩車の市街の中央部を往來するを見るべし中には府外囿苑管理者の催にて遊班を集め此車にて囿苑に赴くもあり之が爲めに豫め園丁をして園内に幽邃の處を設け置かしむ爰に於ては男子も縱に婦人の羣中に入て終日遊び暮し日暮て後來時の路を取て歸り去るなり(一)

（一）（案）西湖は錢塘縣の西に在り古の明聖湖なり三面山を環らし溪谷の諸水滙て湖と爲る周三十里（案）唐の長慶年間刺史白居易湖水を蓄洩して田に溉ぎ又引て運河に入れ以て運漕を利せり宋の元祐年間蘇軾葑泥を取て湖中に積み長堤を作りて人行を通じ道を夾て花柳を雜へ植ゑ中を六橋と爲す人之を蘇公堤と稱す西湖十景あり山水秀麗景物華麗邦人士女四時嬉遊鼓笛聲絶えず尙ほ詳細は西湖佳話等の書を見て知るべし

第六節　キンサイの府民は兒を設る毎に必ず其父母たる者直に出產の年日月時を記錄し置くを風習とす而して後占者に就き兒子誕生時の天象星座を問糺し其答を聞て之をも亦詳に記錄に留め置くなり故に其子生長して後商業を爲すとか旅行するとか又は結婚するとかの事ある時は必ず此記錄を占者に持參して可否を問ふ占者は之を檢査し一切の情況境遇を推測し神託的の言を申明す居民は之を聞て時には其結果を豫知して判斷せられし者と爲し大に之に信用を置くなり此輩の占者幻術者の數は甚だ夥く各市場に於て常に見る所にして何れなり其一人の說を聞くにあらざれば未だ曾て一回も結婚の式を擧げたる者あらず

富豪大家の人死する時に於ては必ず左の如き式を執り行ふを以て又一の風習とす凡そ其死者ある家の男女の親族は必ず身に粗服を着て死體に伴ひ其火葬の爲に定めたる場所に迄隨ひ行き多少の樂人又僧侶に隨て諸種の樂器を以て行々樂を奏しながら進み諸佛に對して高聲に祈禱を諷誦す既に其火化の地に達する時は會葬者は手に無數の紙片に婢僕牛馬錦繡金銀貨の形を畫きし者を執て之を火に燒くなり是れ斯くすれば死者は他世に於て現實の婢僕牛馬金銀布帛の需用を缺かざる者と信ずるに由るなり火葬の柴燒け盡すを見て一度に衆樂器を吹奏し其音高く連綿として喧囂を極む此式を行て諸佛菩薩初て火化せし死者の魂を攝取し玉ひ他世に轉生して再び生人たることを得るものと想像す

第七節　府內各街に石造高屋あり何の方面にても火災起る時は（府內の人家多くは木造なれば此災のある決して稀ならやとす）住民は直に家財を此に運で安全を圖るものとす部命に由て定められし規則ありて十人一隊の巡警衛兵主要なる諸橋上に在て屋蓋の下に屯集し晝間五人夜間五人宛交替して其職を務む各屯所每に板木一箇銅鑼一箇漏刻一箇宛とを備へ漏刻に據て晝と夜との時刻を測り定め夜の第一更終るや否や一人の衛兵直に板木を一打す而して又銅鑼を一打し以て隣接せる街々の人をして其第一更たることを知らしむ第二更の終る時は各二打宛を打つ其他更の進むに隨て次第に數を增して打つなり巡警は眠ることを許さず必ず常に油斷なく看守せんことを要す天明に至り日の出でんとするや再び夕刻に於けるが如く一打宛を爲し時の進むに隨て數を加ふ此巡警の中に於て市街巡邏を任とするあり燈火を消すべき時を過ぎて猶ほ燈を點し若くは火を燃す者なきやを巡視し若し之あるを視る時は其門戶に記號を付し翌朝家の主人を官長の前に引き出し其

罪の宥免を願ふべき償金を出す能はざる者は相當の罰に服せざるべからず若し又夜間時ならぬ時に屋外に在る者を發見する時は之を逮捕して拘留し翌朝を待て同く官長の裁斷に付するなり晝間若し身の不具若くは病弱の爲に業を執ること能はざる者あるを見る時は之を救育病院に送るべきことゝす此救育院は府内處々にあり何れも歴代の帝王の建造せし所にして人民の自由に使用し得る所のものなり此に於て救療せられ既に癒る時は必ず一二の業務に就て勞作せしむることゝす若し一家火を失するを見る時は速に木板を打て急を報ず其方面の諸橋に在る衛兵は之を聞き時を移さず馳せ集て之を消し兼て商賈其他人民の家財を救ひ前述の石塔内に運び去る時には又其諸品を船に移して湖中の島に運ぶこともあるなり此の如き騒擾の際といへども夜中の出火なれば人民は一人も自家の屋外に出でゝ喧鬧するを許さず只自己の家財が實際に取出しある所に援助運搬せし査官と共に集り監守する者は別段とす此輩のみにても千人二千人以下の少數なることは稀なりとす若し居民中に動亂若くは一揆等の起ることある時も此巡査警官の出務鎮壓を必要とすれども其之あるに關せず皇帝陛下は平生に歩騎兩兵の一大兵隊を市内と其附近とに常備として屯營せしめ最上有爲の士官と帝が最も信任を置く者とを置て之れが指揮を司らしむ是れ此地方殊に此貴重の都府は宏大富有の點に於て全世界中の何れの都府にも超絶する所にして之を守備することの最大緊要なるものあればなり夜間警衛の爲めとて互に一哩以上の距離を隔てゝ土堠を築き其頂上に木製の架を建てゝ木版を懸く當直の衛兵木槌を以て之を擊てば其聲數里の外に聞ゆ此類の用心設備なきに於ては一朝火を失することあらば都府其半ばを灰燼に付するの恐なしと爲さるなり或は居民の間に動搖の事變起ることある時も其急を報ずるに之を用ふること明白の事にて一朝其警報ある時は刻を移さず諸橋屯營の衛兵直に起て武裝し其要處々々に馳せ集るなり

第八節　大可汗陛下が此蠻子地方（即ち南宋所領地）を征服せられし時に當り從前は一大王國なりし者を命じて九路に分ち一路毎に都督一員を置きて其部の最上統轄者とし以て民に臨み治を施さしめ玉へり

（一）而して都督は年々歳貢の數量及び管内施政の情狀一切を擧て之を大政府の執政官（中書省）に報告す而して第三年毎に他の一切の諸官吏に於るが如く任滿ちて交替するなり此九總督中の一員キンサイ府の中に住して政廳を開き市府州縣の數百四十以上を管治す其地何れも富饒廣大なり其數甚だ多きに過ぐるが如きも蠻子方面一帶を擧れば產業繁盛富有の大人口を有する府縣の數千二百个所より少なからざるに思到らば敢て驚くに足らざるなり各州縣共に其大小と情況とを斟酌し勅令に由て兵營を置き千人或は一萬若くは二萬の兵を屯集せしむ蓋し其土着の人口を酌量し其力の多少を測て勅裁し玉ひしなり左れば其兵は皆な悉く韃靼蒙古兵より成るとは速了すべからず其

大部分は却て乞碍(キタイ)地方の士民より徴集せらるゝなり是れ韃靼蒙古兵は通じて騎馬兵なり此騎馬兵は本來堅實なる乾燥地に於てのみ操作し得る者なれば此地方の如き卑濕地に在る府縣州郡の邊には到底屯營せしむべからざればなり故に帝は此別を明かにし卑濕の地の爲には乞碍(キタイ)地方の人と蠻子(マンジ)地方の土人にて兵役に耐ゆる者とを選ばる蓋し帝は毎年帝の全國の臣民中より最も能く兵仗を執り得る體質の壯丁を選拔して兵籍中に登錄し置き各地無數の兵營に送て許多の大軍隊を成すに足らしむるを以て常例とせられたればなり然れども蠻子(マンジ)地方より徴集せられし兵は決して蠻子地方の兵役に就かしめらるゝことなし必ずや本國を距る二十日程の遠隔地に送られ四五年の役務に服し期畢て初て故郷に歸ることを許され他の者と更代するなり此規定は乞碍(キタイ)人にも同く適用せらるゝなり此地方の各地州郡より帝庫に納まる貢租は過半は此等の兵の支給の爲に消費せらるゝなり若し一朝一府一州にして叛逆の變ある時は(民情卒かに忿怨する事ありて激成し或は民心狂熱して地方長官を殺害する抔決して稀有の事にあらず)直に近傍都府駐在軍の一部に令を下して現場に出發し此の如き犯逆罪の發出せし州郡を擊破せしむ若し然らずして他の遠隔の地より軍を送るが如き迂遠の舉を爲さゞるべからざるものとすれば進軍の爲に二箇月も空費するに至るべし此の如き目的の爲にキンサイ府には斷えず三萬の軍兵を駐在せしめあり而して其他に於ても一千兵より下ることなし

(一)各地方分割の區界は古と今とは決して同一にあらずと信ずべきの理あれども此に蠻子(マンジ)地方即ち南部支那(宋の故地)を九路に分ちたりとあるは概略江南江西浙江福建廣東廣西貴州湖北湖南の九路と思はる當時乞碍(キタイ)即ち北部支那(金遼の故地)は直隸山東山西及び陝西の東部とより成りしなるべし十五路中の其他の地即ち四川雲南及び陝西の西部は猶ほ未だ全く支那の版圖中に入らずして著者の時代には未だ蠻子乞碍(マンジキタイ)の何れにも屬せざりしものなるべし

第九節　猶爰に言ひ漏らせし事あり皇帝ファクフル(一)の華麗宏壯なる故宮の事是なり其祖帝曾て廣袤十哩の土地を高き墻壁にて圍み其中央に壯大の門を設けて出入の口とせり門の西側に華麗なる朝堂ありて平坦なる地塹の上に建つ其屋蓋は數列の柱にて支へ柱は金碧の彩飾ありて燦爛として人の眼を眩す其華麗言ふべからず而して又其正門と相對して大闕の背面にも朝廊あり他のものに比すれば更に宏大なり其屋蓋は裝飾富麗にして柱には金漆を施し內面の壁には前朝諸帝の歷史を表する精妙の繪畫を以て飾れり此朝廊中に於て年々偶像の祭事に定められたる期日の間ファクフル帝自ら朝堂に出御し大饗筵を開き貴戚大臣及びキンサイ府中の鄉紳豪族輩を招くを例とせり此諸朝廊中に於て一時に相會して食卓に就しもの實に一萬人に及ぶ而して毫も不整頓の狀あるを見しことなしといふ此饗宴は十日若くは十二日連續し其間朝堂內の美觀錦繡綾羅珠玉の光彩燦爛たる都て皆な人の想像の外に在り是れ此に會する賓客は孰れも競爭の心を以て事情の許す限りは成

るべく華美を衒はんと欲するに由るなり正面の大門に面せし朝堂の後に一墻壁あり之に一の通路を設て此墻壁に依て宮闕を二分し内廷と外廷とを分隔す内廷は自ら一種の大宮殿を成し數列の柱梁にて支へたる廊廡を以て之を圍む之に由て皇帝皇后の所用たる無數の諸房室に通ず柱梁は何れも同樣に裝飾せられ壁面も亦漢繪陸離たり此大殿堂を過て有蓋の行廊に出づ廣さ六歩にして連綿とし長く續き以て湖邊に達するに至る長廊の兩側に十宮あり各別に入口ありて之を通ず十宮相連なり各〻其廊廡を以て圍み一箇の長き宮殿の狀を成す每宮房室五十を備へ何れも其内園ありて年少の妃嬪一千人此に住し以て帝に服侍す帝或時は皇后を伴ひ或時は一隊の妃嬪に圍包せられて湖上に出で絹帛を以て覆ひし御舟に乘て舟游！湖邊の寺觀に到るを常とせり尚ほ此宮闕内に別に二部の區廓を分割し一は以て小林池水美麗なる菓園を設け一は以て各種の獸類羚羊麋鹿家兎野兎の類を養ひ以て帝が狩獵の用に供す時ありては帝又諸嬪を伴ひ半は輦車半は馬上にて終日を此に消することもあり而して男子は一人も之に陪伴するを許さず妃嬪宮女却て獵犬を使ひ以上の獸類を逐ふことに習熟せしめらる宮嬪此の事に興て疲勞する時は湖岸の林中に退き衣裳を脱て赤裸々となり水に入て或は東に或は西に巧に游泳し帝は岸上に在て之を視る而して後共に宮中に歸るなり時としては一林中に食膳を備へしめ供御を召さるゝこともあり喬木鬱蒼として樹陰深き處に於て

し宮嬪傍に在て之に給仕するなり宋帝は斯くも佳麗迷魂の城溫柔蕩心の鄉に在て歡樂に耽り一生を徒消して兵備の事抔は一切無知の有樣なりければ其行の放縱にして性の怯惰劣弱なる遂に大可汗忽必烈帝の禍心を惹き起し彼を逐て華麗無比の所領地より逃れ出で大汚辱を帶び て其帝位を去らしめられしは既に論せし所の如し以上說く所は余が曾て此府に在りし日當時はファクフル帝宮中の一倖臣にて帝が一生の行爲一切を知盡せし者其後土地の老富商となりて殘り居りし人より聞き得しものなり彼其宮闕の原形を辨明せし後余を請て其地に導き行きたり目下大可汗の都督の居住する所に至り見れば宮闕の廊廡は原形の儘今に現存せり但妃嬪の内房等は都て廢墟となりて僅に礎石を存するのみ囿苑菓園を圍みし墻壁も亦破壞し盡して鳥獸草木一も見るべき者なし

（一）ファクフルとは往時彼斯（ペルシヤ）の學者が支那語の天子なパクフルと發音せしより轉訛したるものにてパクは神ブルは子なり即ち神子なり爾後彼斯（ペルシヤ）人のみならず歐洲人も支那帝を指するに皆な此語を用ひたり本文に南宋の度宗帝を指して云ふ度宗帝は一二七四年に帝位を逃れ著者の一族が支那を去りしは一二九一年頃なれば宋の宮廷内の事は此十數年の間に細かに聽き得し所なるべし

第十節　此府を東北東に距ること二十五哩にして海あり　海に近き處に一市街ありガンプと名く

（一）殊に優秀なる海港にて印度より商品を積載し來る諸船舶皆な此に泊集す即ち此良港は恰もキンサイ府を通過し流るゝ河水の海洋に入る處に在るなり河水を上下して貨物を沿岸地に運輸する

には絶えず河中專用の船舶を用ひ而して內地より輸出する貨物は特に印度諸邦若くは乞歸(キタイ)の各地に航通すべき船中に積込むなり

(一)(案)カンプは嘉興府の敵浦(カンプ)なるべしマーステン氏は寧波のことゝすれど誤なること論なし至正年間の錢塘江口の貿易港は乍浦(チャウ)なれども著者の頃の港は方輿紀要に宋の開禧の初敵浦の水軍を置く元の時居民漸く集り海商往來して遂に聚落を成すとあり殊に乍浦よりも遙に江口の方に在れば敵浦なりしに相違なかるべし敵浦は今も四周墻壁を繞らせし市街にて製鹽場のある處なり

著者は曾てキンサイ府に滯在せしに幸に貢祖の數最人口の多寡を錄して政府に年報を發送する時に際せしを以て火坑の總數即ち戶數の統計百六十トマンなることを知れり(二)蓋し一トマンは一萬なるを以て全市の戶數は實に一百六十萬あるなり此多數人民の間に於て聶斯托爾(ネスタル)派基督教の教會堂は僅に一宇あるのみ每戶の主人たる者は必ず其門戶外に一家族の者男女に論なく人々の名を記して乘て馬の頭數を殺せて揭げ置くべき規定なり若し誰にても死亡するか住家を離るゝ者ある時は其名を消し誕生の者あれば直に之を人別に加ふるなり此方法あるに由て地方の大官都府の府尹は何時にても居民の正しき員數を知ることを得るなり乞歸(キタイ)と蠻子(マンジ)とを問はず都て此同一規則を用ふるものとす旅舍公館の主人も亦同法に據り一の帳簿に宿泊人ある每に其姓名を記入し到着出立の日時を細記し置き糟に市場監督の事に關し細述し置きし者と同樣なる吏員へ日々其寫を差出す筈とす蠻子地方に於ては自ら家族を養ふこと能はざる程の下級の貧民は其兒子を富人に賣るを風俗とす是れ自己の貧窮なる力にて養育するに比すれば却て宜きを得るを以てなり

(二)(案)トマンは蒙古語にて萬の意なり

第六十九章

大可汗の歲入

蠻子地方九路の一たるキンサイ府と其統治下の各地より大可汗に納入する歲貢を述ぶべし其第一に居る者は鹽にて最も豐富なる物產なり可汗が之より年々徵收する租稅は黃金八十トマンなり黃金一トマンは八萬サッギにして一サッギは全く金貨一フロリンに當るを以て合計は六百四十萬チュカートなり(一)此多量豐富の鹽は沿海近傍の諸州と無數の鹽湖鹽沼とより製出するものとす其地に於ては夏日の炎熱に憑て鹹水を結晶せしめ夫より無量の食鹽を得て此地方の他の五州郡にも供給を及ぼして十分餘りあるなり

(一)ヴェニスの金貨ヴェカートは大約英貨の十シルリングに當るを以て製鹽より得る所の歲貢は英貨三百二十萬磅の總計となる支那全國ならずして僅に今の杭州府治下一帶に止るのみの鹽稅としては多きに過ぐるに似たれども支那の北部諸州と內地の諸州とにも都て其海岸の南東部より鹽を供給せざるべからざるが故に啻に製造地附近に給するのみならず其地より輸出

する位の實に驚くべき程なるを思はざるべからず

此地亦砂糖の耕作製造も甚だ夥し之も亦他の諸雜品と等しく百分の三と三分一の稅を拂ふなり米より釀造する酒の稅も亦同額を課するなり余の既に前述せし十二類の工匠にして各〻一千の工場を所有する者と各種の商賈にして一は府内に貨物を輸入する者一は府より内地に貨物を運搬し若くは海上輸出を爲す者も亦等しく百分の三と三分一の稅を拂ふことゝす然れども遠國及び印度の如き遠き異地より海を經て來る物品には百分の十を課し國内の諸產物假令へば牛馬五穀蔬菓及び絹絲の如きも亦同く十分一を貢租として納むるなり著者は現に貢租に關して之を見證する機會を得たり前述の鹽より生ずる歲入を外にするも一年の貢租の高は二百十トマンに達せり一トマンは金貨八萬サッギなるを以て全額は一千六百八十萬ヂュカートとなるなり(二)

(二)英貨の八百四十萬磅に同じ鹽稅を合せて一千百六十萬磅なり

紹興府

タピンズ府

第七十章

キンサイ(杭州府)を去て東南に行くこと一日程の間陸續として民家村落及び各種多量の野菜の產出ある勝れし田園の地を過ぐれば遂にタピンズ府に達す(一)甚だ美麗なる大市府にしてキンサイ(江浙行省)(二)の管下に屬す居民は偶像を禮拜し紙幣を通貨とし死體を火葬す大可汗の臣民にして商業工業を以て生業とす此地は別に細說すべき要なきを以て進てウギュー府を辨すべし

(一)タピンズとは如何なる地名の訛稱にや此方面には絕て之に類似たるものもなし太平府と音韻相似たれど太平府は杭州府より遠く西北に在て安徽省に屬すれば杭州より東南一日程といへる地とは遙に懸隔せり著者の意は全く紹興府を指すに在て一時其名を誤稱せしに過ぎざるべし

(案)紹興府は秦漢以來會稽山陰の地にて五代に越州と稱し吳越に屬して東府となり宋以來紹興と稱す謂ふにタピンズは紹興路の支那音シャオヒンルの轉訛と見て差支なきに似たり紹興は錢塘江の南岸に在て杭州府より東南支那里百三十里なりといふ水文の一日程とするに當る紹興の東南溪州府の治下に太平縣といへる一小地あれど是は明以後の名にて昔は資縣縣と稱せり

(二)(案)此條のキンサイは直條の京師の訛したるキンサイにあらずして江浙の訛誤たるに似たり記して後の考を俟つ

ウギュー府

第七十一章

タピンズ(紹興府)より東南行三日にしてウギュー府に達す(一)更に同方向に進むこと二日間續て許多の市街城邑其他人家稠密の土地互に相櫛比して旅人の眼には一箇の延廣かりし都府の如く見ゆ

衢州府
今の金華府

る處を過ぐ何れもヤンサイ(江浙行省)の治下に屬す人民は皆な象教徒にして國内豐穣食料の產量最も富めり此地竹を產す本書前文に述べし所のものより太くして長く圍四尋にして長さ十五歩のもの常にあり

(一)〈案〉カギューは婺州(ウチャウ)の轉訛なり今の金華府は唐五代以後元迄は婺州と呼べり但本文紹興より東南に行くとし更に同方向に進むとするは誤譯なるべし一本には紹興より更に進むとのみありて方位を云はず金華府は紹興より四南に當るなり以下皆な東南は西南の誤と知るべし

衢州常山及び江西の廣信府

江西省玉山縣

第七十二章

ゲンゲイ、センジャン及びギーザの各市府

更に同方に向て行くこと三日ゲンゲイ府に達す (一)尚ほ東南に途を取て進む其間絶えず人戸稠密の數市街地を過ぐ居民何れも商業に從事し土地の耕耕に惰らず蠻子(マンジ)地方の此邊には一羊を見ずといへども牝牛牡牛野牛山羊に富み殊に豚に至ては甚だ夥し第四日の末にゼンジャンと稱する一市街に達す (二)河中に隔立せし一小山上に建つ河水此に至て自ら二派に分るゝを以て其狀恰も水を以て市街を包圍するものゝ如し而して兩派互に反對の方向に流れ一は東南に進み一は西北に向て流る (三)右の諸市街は何れも皆な元帝の版圖にしてキンサイ(江浙行省)に隸屬す人民は偶像を崇拜し商業を以て生を營む邦内野鳥野獸多し此地より更に進むこと三日にして重要なる大市府ギーザ市に屆くキンサイ(江浙行省)領の最終市とす (四)此市府を過ぐれば身は蠻子(マンジ)地方に於ける他の一都督管地内即ちコンチャ統轄の疆内に入る

江西省の廣信府即ち元の信州

(一)〈案〉ゲンゲイ一本にはギューシュとあり又ゲイゲイともあり衢州(トウチャウ)の轉訛とすべきに似たり本文に其間絶えず人戸稠密の市街地を過ぐとあり錢塘江上流の流域地にて處州より金華を經て衢州に抵るの間は市街連續人煙最も殷盛なりといへばゲンゲイの衢州(キウチャウ)たる論なきに似たり

(二)〈案〉既にゲンゲイを衢州(キウチャウ)とすれば次のセンジャンは一本にチャンシャン又シャンシャンとあり常山(チャンゲシャン)縣の訛轉せしものと爲すべきに似たれども其間の距離を四日とするを見れば常山にては衢州より二十哩内外の地なれば距離餘りに近きに過ぎたり余はセンジャンは玉山(ユーシャン)の誤寫訛轉と爲さんと欲す玉山縣は衢州を距ること支那里百二十里餘にして山路險惡にして進むべしといへば四日程とするは實地に適せしものと思はる玉山縣は今は山西省に屬すれども元の時は江浙省に隸し而して國地に入る咽喉の地なり去れど又再び考ふれば寰宇記に本は衢州の西鄙なりとあり元和郡縣志には常山須江等の縣を分て置くとあれば元に至てし土人は尚ほ常山と呼びしにもや去ればセンジャンは矢張常山の轉訛にて地は玉山縣を指して謂ふならん

(三)〈案〉玉山縣は東に上干溪あり東南に下干溪あり南に湞溪湞溪あり西に沙溪あり下流は上饒江となりて鄱陽湖に入り遂に大江に入る玉山は即ち三方水に圍まるゝなり本文の説誤ひざるに似たり

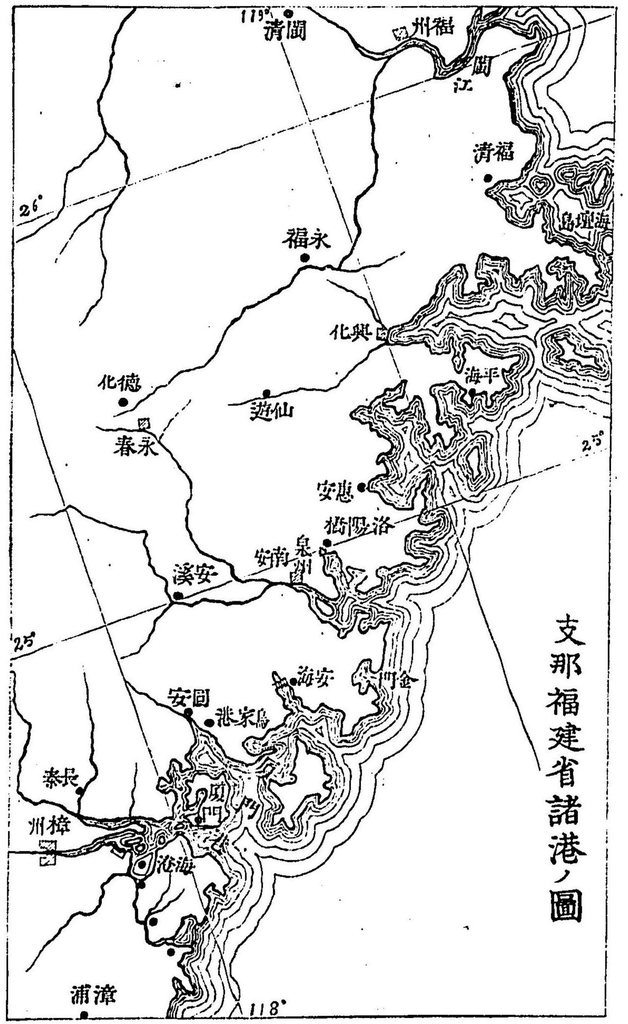
(四)〈案〉ギーザ一本にはクシュとあり又シンゲイともありユール氏は河口(ホコウ)の訛稱とすれど著者の誤癖としてシュ若くはゲイは常に州(チャウ)の轉訛なるを多しとす殊に河口は鉛山縣下の一小部落に過ぎず本文の重要なる大市府といふに當らず余は之を以

て信州（レンチヤウ）の訛稱と爲さんと欲す信州は浙の衢草郡餘汗の地にて三國吳には鄱陽郡に屬し唐の初め饒州に屬し宋に信州上饒郡と曰ひ元に至り信州路と曰へり今の江西省の廣信府なり元の時は江浙行省に隸したり本文江浙行省管下の最終の府と曰ふに當る

第七十三章

コンチャ省及び其都府はフージウ

キンサイ（江浙行省）（キヤンチエ）の最終の都府ギーサ（廣信府）を去れば身は遂にコンチャ省の管轄地内に入る（一）其首府をフージウ（福州）と稱す（二）脚を此邦内に進め東南方に向ひ山又山を越え谷又谷を渉て（三）行くこと六日其の間絶えず市街村落の地を通過す何れも生活必用の諸品豐かにして好狩獵地なり殊に禽類に富めり住民は象教宗にて大可汗に臣屬し商賈製作を以て生業とす此邊虎多く棲息す形大にして力强し生靈良靈の產出甚だ多量にして他の藥種も亦少なからずヴェニス銀貨一グロートと同價の貨錢を投ずれば新鮮の生靈八十ポンドを買ひ得べし其生產の盛なるを見るべし此地亦色香共に悉く眞正の泊夫藍（サフラン）に類似する植物を產す然れども其實決して泊夫藍にはあらず土人最も之を貴重し一切の食物の調理に必要品として之を用ふ是を以て其價甚だ高し（四）



(一)(案)コンサイとは福建省を指していふことなれども如何なる語の轉訛にや審かにし難く強て之を求むれば三山縣志に至元十五年行省を福州に置く十六年改て宣慰使司を置く二十年復た行省を置くとあり或は行省(ホシクシヤク)の轉々して此の如き奇語を生じ來り波斯人(ペルシヤ)歐羅巴人抔は當時之を慣用せしにはあらざるか姑く記して後考を俟つ福建省は古の閩越の地宋に至り初て福建と改めしなり

(二)(案)此に福州を出せしは決して路の順次をいふにあらず單に福建省の首府は福州にてあるぞと斷りたるのみ

(三)(案)福建省崇安補城の東北は山嶽重疊浙江省の江山常山江西省の廣信に連亘せし大山脈にして三省を分界する所なり浙江衢州より此山嶽の西南の麓なる建寧に達する迄には六日の路程を數ふること論なき所とす

(四)(案)此は疑もなく黄色の染料蘆黄を謂ふなり支那一般に常に調理用に供するにはあらず馬來人其外諸島人は夢く色付用として食品に加ふるなり

此山谷地方一部の土民は好で人肉を食ひ病に因て死したるものにあらざりせば何物の肉よりも美味なりとして賞味するなり戰場に進む時は頭髪を散らして耳邊に垂れ綺麗なる藍色にて顔を彩どるを常とす而して孰れも槍と劍とを携へ大將分のみは騎馬其餘は都て歩にて進む此輩は極て野蠻の人種にて若し戰にて敵を殺す時は好で先づ其血を飲み而して後其肉を貪り食ふなり閑話休題(ソレハサテオキ)次にクーリンフの市府を述ぶべし

第七十四章

福建省府

クーリンフ府

前章說く所の如く六日の行程を畢ればクーリンフの府城に達す(一)頗る宏大にして內に甚だ華麗なる三大橋あり長さ百步廣さ八步に越えたり(二)土地の婦人皆な甚だ美にして其生活の狀華奢安逸なり絹絲の產極て多し織て諸種の絹帛を製す綿も亦絲と成し染て木綿反物を作り蠻子(マンジ)地方の各地に販賣す居民手廣く商業を營み夥く生姜良薑を輸出す余は實物を見しことはなけれど聞く所に據れば此地一種の家禽を產す全身一羽なく其皮一面に黑毛を以て被はれ殆ど猫の毛皮に類すといふ(三)若し實ならば奇觀甚しき物といふべし此禽卵を生むこと他の鳥に殊ならず其肉も亦た食て美なりいふ國內虎多し旅人隊を成して行くにあらざれば通行危險なり

(一)(案)クーリンフは閩江の上流なる建寧府(ケーンニングフ)たること論なしユール氏曰く福建の土音厦〻に代ふるにりを以てす往時葡萄牙人が寧波(ニングポ)をリムポーと稱せしが如き其適證なりと周の七閩の地にて溪には會稽に屬し三國の吳は之を建安と曰ひ唐に建州と曰ひしが宋以後之を建寧と稱せり此地閩茶の名區にして支那茶の第一とす府北の崇安縣に武夷山(ブヒ)あり閩粵の第一名勝とす洋人閩茶を概稱して武夷茶と爲す實に之に因るなり

(二)(案)三大橋とは七星橋通都橋馮陂橋を謂ふなり七星橋は南岸は十六址を爲し梁は石を以てし長さ三十二丈溪の中央は沙洲に因り石を疊みて路と爲す長さ二十二丈北岸は五址にて石を梁とし長さ十丈なり通都橋は址十一にして木を以て梁とし上に屋を覆ふこと凡そ三百六十楹なり馮陂橋は石址木梁にて上に亭三十二楹ありと大清一統志に見えたり

(三)(案)此島或は天竺と稱する者にや尚考究すべし

第七十五章

ウンゲエン府

クーリンフ(建寧府)の市を去て行くこと三日其間斷えず幾多の市街城邑の地を過ぐ居民は象教徒にして生絲の產多く之を輸出すること甚だ夥し之を過て遂にウングエン市に達す(一)此地は砂糖製造の盛大なるに名あり大都に送て朝廷の用に供するもの皆な此より出づ此地未だ大可汗の領有に歸せざりし前は土人未だ精白の砂糖を製するの術を知らず僅に不完全なる方法にて之を煮て放冷し而して暗褐色の糊狀となりし者を得て滿足し居りしが大可汗陛下の治下に屬するに至てバビロン(二)より來りし人ありて其廷に仕へ砂糖精製の技に巧なりしを以て勅命を奉じて此地に來り土地の製造者を集め或る木材の灰を用ひ砂糖を精白にする方法を教授せりといふ(三)

(一)(案)ウンゲエン一本にはウンケン又ヴゲエンともあり如何なる地名の轉訛にや延平(ウエンピンフ)府と音韻稍相似たれども本文に建寧府より三日程首府福州より領に十五哩とあれば延平ならざること明かけし福州の近傍にて此位置に在る都會は閩清縣(ミンチンクヒエン)の外にはなし歐人の紀行にピンキンと記しミンシンゲとせしもあればリンケンとも訛したるものなるべし

(二)(案)バビロンとは阿弗利加(アフリカ)のカイロの事なり中世紀の頃は尼日多(エジプト)のバビロンと稱し其砂糖最も有名なりき

閩清縣

(三)(案)福州志に元の時迄は福建に砂糖精製の法を知る者なし蓋し其術は西人の教ふる所なりとあり

福州府

第七十六章

カンジウ府

尚ほ同じ方向に進むこと十五哩にしてカンジウ府に達す(一)蠻子九省の一たるコンチャ省(福建省)に屬す此には一大軍隊の駐在するあり此地の防禦を司どり且何れの市府にても叛逆の情狀ある時は必ず直に起て之を鎭壓するの用に備ふるなり府の中央を貫て一大河流る廣さ一哩にして兩岸には宏大華麗の家屋櫛を並べて立つ其前面には百千の船舶停泊して帆檣林立し各〻商品を滿載す殊に砂糖を以て最もとす其製造此地に於てするも其量亦甚だ夥し商賈印度より無數の船に多種各樣の寶玉眞珠を集載して此港内に來り泊し之を賣て巨利を博す此河水は直に海に注入す有名のサイッン港を距ること甚だ遠からず印度より來る船は遡く河水を溯り府内に達す府内は各種の食料品に富み爽快なる林園多く菓實の產豐かなり

(一)(案)カンジウ一本には明かにフッジウ(福州)府の大なるを述ぶとあり福州を指して留稱するに相違なけれども如何なる謂より轉じてカンジウとは爲りたるにや分明ならずマースデン氏はカントン(廣東)を誤稱して廣州(カンチウ)といひ遂にカンジウと

變ぜしものたること疑なしと稱すれども此地方と廣東とは隣省とはいひながら風馬牛も相及ばず殆ど別なきことなり謂ふに福州府治は侯官縣に在り元の時も亦然りフークワンの頭字フーを失てクワンのみとなし之に加ふるに州の變ウを以て遂に福州を稱するに此誤を以てせしにはあらざるか記して後の考を俟つ

第七十七章

泉州府及び漳州府

サイツン府及び其港井にチンアイ府

カンジウ(福州)の府市を去り河水を渡て東南に向て進む人烟殷盛の國内幾多の市街城邑人家櫛比各種食料豐富の地を過ぎ行くこと五日行々山を越え平原を過ぎ深林を通る林中多く樟腦を生ずる樹木を見る邦内亦山島野獸多し居民は象教徒にして大可汗に臣屬しカンジウ(福州)の治下に屬す五日の旅程を終れば重要壯麗なるサイツンの都府に達す其海岸に一良港あり船舶荷積利便に名あり海船商品を積載し去て蠻子地方一帯に散布す(一)此地に輸入し來る胡椒の量に至ては實に驚くべく西洋諸州列邦の需用に應せんとてアレキサンドリア港に輸入する量の如きは殆ど比較すべきにもあらず恐くは此地輸入高の百分一にも足らざるべし思ふに此の港は世界中の最大至便なる海港の一に數ふべく商賈の往來輻湊貨物の堆積集散の狀は實に言語筆墨の能く傳ふる所にあらず大可汗が此地より徴聚せらるゝ税銀は其高實に莫大なり即ち各商旅れも其賣價總額の一割を納入すべき定めなり商賈貨物を船に積載するには綺麗なる貨物の運賃は其價の三割を率とし胡椒には四割四分伽羅木白檀其他の藥品及び一般の商品には四割を課するを例とす故に商人は貨物を船積する毎に其税金運賃を込めて諸掛り費を貨物實價の半額と見積り計算するなり然れども諸費を差引き其手に殘る半額にてさへ利する所の莫大なる體は尚其金を以て更に同量の貨物を仕入れ再び同市場に出で來るを常とするにても知るべし當國は甚だ愉快の地なり人民は象教を信奉し生活に必要の品は物としてあらざるはなく其量甚だ豐かなり人民の氣質平和にして常に安寧寛容を愛す邦内文身を施す技に巧みなる者多きに名あり是を以て印度の内地より此府に來り針を以て皮膚を刺し好で身の修飾と爲す者少なからず(其方法は既に前に述べたり)

(一)(案)サイツンは泉州府(チワンチヤウフ)をいふなり福建省の有名の海港にして福州の西南大約百哩に在り圖經にも其地寒少なし故温に陵と曰ふ鹽を賣魚を鬻ぐを業とし商賈群集すとありて古より繁華の地なり印度其他南洋諸島との交通の衝に當る忽必烈(クブライ)が日本に軍を出せしも此地より船を發してマルコポロが西歸の時も發に寄港せしものと見ゆサイツンの語源に就ては學者の説種々あれど一も其要を得たるものなし是は中古以前より印度人阿剌比亞人(アラビア)が泉州(チワンチヤウ)の音を聞誤て轉訛し來り葡萄牙其他の歐洲人等も慣て盲傳へしに過ぎざるべし泉州府の府治は晋江縣に在り晋江府南に沿て流れ洛陽江北を流れ共に海に入る洛陽江には有名の洛陽橋一名萬安橋跨る長さ三百六十丈府の東邊穩て海に瀕す泉州灣と稱て北に湄州灣あり南に金門厦門ありて

天下の要港を爲すなり

サイッン(泉州 港に注入する河水は頗る廣大にて流甚だ急なりキンサイ府(杭州)外を流るゝ江水の一支流なり (一)其本川より分るゝ所に一城市ありチングイと名く此地には杯盞盂鉢等種々の磁器を製造す此外別に記すべき事なし (二)其製法左の如し恰も鑛山より鑛石を採集するが如く一種の土を集め高く廣くと之を堆積し三四十年間其儘に放置して之を動かすことなく風雨日光に曝す之に由て土質精良と成り前述の如き諸器物を形作るに適す器物已に形を成して之を窯内に入て燒く故に其土を採て堆積する者は自ら之を用ふるを得ず留めて子孫の用と爲すなり其製造の磁器の市中にて賣買せらるゝ量は實に莫大にしてヴェニスの銀貨一グロードを出さば磁盞八箇を求め得べし

(二)(案)泉州灣内に注ぐ河水とは晉江を謂ふなり然れども杭州府外を流るゝ河の一支流なりといひ此地には製陶の業あり杯といふに至ては事實にあるまじき筈にて到底著者の口より出でし旨とは思はれず杭州は浙江省の北部に在て錢塘江其南を環流し泉州は福建省の南部に在て晉江其南を流れ兩府の間相距ること實に支那里三千五十五里なり殊に浙江と福建との兩省の間は山脈重疊して自ら分水嶺を爲し浙江の水は南の方福建に至る者なく福建の水は北流して浙江に入る者なし焉ぞ錢唐江の一支水が數千里の遠地に山嶽を越て晉江となることを得んや往昔建寧府の甌寧縣より免寧瑗(建瓴)とて秣茶茶盞を出せしことあれども今は聞く所なく泉州府にて磁器を製せしことは曾てなく隣地永春州の德化縣にて白磁器を出し潔白にして愛すべく支那人は德化窯と稱し我邦の竹董家は建窯と喚て賞翫するものあれど泉州よりは遙に西北の地にて本文いふ所と地理合はず且其製造も本文曰ふが如く盛大ならず之を要するに當時の聞書又は譯本の原稿が前後彼此錯雜して此誤謬を致せしものなるべし

其支流が本川より分るゝ邊に一城市ありチングイと名くとあるは福建省の南部泉州同安縣の四支那里七十里の處に在る樟州府を謂ふに似たり而して本支二水の分るゝ處といふは九龍江の一水府南に來て二派に分るゝを指せしなるべし然れども此地に盂盞盂鉢等種々の磁器を製造す云々より以下は前注にいへるが如く他所の記事が誤て此に挿入せられ樟州府の事と爲りしなるべしユール氏の説に據れば是は福建省よりは遙に西北の方大山脈を隔てたる江西省の饒州の記事が錯て此に入り北位置の狀が稍相似たるより樟州に混じたるものなり饒州は鄱陽湖畔に在て樂平河の一支流昌江の分るゝ邊に位置し鄱陽湖に由て九江に通ず九江は楊子江の一大馬頭にて下流上海に通じ又大運河に依て蘇州への交通至便を極めたり而して昌江の上流に浮梁縣の景德鎮あり古より世界に有名なる磁器の大製造所にして製造の盛んなる天下無比なり本文いふ所は此地を指すに外ならざるなり

燈子地方九省の一なるコンチャ省(福建)の事は略說き畢れり此省より大可汗に多大なる貢租を納むること敢てキンサイ省(江浙行省)に讓らざるなり其他の諸省の都府市邑は著者自ら此兩省の如く足を入れざりしを以て敢て之に論及せず

爰に述べざるべからざる一事あり燈子には自ら其疆内一般に通用する普通語あり又一定の文字書法あれども其邦の殊なるに隨て各地固有の方言土語ありて其發音を異にすることゼノア。ミラン。フロレンスの間に於けるが如く各地固有の方言あるも他に伊太利諸國の普通語ありて互に能く相

通ずると一般なり

著者マルコポロが述べんと欲する事は未だ完く述べ畢れりといふにはあらねど今は此第二篇は此に筆を止め是より第三篇に移り印度國を大印度小印度中印度に區分し其諸州諸郡を記載せんとす其各地は著者が大可汗の勅命を奉じて屢〻其所用の爲に往來し其後父と叔父とに隨伴し亞爾渾王に降嫁せらるゝ公主の護衛として歸途の際足を入れしことあれば自ら親く實歴せし諸般異常の事實と他の信用すべき人より聞得たる所は勿論印度海岸の海圖中に見し所をも併せて說述せんとす

第三篇

第一章

印度大中小の別あり、土人の風俗習慣、印度國內重要著名なる異常の事物其第一航海用の一種の船舶

前篇既に種々の土地邦國の事を論載せしを以て今は一轉して印度地方に及び其奇事異狀を論せんとす其發端として其國內の商賈の常用する船の記事より始めんとす船は樅(もみ)材にて作る（一）何れも甲板一枚にて甲板下の空間を凡そ六十程の小室に分つ但船の大小に隨て多少ありとす商人一名每

に一室を專用す每船何れも良き舵機を備へ四本の帆檣ありて之に相應ずる丈の帆の數を備ふ中には時宜に應じて起伏自在の帆檣二本を備る者もあり更に大なる船には客室の外別に船艙の内を十三の隔壁にて分隔す此は厚き板を筍柄接にて互に接合して作るなり之を設くる所以は若し誤て巖上に衝突するか或は大海にて屢〻之あるが如く鯨魚の襲擊に逢うて船體に裂隙を生ずることある時其危急を防がんが爲なり夜間の航海には船舶波浪を切て進み爲に海上に白き泡を生ずるが爲に飢ゑたる鯨魚の知る所となり彼其食を獲んと欲して急劇に進み來り强く船體を擊て屢〻其底の一部を破ることあり斯る時は其害を受けし處より海水進て豫め設けある空井中に入る水夫其破孔の所在を知るや直に水の侵入せし處より貨物を取り去て之を他處に移す其各艙間は板にて密に閉隔りあるを以て其處には決して水の侵入する患なきなり既にして修覆畢れば貨物は元の取り出せし所に返す何れの船も都て板二重張にて作る即ち全體殘らず一遍の板張の上に更に再び板を以て重ね覆ふなり板は内外より船茹を塡め鐵釘にて固く接合す此邦には瀝青の產出なきが故に瀝青にて外面を被ふことはなしといへども總て船底は左の合劑にて塗る即ち生石灰と麻苧とを取り麻苧は細かに切り石灰と共に搗き合せ一種の樹木より取りし油を和せて膏藥樣の者と爲すなり此合劑は瀝青よりも粘着性一層强くして良き被覆料と成るなり

最も大なる船に在ては水夫を用ふること三百人に及ぶ其の次なるは二百若くは百五十人を用ふるもあり船の大小に隨て各〻異なり其載量は胡椒五千俵より六千俵に至る俵に代ふるに籃を以てするもあり昔は今よりも載量廣に大なりしが風波劇浪處々に起て諸島の沿岸を侵蝕破壞し殊に重要なる二三の港内に於て其害を逞くせしかば從來の如き載量にては海水淺くして入港すること能はざるを以て其後は追〻に船形を小くせり此等の船は艣橈を用ても亦動かすことを得べし艣橈を使ふには一挺每に四人を要す大なる船舶には二三艘の大なる脚船を備へ置くなり何れも大約一千籃の胡椒を積み六十人八十人又は百人の船員を乘込ましむべし此類の小形の船は親船が艣を用ひ居る時は勿論帆にて進み居る時にても屢〻之が曳船に用ひらるゝなり但し親船が帆を用ひ居る時は風向四分一點の時に限る眞追手の時は親船の帆陰となりて曳船の帆には風力當らずして曳船の進行止ればなり親船内には兼て十艘以上の小艇を備へ置き或は錨の運搬或は漁獲等其他種々の用に供す常には船側に掛け置き入用の時水に卸すなり凡そ船舶にして一年以上も航海に用ひられて修繕の必要なるを認むる時は本來の板張の上に更に一枚宛の板を張て三重と爲し船茹を詰め鐵釘を打つ等總て最初の時の如くす船體更に新に修繕を要する時來れば再び同樣の仕樣を繰返し六重の板張を爲す迄に至る其以上は最早使用に堪へず航海には適せぬ者と看做るゝなり

船の事は說き畢れり是より印度に論じ及ばんとす但其前に今現に我輩が話說し居る此海洋の方面に存在する一二の島々を述べんと欲す先づジパングと稱する島國を以て始むべし

(一)南部印度の材木類は歐洲の種類とは自ら殊なるものあれば本文船材を謂て檜樹又は松樹抔と爲すは稍〻其當を得ざるが如し蓋し回歸線間には檜も松も見ることなければなり著者は或は支那製造の船の印度貿易用に使用せられあるを見て述べたるものゝ如し(案)ユール氏曰く廣東福建地方にては松を以て造船の主要材とするなり而して福州よりは之を輸出すること莫大なるのみならず府内にては主なる薪材は檜樹の種類なりと

第二章

ジパング島

ジパング(一)は東洋中の一島にして大陸地即ち楂子(マンジ)地方の海岸を距ること大約千五百哩の處に在り(二)頗る著大の島にして居民は顏容端正形貌優美風俗頗る開明なり其信奉する所は偶像敎にして獨立の一國を爲し曾て他國の羈絆する所とならず獨り其國固有の君に依てのみ主宰せらる(三)邦内黃金を有すること無量にして其鑛脈無盡藏なり然れども國君敢に其輸出を許さざれば此國に來る商賈も至て少く外國より船舶の出入するも甚だ稀なり蓋し其皇室の富の非常なるは畢竟此等の事情より來る是れ余が曾て此地に脚を入れし者より親く聞く所なり宮殿の屋宇は全體に黃金の延板にて葺く恰も我邦の屋宇殊に寺院の屋蓋を鉛板にて葺くと同一の方法なり殿内の天井も亦此貴金屬にて造り所々の房室内には頗る厚き純金製の小卓子を置く窓も亦黃金を以て裝飾せり皇家の富有實に此の如く大なり殆ど人間想像の及ばざる程なりといふ島内亦眞珠を產すること殊に多し其色淡紅其形眞圓にして頗る大なり價格は白色の眞珠に匹敵し或は之に超るものもあり居民の或る一部族は死屍を土葬とし或る者は之を火葬とす土葬する者は死體の口中に眞珠一箇を含ましむるを風習とす邦内又數種の寶石を產出す

目下在位の忽必烈(クブライ)大可汗の胸中に一種燃るが如き慾望を生じ此島國を征服して其版圖に加へんと企圖せしも畢竟島内富實の名此の如く天下を聽かせしより起りしなり之を實行せんか爲に彼は無數の艦隊を艤裝し之に大軍隊を乘込ましめ其重要なる將官中より二人を選て其指揮の下に置けり一は其名をアッパカタンといひ一はプォンサンシンと稱せり(四)

(一)(案)我大日本國を謂ふなり日本國の支那音ジパングより轉訛せしものとす

(二)(案)千五百哩は蓋し支那里を以ていひしなるべし支那の海岸寧波邊より日本の南部迄は伊太利哩の五百哩より遠からざればなり

(三)(案)獨立の國體を維持するは日本國民の特得の長處にて開闢以來連綿として他國の羈絆に入りしを見ず

(四)(案)アッパカタンは一本にはアバカンとあり阿想罕(アルカン)の訛なりプォンサンシンは范廷(ファンヒンヤング)ワン將軍の訛なるべし范文虎(ファンウエンフ)を謂ふなり

此遠征軍の諸艦はザイツン(泉州)とキンサイ(杭州)の港より出發し兩國間の海を航して安全に此島國に着せり然れども指揮官二人の間に意思阻隔して互に猜疑を生じ甲は乙の謀略を蔑視して其實行を拒みし等にて遂に一城一市をも占領することを得ず僅に一城のみ守備兵の降伏を拒みたるに拘はらず大攻擊の後之を略取し城兵は除さず塵殺すべき命を傳へて悉く其首級を斷てり其中八人は右の腕の皮膚と肉との間に寶石を植ゑ込み以て護身の呪符と爲し鐵を以て安全に他の殺傷を受けざるやう保護し居りしが故に劒を以て斬ることを得ず此等發見せらるゝや遂に重き木槌にて擊て之を殺せり(五)

(五)(案)此書往〻奇怪の記事あり我邦古より此の如き怪事なきは幼童といへども尚能く知る所なり是れ皆な當時蒙古の民間に流布せし俗說を聞て著者が其儘に口述せし所なるべし

其後間もなく天候劇かに變じ北風暴力を以て吹き荒み海岸近くに在りし蒙古の船は互に衝突せんとするに至りしを以て船中の諸將合議の上直に陸地より船を離すべしと決し衆兵の乘船するを待て速に遠く沖に出でたり然れども如何にせん暴風次第に其威力を縱にして數艘の船は遂に沈沒することゝなれり之に乘組居し兵衆は破船の木片に取付ジパング(日本國)の海岸より凡そ四哩程も隔りたる一島に上陸して幾に命を拾ふを得たり其餘陸地より遠き處に在て幸に暴風の難を免れし船の中には二人の將帥及び他の重要なる士官即ち十萬若くは一萬の兵に將たるべき人々乘込み居たるが遂に船を返して國に到り大可汗に此趣を奏するの已むを得ざるに至れり破船の後、島に上陸せし者は其數凡そ三萬にして乘るに船なく指揮官には取捨てられ取るべき武器なく食ふべき食なく捕虜となるか餓死するより外に術なく殊に島中には人家なければ雨露を凌ぎ睡眠することさへ得べからざる境遇に立到れり風歌み浪靜まり海平かとなりたるを見てジパングの本土の者は暫くも猶豫せず大軍を率ひ無數の船に乘り破船漂流して上陸せし蒙古人を捕へんとて競て其島に上陸し隊伍を亂して四分五裂し孰れも敵を搜し出して手柄と爲さんものと進み來りしかば蒙古人は早くも之を覺り注意して其動靜を察し敵は只管一方の路より左右を顧みず急ぎ追ひ來るを知りて島のの中部なる高き處に潛み隱れ敵を遣り過ごして他の一方の路より海岸を迂廻し敵が上陸して繫ぎ置きし船隊の停泊所に出で來て見れば船は乘り捨てたる儘旗印等も其儘飜りありき蒙古人は是れ幸と直に之に飛乘りて島より漕去りジパングの一首都に向て進みしが旗印の其儘なるに由て何の故障もなく府内に突入することを得たり(六)然るに府内には人民とては婦女子の外は實に僅かなりければ此等の者は盡く逐ひ出して婦女は皆な留めて各之を分取せり國君之を聞て大に驚き直に命を降して密に其府を封鎖し嚴重に之を圍て一人の出入をも許さざること六ヶ月に及びけり

蒙古人も是に至て他に救濟の來る見込もなければ生命を助けらるゝを條件として遂に降伏する事とは爲れり是れ實に一二六四年中に在りし事なり（七）此遠征軍の大不幸なる結果に終りしは全く兩大將の軋轢に原因せし事を其後大可汗の知る所となるや命じて其一人の首を斬り他の一人は未開不毛なるゾルザの島に放逐し（八）而して其地に達せば必ず罪人を處するに左の法を以てす新たに剝ぎ取りし野牛の生皮を以て兩腕を併せて全身を卷き固く之を縫合はせて自然に乾燥するに任す生皮乾燥する時は次第に全身を緊め付けて身の運轉自由を失ひ遂に悲慘の最後を遂ぐるに至て已む

（六）ユール氏曰くマルコポロが口述せし所其大體に於ては歴史にある所と稍〻符合し且兩將軍軋轢の事は史文の缺を補ふに足るが如しといへども破船より逃れし蒙古人が日本の首府を占領せし杯は實際有り得べき事にあらず是は當時民間の虛傳妄說に過ぎず到底信ずべからざるなりと（案）是は我邦にては三尺の童子も亦能く記憶する蒙古來寇の事にて後宇多天皇の文永十一年（洋曆一二七四年）と弘安四年（一二八一）との兩大役を誤り勝ちにいひ傳へたるなり蒙古の大可汗忽必烈國號を立てゝ元といひ屬と使を遣はしけれど其報を得ざるを怒り文永十一年十月大兵を發し賊艘九百餘艘を以て來り攻め對馬壹岐を却掠し博多に迫る我諸將力戰して賊將劉復亨を殺す元兵火器を用ひて我兵死傷多し偶ま大風起り賊艘漂沒する者多く餘賊花に乘じて遁れ去る是を文永の役といふ元主大兵を失ひ憤怨に堪へず屢〻使を遣はして至る北條時宗皆之を斬る元主益〻怒り兵十萬を發し阿剌罕（アルガン）を右丞相とし范文虎（ファンウエンフヒユ）洪茶丘（ホンチヤキウ）を右丞とし李庭張巴圖を副へ朝鮮兵二萬五千を以て懲罰たらしめ艦船海を蔽て來り直に壹岐を掠め博多に迫る我兵之を拒ぎ苦戰六十日賊兵利を失ひ轉じて鷹島に據る七月暴日會〻颶風大に起り數萬の賊艦悉く覆沒す賊の諸將各々艦を捨ひ之に乘て遁れ去り士卒十餘萬を島中に棄つ來寇百戸なる者を推して帥と爲し木を伐り舟を作り歸計を爲さんとするに當り我兵之を知り襲て之を殲す純萃の漢人萬餘を殘し殺さずして之を奴とす未だ幾なしらず生て還る者僅に三人なりといふ之を弘安四年の役とす賊軍の島に據りしは破船前なり本文之を破船後とす一城を占領せしとは壹岐對馬を刼掠せしないふ殘兵が首都を取りし杯とは固より無稽の言なり此條に限らず本書には往〻此の如き無稽の風說を載す讀者宜く其心して見るべし

（七）（案）一二六四年は一二七四年の誤なり即ち本文は文永十一の役のみを擧て後の弘安の大役をも之に合せて一役に爲したるなり

（八）（案）ゾルザはチョルチャの訛にて女眞を謂ふ即ち今の滿洲なり

第三章

ジパンゲにて信奉する偶像の種類及び人肉を食ふことを嗜む人種

此ジパング（日本國）島と其附近の諸島にて信仰する偶像の形は千差萬樣にして中には牛の頭なるあり猪犬山羊其他種々なる獸の頭を持てるもあり或は一頭にして兩面なるあり或は三頭ありて其一は正當の位置に在り他の二頭は左右の肩の上に在り或は四手を具ふるものあり或は十手若くは百手なるもあり其數の多きに隨て威力も亦大なりと稱して崇信することも殊更に厚きなり何故に其信奉の神佛をして此の如き種々異樣の形を爲さしむるやと問ふ者あれば祖先以來の遺法に由る

と答へ且言ふ吾等既に先人より此の如き佛神を傳へられたり吾等も亦我子孫に此の如き佛神を傳ふるのみと（一）此諸佛偶像に向て種々の祭式を行ふに其法醜惡兇暴言ふに忍びず强て之を云はば我書を汚すに過ぎざるのみ但讀者に告げざるべからざるは此等諸島に棲息する偶像教の人民が其敵を執ふることありて敵若し金を以て之を贖ふことを得ざる時は親族朋友一同を屋内に招待して後捕虜を殺し其體を調理して俱に之を食ひ歡を盡して散ずる一事なり蓋し人肉を以て如何なる食料よりも香味迥かに優れたりと爲すに由るなり

（一）（案）觀世音菩薩の十一面千手を具ふる類を謂ふなり（アヴァロキテスヴァラボデサツブ）

（二）（案）臺灣島一部生蕃の類をいふなり

第四章

ジバング島と蠻子地方との中間の支那海

ジバング島の在る所の海を名けて支那海といふ此東方の海は熟錬せし水先と屢〻此方面を航して地理に精通せし海客の報ずる所に據れば廣濶無邊にして中に七千四百四十以上の島嶼あり就れも人民稠密なりといふ此等の諸島に生植する樹木中には一として芳香を放たざるものなし香料藥劑を產すること夥しくして伽羅木黑白胡椒を以て其最とす凡そ諸島中に產出する黃金及び其他品類の價額幾許なるやを算定するは容易の事にあらず斯く富有なる產物あるも大陸よりの距離甚だ遠く其間の航海甚だ不便困難にして假令通商に專用の船を艤してザイツン（泉州）キンサイ（杭州）抔より出發するも冬往て夏歸り殆ど其航海に全一年を費さゞるべからず之が爲に得る所甚だ少し蓋し此海上に在ては只二方向の風あるのみ一は冬季のみに吹き一は夏季のみに吹く故に出るは此一風に賴て往き歸航には必ず他の一風を待たざるべからず此等の諸島は印度大洲を距ること甚だ遠し此海を名けて支那海といふも其實は大洋の一部のみ猶ほ吾邦が英吉利海エヂアン海と稱するが如く東方の人は常に支那海印度海と稱すれども要するに就れも總稱大洋の一部たるに過ぎざるのみ此等の諸島諸島は何れも著者が往來の行路外に在て遠く隔たりたり自ら實踐せし地にもあらず且は大可汗の版圖中にもあらざれば此邊にて口述を止め是より再びザイツン（泉州）に返り辯する所あらんとす

第五章

海南灣即ち東京灣

ケイナン灣及び北諸川

ザイツン(泉州)港を出でゝ(一)航路を西に取り稍〻南に偏して進むこと千五百哩ケーナンと稱する海灣を過ぐ其北部沿岸線の距離は之を航するに十二个月を要す東北は燈子の南海を限りとし南西はアニア國トロマン國其他總に出せし諸國に近接せし處迄延長す

(一)(案)ケイナンは海南(ハイナン)の訛なり今の瓊洲なり支那の南海の一大島にして航海家の常に東京灣と名くる灣内に在るなり

(二)(案)アニアは安南(アンナム)の訛にして東京を指ふトロマンは第二篇第四十八章のトロマンの條下に注釋せしが如く貴州の苗蠻の訛稱なれども此條のトロマンは交趾支那を指して謂ひしならん俗考ふべし

此灣内には無數の島嶼散布し十中の八九は人民善く繁殖せり而して其沿岸には海中より多く沙金を採集すべき處あり是れ此に注ぐ河川より排出する所に係る衆て銅及び他の諸品を產すること多く交易盛に行はれ各島の間互に有無相通ず大陸の居民との間にも貿易の道能く開け金と銅とを以て所用の物品と交換す諸島多くは穀物の產出夥し抑も此灣は其廣濶なると人民の衆多なる點とに於ては別に一箇の世界を現出せるものゝ如し(三)

(三)(案)支那南洋の各島非里比納(ヒリピン)諸島迄も併せ稱するものなるべし

第六章

占城即ち交趾支那

ジャムパ國其國王及び大可汗に服從の由來

今や前條の件々既に述べ了れり既に前述の如くザイツン(泉州)を去て一千五百哩一大灣を橫斷すればジャンパと稱する國に着す廣袤甚だ大にして且富饒なり(一)固有の王ありて之を管領す一種專有の國語あり人民は象教の信徒なり年々大可汗へは象と伽羅木を貢納とす其由來を尋ねば左の如し忽必烈可汗其國の大に富めるを聞き一二六八年の頃步騎の大軍を發し以て之を制伏せんと欲し(二)其一將ソガッ(三)と稱する者を司令官とし進て之を襲はしめたり國王の名をアサムバンといふ(四)年既に老いたれば自ら戰場に出でゝ此可汗の大兵に敵することの難きを覺り城砦に退て堅く守り勇を振て之を防禦せしが如何にせん城下の市街城外の村落は皆陷落して屠り盡され全領地悉く敵の爲に蹂躙せられんとするを知りければ終には大可汗に特使を派遣して我從來我領所を治め民を安んじ幸に和平の狀を保ちしが今や此老境に至て皇軍の來征を受け家國の覆沒目前に迫る之を免れんと欲して憂心忡々寢食に遑なし願くば軍を還して攻伐を止め玉はゞ謹で年々貢するに巨象と香木とを以てせん敢て請ふと云はせたり可汗は此願を聞て其情を憐み直に令をソガッに下し其麾下の軍を返して更に他の方面に移し猶豫なく其國々を攻略せんことを以てせり是より以後ジャムパ國王は可汗に歲貢を廢せず無量多數の沈香と其邦内の最美最大の象二十頭とを納めたりジャムパ王が可汗の臣隸となりし次第此の如し

(一)(案)ジャムパはチャムパの訛なり隣地附庸の東浦寨(カムボチヤ)其他後印度の地名と共に本は印度名より傳來せしものにて今の安南(ガンナン)河畔のメガルプル近傍に在りし往古の一都市の名に取りしが如し現に唐の玄奘三藏の西域記にも後印度の一國を瞻波(チヤムパ)と記し置けり十五世紀の頃迄は安南より東浦寨(カムボチヤ)に至る沿岸の全土及び今の交趾支那と稱する土地をも併せてチャムパ國と名けしものと見ゆ支那にては之を占城(チエンチヤン)と稱す

(二)(案)元兵の占城を擊ちしは我弘安五年元の至元十九年壬午西曆一二八二年六月なり本文一二六八年とあるは原文に MCCLXXXII とありしを MCCLXVIII と誤寫せしより起りしものなるべし

(三)(案)ソガツは唆都(ソンツ)の訛なり柴多に作るを正とす時に福州の行省政事たりき

(四)(案)占城王の名見る所なしユール氏曰く支那の一書に王の名をシンホパラと稱すとあり本文のアサムベレは蓋し此訛傳なるべしと或は然らん

次に此王と國とに關する二三の事實を說くべし第一此國內の一切の少女は先づ國王の試みを經て後にあらざれば他人に嫁くことを許さず之を試みて其意に適ひし者は暫く王宮に留め置く之を放ち返す時は與ふるに相當の嫁資を以てす以て其身の階級相當の配偶を求むるに易からしむマルコポロが此國に到りしは一二八〇年なり (五)當時王には三百二十六人の王子王女あり王子の多くは大抵勇敢なる軍人なき國內象と伽羅木に富む最良眞黑の黑檀の深林も亦多し其材は美脆なる種々の家具を製するに用ひらる其他別に言ふべき程の事なし因て此國の事は爰に止め次に瓜哇(ジヤワ)と稱する島を述ぶべし

(五)(案)マルコポロの占城に到りしを一二八〇年とするは誤なるべしマースデンは若し之を實とすれば殊更に帝勅にて派遣せられしものならん然れども一二九一年頃支那より最後の歸國の際にも船を寄せたるものならんと曰へり羅甸語本に一二八八年に作るものありユール氏は之を以て當を得たるものとし一二九〇年の頃使命を終へて印度海より歸京せし事が本文に明記あれば占城にも此時を以て足を入れしなるべしと曰へり其れ或は然らん

第七章

瓜哇島

ジャムパ(占城)を去て南々西に航すること一千五百哩にして極て大なる一島に達す之を瓜哇(ジヤワ)と名く (一)海上の事に精通する二三の航海者の通報する所に據れば世界中に於ける最大の島にして周廻三千哩以上ありといふ純然たる一國王の領する所にして人民は他の何れの國にも貢租を納めたることなし總て偶像の信奉者なり島內甚だ商品に富む胡椒肉豆蔻甘松香良薑畢澄果丁香其他種々なる香料藥劑を以て國產とす (二)是に由て無數の商船來舶して商品を積取り船主をして莫大の利を得せしむ島內にて採集する黃金の量に至ては實に計數信用以上とす之を概觀するにザイツン(泉州)及び蠻子(マンジ)地方の商人が往古より今日に至る迄陸續として多量の黃金を輸入し來るは皆な此地よりするなり無量の香料を舶載して遍く全世界に分配するも其大部分は又此島より得來るなり

(三) 而かも可汗にして之を征伐略取せざるは畢竟其距離遠くして航海困難なるに因る

(一)此章に於ては著者は瓜哇(ジャワ)と婆羅(ボルネオ)の二島に就て集採せし記事を誤て一處に混合して口述せしに似たり細かに之を閲すれば其間自ら瓜哇に屬する者と婆羅に關する者との別あるを見る

(二)胡椒は瓜哇にも婆羅にも産すれども丁香と肉豆蔻は二島共に産出することなし蓋し此地南海諸島の互市場にして百貨輻輳散萃だ盛んなりしより此傳聞の誤を致せしに過ぎず

(三)瓜哇は黄金の産出に名なし却て婆羅に於ては其採集少なからずとす

第八章

ソンヅル島(クンルン)コンヅル島及びロカク國

瓜哇島及び巫來由半島

瓜哇島(占城の誤)を去て南々西の間に航路を取り進むこと七百哩にして二島を見る大なる方をソンヅルと曰ひ小なるをコンヅルと曰ふ(一)二島共に無人島なれば別に述ぶべき要なし此二島より東南(西北)に向ひ進むこと五十(五百)哩にして宏大富饒の一州に達す大陸地の一部分たり名けてロカクト曰ふ(二)居民は象教徒にして固有の邦語あり本來の國王あり之を統馭す未だ曾て他に貢租を納れしことあらず此國にして若し攻撃し得べくんば可汗安んぞ其版圖中に加ふるに躊躇せんや國内蘇木を産すること最も夥し金の産出は實に無盡藏なり又鳥獸に富みて狩獵に妙なり既に前に述べし如く他の諸邦に貨幣として通用する一切の貝子(タカラガイ)は都て此國より輸出する所なり邦内又ベルチと稱する一種の果實を培養す大さ檸檬(レモン)程にて香味頗る佳なり右に述べし外は其國土未開にして山岳多く且國王其國内一切の秘密事をして成るべく他邦に漏れざらしめんが爲めに力めて外人の邦内に入るを阻止するが故に隨て茲に遊ぶ者も稀なれば別に記述すべき事もなし(三)

(一)コンヅルは世に行はるゝ地圖に載する所のプロコンドールたること固より疑なし左れば瓜哇島より南々西に向ふとありては方角も距離も全く誤とせざるべからずプロコンドール島は柬埔寨(カムボチヤ)の海上に在る島にて距離も甚だ遠からず若し本文の如く瓜哇より南々西に進むとすれば渺々たる南大洋に航することゝなりて澳太利亞(オーストラリア)迄は一島もなきことゝなる瓜哇は著者自ら到りしことなく他人より聽取りし迄の事にて序に愛に挿入せしに過ぎず因ては再び最初の出發地に歸り而して端を改て筆を起さざるべからず乃ち知る瓜哇島を去てとあるは占城を去ての誤なることを(案)プロコンドール島は支那にては昆侖島と曰ふアロは巫來由語にて島の義なり非古亞則此亞人が支那に赴く航路の要島に當る當時彼輩は之を喚てスンダルと做せしも其實は二島合せて瓢形なるが故に巫來由人之をコンヅルと曰ひしより來るなりコンヅルは巫來由語羅鄂の義なり著者は此二名を分て兩島の名稱とせしのみ

(二)(案)コンドール島即ち昆侖島より東南の方には婆羅州(ボルネオ)其他無數の島々あるのみ斷じて大陸地のあるべき筈なし左れば東南は西の誤なること論なし而して進むこと五十哩とあるは一本には五百哩とあり隨ふべきに似たりロカクとは何れの國を指すか審かならずマースデンは柬埔寨(カムボチヤ)國の古都をラウエリと曰ひしを以て其一地とすれど率強附會に過ぎず余は暹羅(シヤム)領たる巫來由半島の六坤(ルコン)の訛にして當時六坤の名を以て巫來由半島の統稱と爲せしものと思ふ之を六坤とすれば次章にロカクを去て南方に航すること五百哩ペンタンといふ一島に達するとあるに頗る能く適合するなり斯く見來れば ロカク國は巫來由半島全

檀と暹羅とを併せ謂ふに外ならざるなり六坤一に六昆に作る我元和年間山田仁左衛門長政暹羅に入り王を助て亂を平げ六昆の地に封ぜらるといふもの即ち此地なり

(二)(案)ロカクを以て六坤と爲し巫來由半島と暹羅國とを指すものとせば金は專ら半島に産して八大呢・吉連丹・丁嗎奴・彭亨等の常輸出品なり蘇木は歐羅巴にてサパン木と稱するも本來は巫來由産より出でたる種なれば半島の沿岸に多きこと固より論なし桑の半島内に多きことは遙ぶる迄もなし貝子に至ては多く蘇祿島より出ずとの説あれど半島沿岸に夥く産するといへるもの其實を得たるに近し然れば則ち其産物より見るもロカクの六坤たり巫來由半島たること疑なきに似たり六坤の南を宋卡と曰ふ謝清高海錄に曰く宋卡或は宋腳勝に作る暹羅の南に在り土著巫來由と名く其東南に八大呢あり海船來り泊す山に金を産す支那人多く往て金を淘す國暹羅に屬し歲毎に金を貢す吉連丹其東南に在り又金を産す支那人毎歲此に至り或は貨物を販賣し胡椒を種殖し或は山頂に居て金沙を取る土産の多きものを檳榔胡椒とす金三十斤を以て暹羅への歲貢とす丁嗎奴は其東南に在り各國共に桑を養ふ丁嗎奴最も甚し彭亨其南に在り共に金を産すと又以て一體と爲すに足る又曰く彭亨より東南行する一日餘四に轉じて白石口に入る更に西北に行くこと日餘なれば舊柔佛に到る新嘉坡を謂ふなり

第九章

ペンタン島及びマライユル國

ロカク(六坤又六昆)を去て南方に航すること五百哩にしてペンタンと曰へる一島に達す(一)沿岸一望荒野未墾の墟なり然れども樹林繁茂し香木の類に富むロカク(半島)とペンタン島の間を進むこと六十哩其間海の深さ僅に四尋のみ是を以て此水路を航行するには船の舵を揚げて海底に觸れざらしむ(二)此六十哩を航進して(後更に三十哩を過ぐれば)一島に達す一箇の王國を成して其名をマライユル國と曰ふ首府も亦同名を以て稱せらる(三)其國王ありて國民を統治す別に一種の國語あり市街は宏大にして人家能く整頓せり土地香料藥劑に富み其貿易甚だ繁盛なり其餘記述すべき事なし乃ち進で小瓜哇を說くべし

(一)ペンタンは麻剌甲海峽の東口に近き一島にて普通には檳榔島と稱す港を「リロ」と曰ふ貿易盛昌の地なり(案)支那人は之を檳榔嶼と稱す而して其所在の位置を記すに大に誤あり

(二)(案)ロカク州とペンタン島との間とあるロカク州は半島を謂ふ即ち麻剌甲海峽なり

(三)マライユル島と曰ひマライユル王國と曰ふは著者は必ず其百年程以前に巫來由半島の東南端に建設せし巫來由王國(オランダマラユ)を指すに相違なし一二五二年頃には其政府は麻剌甲に移されたりと雖ども猶ほ常に原地を稱するに用ひられたり其地は今は柔佛國の中に包含せらる其後本土と之に接近せる一島とに由て成る所の海峽を新嘉坡と稱するに至りしも其舊都府の名より來るなり俗に之を新嘉坡と曰ふ(案)此一節の初に後更に三十哩を過ぐればとあるは恕文なり除くを其とす次章にも出發地を檳榔島としてマラユルとせざるを見ればマラユルは行路外の地なるを便宜上此に挿入して口述せしに過ぎずユール氏曰くマラユルは何れの地を指すや明文なければ確定は爲し難けれども疑問は巴隣倣(蘇門答臘南部の)と其殖民地たる巫來由半島のシンガプラ(新嘉坡)の兩地の上に在るなり巴隣倣はアルボケルク氏の註釋に據れば瓜哇人は之をマラヨと稱せし由パルロ氏の蘇門答臘地名目錄には巴隣倣に次ぐものとしてタナーマラユを載せ

たり要するに予は此解釋に從はんと欲するものなりシンガプラは巴鄰邨より人民の移殖して建設せし處にして自ら爪哇の藩屬地なり殊に繁榮を極め東西の海客爰に輻輳して一大市場を爲せり知何の船と雖ども此海峽を過ぐるものは此シンガプラが目中に入らざる理なく假令足此地を履まざるも其位置を誤るべからず然るに世には動もすれば此マラユを以て直に麻剌甲を指すものと爲す人あれど所は杜撰の最も甚しきものなり蓋し麻剌甲はマルコポロの旅行時代よりは凡そ百年後の創設に係る前文にマースデン氏が一二五二年頃其政府は麻剌甲に移れりと曰ひしは傳聞の誤なり

蘇門答臘島

第十章

小瓜哇島

ペンタン島(檳榔島)を去て大約一百哩南東の方に航進する時は小瓜哇島に到るべし(一)比較上より之を小と名くといへども周廻殆ど二千哩には下らず此島には八王國あり各其王ありて之を統治す而して各國自ら互に異なりたる固有の邦語あり人民は何れも象教宗徒にて島内無量の財寶あり諸種の香料伽羅香木染料の蘇木其他種々の藥劑品を産す但海路遼遠航海危險の爲めに歐羅巴諸國へは輸入せざれど蠻子乞觧の諸州へは自ら輸送の路開け居るなり

(一)小瓜哇とは今の蘇門答臘を謂ふなり阿剌比亞人は瓜哇し蘇門答臘も共に瓜哇と稱して瓜哇を大瓜哇とし蘇門答臘を小瓜哇とするは其幅員の大小に因て謂ふにはあらず本末を區別して瓜哇本土を大とせしのみ

(二)其他種々の藥劑とは安息香樟腦等を謂ふならん共に蘇門答臘の重要なる商品なり(案)無量の財寶とは其豐富の産物たる金を謂ふなり瀛環志略にも地には沙穀米、沙藤、胡椒、檳榔、血竭、氷片腦、安息香を産し山には黄金銅鐵硫黄を産し河には金沙を産し海には龍涎香を産し獸には水馬犀牛象虎多く木には椰子多く處々林を成すとあり

之より八个王國箇々の居民に關する事を述ぶべし先づ第一に讀者に告げざるべからざるは島の位置北極星を見るべからざる程に遠く南方に在ることなり八个國の中其六个國はマルコポロ自ら實踐せし所なり他の二个國は實歴するの機會なかりければ此等は除きて今其餘を擧て逐次に口述せんとす(三)

(三)島は赤道線に横斷さるゝを以て其南部一帶の地に住する者は北極星を見ざること勿論なり北部地方の者といへども之を見るは稀にして假令之を見るも別段の事ある時のみに限るなり

伯剌克又裏剌

第十一章

小瓜哇島のフェレク國

先づ八國の一なるフェレク國より說くべし(一)住民の中十の八九は象教徒なれど海港の市街に住むものには屢〻港内に來る回々教の商人の感化を受て回々教に改宗せし者も多し山地に住する人民は其狀獸類と擇ぶ所なく常に人肉を食ひ其他淸潔不潔を問はず一切の肉を食ふ(二)其宗教は種々

の物體を崇拜し早朝起き出でゝ先づ眼に觸れし物を以て人々各自に其日終日之を神として崇敬するなり

(一)(案)フェレクとは伯剌克(ペルラク)の訛なり伯剌克は蘇門答臘(スモタラ)島の北面海岸の東端に在り又パルラクともパルラクとも云ふ又邊剌(パラ)といふ瀛環志略に霑里とあるもの之を謂ふに似たり歐洲海客の所謂金剛岬は土人之をタンジョンパルラクと名くタンジョンは岬の義なり蘇門答臘島の東北角なりそれより大約三十二哩の南にパルラといへる河と市街とあり舊都の迹なりといふ或は然らんマレンチン氏は之を以てマルコポロのフェレクに當てたりマースデン曰く尾音のクは蘇門答臘(スモタラ)にては發音せずして除くを常とすパルラクがパルラとなりパッタクがパッタとなるの類なりと(案)ユール氏曰く阿剌比亞(アラビア)人にはパ行の音なく之に代ふるにファフィ等の音を以てす著者は蓋し之を阿剌比亞人より得たるものなりと

(二)(案)此地の土人は人肉を食ひ其狀獸類の如しとは蘇門答臘(スモタラ)島内部の高地パッタ地方の土人を謂ふなり今は北緯三度以外には居らずといふ

第十二章

第二バスマン國

前章に所謂フェレク國を去てバスマン國に入る獨立國にして固有の邦語あり(一)居民は大可汗に服從すと稱すれども貢租は納めしことなし是れ其距離遠くして皇軍此に到ること能はざればなり之を要するに全島一帶名のみは大可汗に服屬し居るなり若し船舶の此島を過ぐるものあるに過へば之を機として或は奇珍の方物を貢し殊に異種の鷹を獻ずることあり

(一)(案)バスマンは叭四(パセイ)を謂ふなるべしスチーレルの地圖にはパッシルとあり葡萄牙人がパセムといひしより阿剌比亞人はこれをパサムとしそれよりバスマンと訛せしに似たり叭四は北面海岸に在て金剛岬より甚だ遠からず有名なる大市府にしてマジャパヒット麻剌甲(マラッカ)とに並て多島海中の三大都と稱せられたり

此國には野生の象あり犀あり共に少なしとせず犀は大さに於ては象に及ばざること遠しといへども足脚は相齊し其皮は水牛に似たり前額の中央に一本の角ありといへども之を以て兵器とし敵を斃て之を害することはなし之が爲には只其舌と膝脚とを用ふるのみ舌には長き鋭利なる刺針數條を具ふ人あり之を侵す時は進で之を踏倒し而して後舌を以て之を裂き殘ふなり(二)其頭は野猪の頭の如く常に之を地に向て低る此者常に泥沼中に在るを好み其習性甚だ汚なし歐洲の人常に曰ふ其形質自ら少婦の手に執へらるゝに至ると豈に其れ然らんや全くそれとは反對の性を具ふ者とす此地には諸種の猴類あり鴉の如く黑き鷹あり其形大にして諸鳥を逐ふに最も巧なり

印度より舶載せし由にて侏儒の干物とて一時歐洲に喧傳せし物は畢竟假構の童話に過ぎず其物たる左の如くにして此國にて製造せし僞造の人間なり此國にては一種大さ格好能くして顏容人に類する猿猴あり之を捕て人間を僞造するを以て業とする者先づ其皮毛を剃り落し僅に頤邊と天然に人體に生じあるべき處とにのみ之を留め置き而して後之を乾燥し樟腦と他の藥品とを以て之を貯

藏し宛も矮小なる人と見ゆるやう調製して木の箱に納め以て之を商賈に鬻ぐ商賈は之を携て世界の處々に販賣するなり其方法たるや實に此の如きものなれば到底一つの欺騙たるに過ぎず印度にせよ他の如何なる國にせよ如何に野蠻未開の處にもせよ右等の如き矮小短身の侏儒のあり得べき筈なし此國の事は既に言ひ盡せり其餘說くべき事なければ次のサマラと稱する國を說くべし

(二)(案)象も犀も蘇門答臘の土產なることは世人の普く知る所なり其角を襲擊の兵器とし用ひずとか舌の構造剃針ありて敵を傷くる等の事は蓋し著者人の爲に欺かれたるか若くは假構の記文を輕信せしに過ぎざるべし祇て肉を破るといへることは近世迄も世人に信ぜられ居たり獨乙の醫員ボンヲウス氏抔も其著書中に記載し置けり(案)蘇門答臘には全島の山地森林に象多く繁殖す而して印度の本土產とは一種其類を殊にし却て錫蘭產と同じ印度產は眞肋骨六枚假肋骨十三枚なるに蘇門答臘產は眞肋六枚假肋十四枚なりといふ蘇門答臘特產の犀は二角なり而して其皮毛の水牛に似たるは此種の者に限る然れども此地には必ず此一種に限るとも云はず單角の者もあるべし但單角と双角とは其外貌甚だ殊なり双角の者は水牛(バタクカルバウ)犀又は象皮犀(バタクガジヤー)の異名もあるなり著者の說は蓋し實物實驗より出でしにはあらざるべし

第十三章

第三サマラ國

バスマン(ボイ)を去てサマラ國(サマタラ)に入る蘇門苔臘(スモタラ)島八个國の一なり(一)マルコポロは此に五个月間滯在せり蓋し已むことを得ず逆風の爲に阻留せられしなり此地に在ては固より北極星を見るを得ず北斗星中の諸星さへも見るべからず居民は象教徒なり有力なる一君長ありて之を支配し而して彼又自ら大可汗の臣僕たるを認め居れり

マルコポロ當時風に阻てられて據義なく斯くも此島に長逗留となりしを以て大約二千人の一團を以て陸上住居を計り土蕃の斷ず際を伺て道途に迷ふ人を執へ之を殺して其肉を食はんとする侵害を禦がんが爲に陸に向ひし方には其住居を圍みて深き大なる渠(ホリ)を掘り其左右の兩端をして船の停泊し居る港に迄達せしめ島內に潤澤なる木材を取り來て種々の防舍又は角面堡を建てゝ此渠を堅固にし斯くも一種の築城法を以て防禦を嚴重にして滯留五个月の間幸に一行の安全を保つことを得たり此等の爲めに大に土人を感悟せしめて其信用を博することゝなり彼等と約束を結て食料其他必要品の供給を得るに至れり

卓上に供へる魚類に至ては其美なること世界無比にして何れの處に到るも此國の如き者を見ず小麥は此地に生せざれども居民は專ら米を食ふ葡萄酒は造らざれど椰子に類する一種の樹より左の方法に據て優れたる飲料を製す其法、樹の一枝を截り離ち其截口に容器を置き傷口より浸出流下する汁液を受くれば一晝夜にして之に充隆す此飲料の質の美にして健康に益あるは水種諸病及

肺脾の諸疾患に用ひて輕快を與ふるにても知るべし截り斷ちし枝より最早汁液を出さゞるに至れば河水より水管又は堀割にて充分の水を引き來り巧みに樹根に水を注ぐ斯くする時は汁液再び流出すること初の如し樹に由て汁液の色天然に赤きあり或は白色の者もあり此地また椰子實を產す大さ人頭の如く其內部に食て味最も甘く美なること乳汁の如き物を貯ふ此果肉の空隙には水の如き透明なる汁液充滿し清涼甘美にして香味優れて佳良なるは葡萄酒其他如何なる飲料も之に及ぶものなし居民は善惡の別なく其種類を問はず如何なる肉にても食料として之を食ふ

(一)(案)サマラはマースデン氏は北面海岸のペヂルと叭西の間に在るサマランガに當つべしと曰ひたれどユール氏は之を否認しサマランガよりは今些し叭西に近き處なるべし蓋し是ばサマタワの訛にて一にサムダラともいひて叭西灣頭に近き邊なるべし地圖にはテロサマウエと記しありて西南恒信風の間可汗の使船を停泊せしめしには最も適當の海港なりと曰へり左もあるべきか

ペヂル

第十四章

第四ダラゴヤン國

ダラゴヤンは其國固有の君長ありて之を統轄す而して一種の國語あり(一)人民は未開にして偶像を崇拜し大可汗の威權を承認す居民若し一家の中に病に侵さるゝ者ある時は左の如き暴戾恐るべき事を行ふの風俗あり病人の親族急ぎ使を馳て術士を迎ふ術士來れば病の症狀を檢査して恢復するや否やを宣告せんとを請ふ是に於て術者は惡神の告ぐる所に據り全快するか又は否やを答ふ若し全快せずとの決答を與へらるゝ時は親族は別に一種專門の人を雇ひ來る其職は最も巧に患者の口を塞て之をして窒息せしむるに至るに在り斯くして後其體を寸々に切りて食料と爲す既に調理成る時は親戚悉く集り酒宴を開て之を食ひ盡し骨中の髓といへども殘すことなし若し體の一部にても已むを得ず餘す時は厭ふべき惡蟲を化生し來り惡蟲食を得ずして死する時は死者の靈魂に祟を爲すものと信ずればなり諸事畢て後骨を集め之を小き綺麗なる箱に收め獸類の來り侵さゞる山中の洞內に安置して歸るなり我が土地に屬せざる他處の人に出會ひ力能く幸に之を執へ來り其者にして贖身金を拂ひ得ざる時は之を殺して貪り食ふを常とす

(一)(案)ダラゴヤン一本にはダグロヤンとあり又デラゴラともあり獨逸の學者は蘇門答臘の東邊南方にアンダラギリと名くる河水あり卽ち其地なるべし著者が船隊の停泊せしよりは遠く南に在り五ケ月の滯留中には其地に觀光せしやも知るべからずと論じたれど著者が口述する所の國々の順次にあらざるに似たり今は何れの地なるや知り難しと雖ども ペヂルの近邊なるには相違なしユール氏は北實或はペヂルなるやも知るべからずといへり葡萄牙人東來の頃は此地蘇門答臘島中の最も繁榮の所なりしといふ

ラムブリ國

第十五章

第五ラムブリ國

ラムブリも亦自國の君長ありて一種の國語あり（一）人民は偶像を信奉し自ら可汗の臣屬なりと稱す國内蘇木を產すること殊に多く樟腦其他種々の藥劑の產出も少なからず土人は一種蘇木に類せし植物を蒔き發芽する時は其苗を拔取て他所に移植し三年の後根を併せて採集し以て染料とすマルコポロは此草の種子をヴェニスに持歸りて蒔きたれど風土溫熱充分ならず一草も發育せざりき此國には尾ある人あり其長さ一掌（パーム）にして狗尾の如く但毛なきのみ此形を爲せる者甚だ多數なれど山中に住して市内に居るものなし林中には犀ありて棲息し其外野獸山畜甚だ夥し

（一）（案）ラムブリ國の所在分明ならず亞剌比亞印度より東航する船客の先づ第一に見認むる蘇門答臘の西北端たることは古記に據て明かなり現も角も亞齊（アチン）岬の近傍にて本島の西岸北部に在る地なるべし

パロス

第十六章

第六ファンフル國、一種の樹より麪粉を製す

ファンフルも島中の一王國なり其君長ありて之を領有す（一）居民は偶像を信奉し大可汗に附屬の意を表す此國には一種世界に比類なき龍腦を產出す之をファンフル龍腦と名けて黃金と同量を以て販賣せらる國内小麥を產せず又他の雜穀をも生ぜず人民の食は專ら米と牛乳にて酒は前にサマラ國の條に記せし方法にて樹身より製するなり國内亦一種の樹木あり特別の奇法を以て之より穀粉を造る（二）其樹幹高く發えて太さ兩抱あり其外皮を剝ぎ取る時は厚太約三インチ程の木質の物あり其中心部に心體あり此物能く解實より製せしものゝ如き麵粉を生ず樹心を取て容器に入れ水を充たし棍棒にて攪拌し以て纖維質と他の不潔物をして水面に浮泳せしむる時は純粹の粉質分は器底に沈降すべし斯くして後水を漉ぎ去れば一切の外來物除き去て純淨の粉末器中に留り之を取て菓子麵包を製すべく種々なる饅頭類を造るべく食料として廣く用ひらる之を以て製せし麪包は外觀も味も殆ど大麥製の麪包に似たりマルコポロ屢之を食ひ且數箇をヴェニスに携へ歸れり上述せし如き此樹の木質部大約厚さ三インチ程の處は之を水に投ずる時は直に沈む此點に於ては殆ど鐵に比すべし之を裂けば一端より一端まで木理正しく裂けること殆ど竹と一般なり土人は之を以て短き槍を作る若し之をして長からしめば其量重きが爲に之を携へ之を用ふること能はず其一端を削て尖銳ならしめ火に當てゝ之を固むる時は如何なる鎧をも穿ち透すに足る總ての點より見る

も頗る鐵に勝るといふべし此國の事實は以上述ぶる所にて充分なり其餘の國々はマルコポロ自ら實踐せざりしを以て措て論せず之より進てノクーランといへる一小島の事を述ぶべし

(一)(案)マーステンはファンフルを以て蘇門答臘の東海岸とすれど誤なるべし著者が口述の順次今は北角を廻りて四邦に在り此地は昔より龍腦の本地にして第九世紀の頃阿剌比亞人之をファンスリと名けて世に有名となり次にカンスルと轉訛しカイスリとなり歐洲にて龍腦をカムフルといふも本は之より訛傳せし名なりファンフル又ファンスルといふ本來はパスリなりしを阿剌比亞人に由てファンスリと變じ又パルシと轉ぜりファンスルとパルスは同地同名の變音たるに過ぎず今蘇門答臘南面海岸の西部シンケルの南にパロスと稱する地あり或は是なるべし

(二)(案)沙穀米を謂ふなり

第十七章

ノクーラン島　ニコバル尼古把爾島

小爪哇を出てラムブリ國を去て航進すること大約百五十哩にして二島に着す一をノクーランと名け(一)一をアンガマンといふノクーランには王なく政府なし人民は獸類の狀態を去ること遠からず男女共裸體にして渾身一物を以て被ふ所なし象教を信奉す島內最貴最高價の樹木多く白檀紫檀の如き是なり又椰子樹丁香蘇木を產す其外各種の藥料に富む次に進てアンガマンを說くべし

(一)ノクーランは尼古把爾島を謂ふなり甚だ大ならずといへども良港ありて船の寄泊に便なるに名あり蘇門答臘の北端を距ること大約二度半にして海里百五十哩なり(案)四域記に僧伽羅國の南に海に浮ぶこと數千里にして那羅稽羅洲(椰子洲)に至るといふもの是なるべし

第十八章

アンガマン島　アンガマン諳駝曼島

アンガマンは甚だ大なる島なれども一君長なし(一)人民は象教徒なり最も兇惡野蠻を極むる種屬にして其頭其眼其齒牙共に犬屬のものに似たり其性猛惡にして凡そ其島民にあらざる者に逢へば必ず殺して之を食ふ島內各種の藥料を產すること多し居民は米と牛乳を食料とす種々の肉も亦之を食ふ椰子蔗實其他歐洲に見ざる所の種々の菓實を產すること多し

(一)(案)アンガマンは諳駝曼(アンガマン)の訛なり大小二島に分れ大なる者又南中北の三島に分る本は葡萄牙船に乘り居りし阿剌利加の黑奴等が無人の島內に遺留して繁殖せしものに似たり全身漆黑の如く身の丈概ね高からず容貌奇怪四肢格好惡く纖弱にして腹部凸出し頭髮捲毛にして唇厚く鼻平坦なり其醜怪の狀本文云ふ所の如く島內巨木多く其大なるは周五十四尺以上に及ぶといふ然れども其產する所は椰子檳榔子肉桂蔗沙宮拉斯の類に過ぎず本文に米と牛乳を食ふとあるは誤聞なり島內皆て此物あら予其食料は野生の果實のみ

第十九章

セイラン島

アンガマン島を去て航路を西に取り稍〻南に偏して進むと一千哩なればセイラン島の海中に屹立するを見る（一）其大さの割合には世界中の何れの島よりも有名なり周廻は二千四百哩なれど昔は更に大にして其周三千六百哩餘ありたりと往時の航海圖に見えたり然るに北風懼るべき暴力を以て吹き山岳を崩壞し次第に墜落して海に沈み斯くして島は原形を失ひ其廣袤を減ずるに至りしといふ王あり名をセンダルナズと曰ふ全島を統轄す（二）人民皆な偶像を崇拜す何れの國よりも羈絆を受くることなし男女共に殆ど赤裸の有樣にて僅に一布片を以て體の中部を繞ふに過ぎず島内米と胡麻の外の穀類を産せず胡麻は油を製するに用ふ其食料は牛乳と米と肉となり飲料の酒は木より製すること上文に既に述べし所の如し（三）此地に産する所の蘇木は最良にして他に比類なし島内紅寶玉（ルビー）を産す其美なる其貴きこと天下無双なり兼て青玉黄玉紫水晶柘榴石（サッファイト・パスティ・ストガーネット）其他種々無量の寶玉貴石を産出す（四）王の所有に屬する紅寶玉は世に珍き大なるものにして長さ一指尺廣さ大人の腕の太さありて光輝赫奕一點の疵なく灼々たる一團の烈火を見るが如く之を愛するに金銀を以て價

錫蘭島（シーロン）

を定むべからざる程の貴重の物なりといふ大可汗之を聞き使を遣はして此寶玉を讓らんことを言はしめたるに之れが爲には一都府の代價を受けざるべからずと答へたり蓋し其意は世界の金銀殘らずを以てするも賣るべからず如何の條件にて我所領より追出さるゝことあるも之を失ふべからず是れ我王位に登りし祖先より我に傳承せしものなればなりと云ふに在るなり是を以て可汗も遂に之を得ることを果さゞりき此島の民は全く尚武の氣象なく卑屈怯懦なるを以て軍兵を用ふべき事あるに過へば回々教國近傍の國々より之を雇ひ來るなり

其餘島中の事に就き述ぶべきなし次にマーバル國を說くべし

（一）（案）セイランは南印度の東南に在る海中の一大島錫蘭（シーロン）を謂ふなり佛書に僧伽剌物伽山（シンハラランカ）寶洛抔とある者是なり唐の玄奘三藏の記には周廻七千里とあり四洋里にすれば千四百哩なり然るに今の實際は七百哩以下なりと云ふ

（二）（案）ユール氏曰く當時の國王は名をパンヂタパラクラマバフ第三と稱して四曆一二六七年より一三〇一年迄可倫破（ロロムボ）の北東なるダムバデーア城に居て位に在りき此在位の間に來從したる敵の大將をチャンダラバタと曰へり著者の所謂センダルナズとは此名を誤聞して王の名とせしものに似たりと

（三）島民の食料は米を主要とす米は贅澤品として稀に用ふるのみ肉も亦同樣なり

（四）（案）瀛環志略にも山には寶石を出だし湖濱には明珠を出すとあり古來寶玉を出すに有名なり

マーバル國

第二十章

マーバル國

第一節　セイラン島(錫蘭)を去て西に航すること六十哩にして大國マーバルに達す(一)マーバルは島にあらず所謂大印度本陸の一部にして世界中第一等の富貴の國なり四王ありて之を領す其中の主たるをセンダルバンヂと稱す(二)其領内に眞珠の漁場ありセイラン島とマーバル國との間の海灣内に在り灣内の水深十尋乃至十二尋に過ぎず淺きは二尋に過ぎざる處もあり眞珠の漁業を爲すには左の方法の如くす若干多數の商賈數組となりて大小多數の船と小艇とを用意し丈夫なる綱具を具へ以て安全に碇を下し船を留むるに適せしむ次に水底に潛て眞珠を含み居る牡蠣を擄り採る術に巧みなる漁夫を雇ふ漁夫は網にて製したる囊を其身に結付け置き採るに隨て囊中に入れて船中に持ち來り幾回となく同樣の作業を反復す既に其呼吸を保つこと能はざるに至れば水面に浮び出て暫くして再び水底に入る斯くして終日此業を勤め其勞力作業に由り一季の間に於て諸國の需用に應ずるに足るべき充分なる數量の牡蠣を採集するなり此灣内に獲る所の眞珠は大半眞圓にして光澤美なり最も多く牡蠣を採集する處をベタラと稱す本土の海岸に在り眞珠の採集場は此處より南方六十哩の間に及ぶなり(三)

此灣内には一種の大魚(鮫)棲息して屢〻潛水業に大害を爲すを以て此の漁業を營む商賈は必ず先づ婆羅門の一派に屬する術師を伴ひ行くに注意せざるべからず術師は降魔の妙術に依り此大魚を制伏する禁呪の力を以て害を漁者に及ぼすことなからしむ漁業は晝間のみに行はるゝを以て夜間は此禁呪を解くなり若し不正の人ありて夜間水底に潛り牡蠣を盜さんとすることあるも禁呪を解かれたる大魚の害あるを知りて思ひ止まるなり此術師は獨り此大魚のみならず百獸百鳥を制壓する術に於ても能く熟錬せりと稱せらる眞珠漁は四月の月に始り五月の中旬に及て止む之に從事する特許は國王より與へらる而して之に酬るには僅に所獲高の十分一を以てす且術師には二十分一を以てするが故に商賈の得る所は其益頗る大なり右の時季過ぎて牡蠣已に盡る時は此海灣を去て三百哩以上も隔りたる處に船を移し九月の月より十月の中旬迄此漁業を行ふなり國王は所獲の十分一を定額として徵收する外に大にして形式の善なるものは總て之を選び取る之には寛大に其價を拂ひ渡さるゝを以て商賈は決して之を差出すを嫌はざるなり

(一)(案)ラムショ本にはマーバルをマラバルと記しあれど誤たること論なしマラバルは自ら馬拉巴爾(マラバル)にて後に馬拉巴爾(マラバル)の條に特に記載あり是はコロマンデル沿岸地の南部にして當時著者が錫蘭を去て初て其船隊を寄せし地たるに相違なし本來は阿

剌比亞人が此間を通行して命ぜし名にてマーバルは阿剌比亞語渡船場の義なりアブルフェダはコモリン海角を稱してマラバル地帶の終る所マーバル地帶の始まる所といへり即ち南印度の最南端コモリン海角より東南面一帶の海岸地にてオロールに至る迄の總稱なり

(二)(案)印度本土の歴史は暗冥粉亂殆と捕捉すべからず殊に南部印度に於て最も然りとす本書に王の名なセンダルバンザとするはスンダラバンザの訛なり他書にも王には三人の兄弟ありて各自に獨立して各地に王たりとあれば本書謂ふ所は其事實たること論なし其第一王の當時の都はピルゲュールにしてマゲュラ城は其一弟卽ち後のスンダラバンザ王の居處たりしに似たりピルゲュールは海より遠からずマゲュラを距る五六日程南阿留格(アルコト)の内に在てタンジョールの北五十哩なりといふ而してユール氏の說に據ればマルコポロの寄港せし處はカヴェリパッタナム港にてカヴェリ河口の一なる當時の一大港なり一三〇〇年の大洪水の爲に破壞せられたりといふ又卑にパッタナムとも稱したり

(三)(案)ペタラと名くる處他本にはペッテラルとありユール氏は之を錫蘭海岸のパッラムと爲す本書の本地の海岸とあるに當らず如何にやマースデンはマナール灣内のツタコリン浦に在るウエダルなるべしといへり

第二節　此地方の土人は常に裸體にて僅に布片一條を以て禮節の命ずる所の體の部位を被ふのみ國王といへども唯其布帛の高價なるのみにて別に多くを纏ふことなし然れども種々の裝飾假令ば寶玉青玉綠柱玉紅寶玉其他高價の物を飾れる衿襟等を以て尊貴を表するとは之あり兼て又一百四箇の大にして美麗なる眞珠と紅寶玉を綺麗なる絹紐に貫きし者を頸より懸て胸に達せしむ一百四箇の數を擇びし所以は宗教の規則として佛神に對し日々其數に當るだけ反覆祈念を諷誦せんが爲なり是は王の祖宗より世々怠らず勤め來りし所なり日々の諷誦バカウタ、バカウタ、バカウタの語より成る一百四回之を反覆するなり(一)其兩腕には三箇宛の金の腕環を佩び飾るに眞珠と寶石とを以てす脚にも三箇所宛同じ飾ある金環を嵌め足の大趾手の指にも無價の金環を嵌む斯くも王をして華麗無比の貴品を身に著くるを得せしむる所以のものは寶玉眞珠皆な其所領中の產出に係ればなり王には少なくも一千人の妃嬪あり彼若し一婦人にても其美色を見て其意に適ふ者ある時は何人を論せず直に取て貴嬪の列に加ふ此例を以て其弟の妃を取らんとせしが弟は聰慧銳敏の人なりければ幾回となく之を兵力に訴へんとしたれど之が爲に爭亂の端を開かざるやう人々の爲に勸告せられたり是に於て王母は王兄弟を誡て曰く我子等よ汝等墻に鬩きて相爭ひ以て各自の體面を汚さば予は直に汝等が曾て此に養を受けし此胸を取て吾體より割き去らんとすと兄弟之を聞きて互に其怒を鎭め和すること初の如きに至れりといふ

王には多く隨身の武士あり現世未來陛下腹心の臣といへる意義の名稱を附て常人より常に之を區別せり王宮に在れば之に隨身し外に出づれば之に扈從す如何なる時といへども常に之に伴はざることなし國内到る處此輩實に非常の權を有す王死して其死體を火葬する時は此等隨身の臣は皆悉く身を同じ火中に投じて殉死し王の死體と共に燒死し了る斯くすれば他生も亦相隨ふことを得べ

サッギは目方の名にして一ポンスの六十分の一なる

しと信ずるに由る更に又左の如き風習あり王若し死する時は其後を繼ぐ王子は前王の蓄積せし財寶には一切手を觸るゝことを爲さず是れ蓋し其國全體を擧て其所領所轄として讓與せられたるにも拘はらず彼若し先代の如く自ら財寶を增殖して自ら富むこと能はざれば國を治むる能力なきものと見做されんことを恐るればなり歷世の諸王が代々巨萬の富を貯積するは畢竟此曲解迷心あるに因るなり

(一)(案)パカヴクは婆伽婆(バガヴ)なるべし醜譯名義集に衆德を總て至て尙き名なりとあり又(案)百四箇は百八の誤なり

(二)(案)著者が本文に云ふ所の王は眞珠漁業のある海岸にのみ局限せし一小地の王を指すにあらず金剛石其他の寶石を產する內地の國土をも領有する殷然たる一國王を謂ふなり是れ蓋しナルシンガ王を指すなり其都府は代々ビジャナガルに在り一にゴルコンダとも名く當時テリンガ地方及びカルナタ國を領せしのみならずコロマンデル沿岸地全帶南方コマリ岬即ちコモリン海角に至る迄をも管治せり

此國には馬を產せず是を以て王と三人の王兄弟は年々巨額の金を出してオルムス、デウファル、ペチェル、アデム地方(二)の商人より之を購入す此等諸商人は販賣の爲に各自に數頭の馬を輸入し此貿易に由て利を得ること實に莫大なり蓋し彼等は各々五千頭を輸入し來て一頭每に銀貨百マークに賣り各自利得する所の全額は黃金五百サッギとなる然れども每年の末に至れば此多數を管觀するに相當の人なく病馬に必要なる藥劑を司どる者もなければ其中に能く生存する頭數は恐くは三百に足らざるべし是を以て年々新たに購入して其缺を補はざるべからざることゝなるなり然れども余が想ふ所にては第一に土地の氣候が馬種に適せざる所ありて之を飼ひ之を養ふに困難を生ずるなるべし殊に奇なるは其馬を飼ふに米と調理せし肉又は他の貯藏肉を以てする事なり蓋し此國には米の外は穀類を產出せざるなり如何なる大なる牝馬を用ひ之に美なる牡馬をして孳尾せしむるも僅に不格好の小駒を生じ四足歪(ユガ)みて乘用に馴らすに堪へず

(二)羅甸語本にはクルモス、キシ、ヅルファル、セル、エデンの諸港を數へ擧げたりクルモスの濕末嶼(オルムス)たりアデム又はエデンの亞丁(アデン)たりキシの波斯灣內の怯失(キス)島たるは論なしデウファル、ペチェルは巴悉(バスル)本にもヅルファルとありセルとあり本篇の第四十一章及び四十二章のエシールとヅルファルとを謂ふなるべしされば亞丁の東方阿剌比亞海岸のソハル市とダファル市とを指すものとすべし

此地又左の如き異常の奇俗あり人あり罪を犯して審問を受け死刑に處せらるべく宣告せらるゝ時は執行の地に引かる是時に當り罪人其歸依佛に其身を捧げんことを願ふことあらば親族朋友直に之を一種の輿に載せ之に與ふるに銳利の刀十二本を以てし市中一帶に擔き廻りて此勇士佛を信奉するの熱情に因り自ら身を殺さんとすと高聲に呼喚し國法執行の地に達するに及で二刀を拔き持ち今予將に某佛の爲に身を捧て自ら殺さんとすと大呼して急に一刀を以て兩腿を擊ち次に一刀を以て兩腕を擊ち二刀を執て腹を屠り二刀を執て胸を切る斯くして其刀は皆之を投げ捨て而して體

の處々に一刀宛を加へ一創毎に右の語を反覆して終に最後の一刀を以て心臟を突きて直に絶命す自殺の慘劇演じ了るや否親族は大聲凱歌を奏し歎聲を發し而して其體を燒くなり凡そ夫死すれば其妻は夫に對し貞烈を守るが爲に自ら跳て火に入り夫と共に火化す此一大決斷を實行する婦人は社會一統より嘖々稱羨せられ之を畏避する者は賤しめ罵しちる

第三節　此國の象教宗徒は殊に多く牡牛を尊崇す如何の事あるも牡牛の肉を食ふことを避く其中に一類の賤民あり之をゴーヴィと稱す（一）此者は肉を食ふも動物を殺すことを敢てせず然れども獸類の死體を見る時は其死が自然に出ると然らざるとを問はず取て之を食ふ國内の人民は上下貴賤を論ぜず居る所の家屋皆な牛糞を以て之を塗る而して地上に蓆を敷て其上に坐す何故に斯くして坐するやと問へば答て曰ふ地上の座は無上尊重すべき處なり猥に地上より飛躍せよ直に再び地上に返るにあらずや誰か之を尊崇せざるを得んや誰か能く之を輕視し得る者あるかと此等のゴーヴィ及び其一類の者は使徒聖トーマスを殺せし者の子孫なり是を以て今に此等一類の者は神聖なる使徒の死體を安置せし處には決して足を入るゝことを得ず假令十人の力を以て此輩の手を執り强て之をして基督の使徒の死體を葬りし場所に留まらしめんとせしも爲し得ざりしといふ是れ聖軀の神變不可思議の力之を拒みたるに由るより

此國には米と胡麻の外は他の穀物を產することなし人民の戰に臨むや僅に槍と楯とを用ゆるのみ而して身には一物をも纏ふことなし要するに賤劣にして戰に適せざる弱卒たるのみ國民は食用の家畜を屠らず又如何なる動物をも殺すことなしされど羊其他諸獸諸鳥の肉を食はんと欲する時は回々教人より買求むるなり蓋し回々教人は自ら法令習俗を殊にするなり國人は男女共に日に朝夕二回宛は水中に全身を洗ふ此洗身の儀終らざる間は何人といへども飲食することなし若し之を怠る者あれば之を認て異教徒と爲す殊に讀者に告ぐべきは彼等が食事を爲すに當ては必ず右の手のみを用ひて左の手を以ては一切食物に觸るゝことなし凡そ清潔細緻を要する仕事には必ず右の手を用ふるなり左の手は留めて身の排泄物の掃除陰部の拂拭等に要する不淨不潔の事に使ふなり飲物には一種の飲器を用ひ各人毎に自己の器を用ひて決して他人の物を用ふる事なし而して其飲料を飲むに當ては器を口に接する事なく高く之を頭上に擧げ持て仰で飲料を口中に注ぎ入れ決して器物をして唇に觸れしむることなし來客に飲料を與ふるにも我が所有の器物を客に貸すことなく客若し自己の飲器を所持せざれば酒にても他の飲料にても之を其手掌に注ぎ入れ客は盃よりするが如く己が手掌より之を飲むなり

（一）ゴヴィとは最下級の賤民にて穢多非人の類なり土地に由て其名稱を殊にす今はパライヤルと云ふ聖トーマスを葬りし小

山の近傍には此一種の蛾兵居住し其一脚麓大して象の脚の如く大なり一見直に聖トーマス殺害者の後裔たるを示す葡萄牙人は之を聖トメ病と名くと云ふ

(二)(案)使徒トーマスとは耶蘇の十二徒弟の一人なり

此邦にては罪過を罰するに殊に嚴正規律ある公義公道を以てす負債者に對しては左の如き常習あり て行はる債權者より屢〻支拂の催促を受けながら其度毎に虛僞の約束を爲して債權者を瞞着する時は債權者は杖を以て負債者の周圍に圈を畫きて之を拘束す負債者が債權者に滿足を與ふるか又は相當の抵當を出すまでは一足も圈の外に出づることを得ず若し强て之を逃れんと企つること もあらば公道の規律を破る者として死刑を免かるゝこと能はずマルコポロ歸鄉の途次曾て此國に在りし時現に此の如き事の明かに實行せられしを目擊したり即ち其國王が或る外國の商人に若干金の負債ありて屢〻返濟の催促ありしに拘はらず虛僞なる證言のみにて久く其人を惑弄したりければ或日國王が騎馬にて外出せしを窺ひ知りて其人直に之を機會とし王と馬との周圍に一圈を畫けり王は斯くせられたるを見るや直に其進行を止めしのみならず商人の充分に滿足を表せし迄其地より一寸も動かざりき此時現に傍觀せし者は皆な喫驚して如何に成り行くものにやと注視り居けるに王は至公至正の名を失はざらんが爲めに自ら公義正道の法規に從ひたり國人は葡萄より製したる酒を飲むことを禁ず若し此禁を犯せしを見付らるゝ時は其人は最早法廷に立て證人たることを得ざる者と見做され不名譽の人となり了るなり (三)更に奇妙なる偏見ありて民間に行はる航海を業と爲す者は自暴自棄運命の危險極まる人物に過ぎずと見做され其人の證言は一切採用せられざるなり然るに淫蕩好色は却て罪過とは見做さゞるなり土地炎熱劇きが故に土人は皆な裸體の儘往來す六七八の三月を除くの外は一滴の雨もなし幸に此三月の間の雨あるが爲に空氣初て清涼となる若し之なければ到底生命をも支ゆること能はざるなり

(三)(案)本文殊更に葡萄より製したる酒とあるは後人の插入なるべし著者は酒類一切をいひしものならん

此國には人相學と稱する術に熟練せし者許多あり人々の性質善惡邪正を知り又其未來の吉凶を判斷することを能くす蓋し人間の善惡は男女を論ぜず直に外貌に露れ來るものとす或る一定の鳥獸に出逢へば必ず凶事の前兆を示すと稱す國民一體に烏の飛ぶを見ては之に注意すること他の國民より一層甚しく之に由て常に運命の吉凶を豫言す毎週毎日認て惡時とする時刻あり之をチョイヤクと名く假令へば月曜日にはミチールスの時火曜日にはチールスの時水曜日にはノンの時といふの類なり (四)而して此等の時に於ては買物せず如何なる商業をも爲さず若し强て之を爲さば好結果を得ること能はずと爲すなり又之と同じ方法にて一年中の日々の吉凶を定め之を帳簿に記錄し

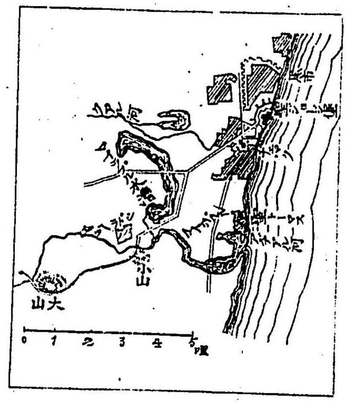
置く彼等は又日中に直立する人影の長短に由て其日の時刻を判別す小兒生るゝ時は男子と女兒とを問はず父母先づ其生れし時の年月日時を書面に記し置く是れ其兒が一生の間一切の行動に就き必ず先づ占星家に頼て其良否を決斷せしめんが爲なり男兒十三歳に至る時は獨立自主の身となり最早父の家累たるべからず父よりは大約二十グロート乃至二十四グロートを以て之に授く是程の貨幣あれば何にても商業を營み其利得を以て生活を過ごすに充分なりと見做すに由る因て此等の童子は終日瞬間も休むことなく諸方を駈廻りて甲地にて品物を買ひ乙地に持行て賣り捌く眞珠漁業の始まる季節となれば此者等は海岸に赴き漁師等より各其資力に應じて五六箇若くは其以上の小眞珠を買取り之を商人の方に持往きて買取らんことを請ふ蓋し日熱酷烈なるが爲に商人は屋内に在て外に出でざればなり之に向て請て曰ふ此眞珠は予今之を某價にて買ひ來れり其上に貴客の相當と考へらるゝ丈の利益を加へて買取り給はれと是に於て商人は之を買取り彼等が買來りし原價の外に幾分を增し與ふるを常とす其他許多の物品を賣捌くも皆な此調子にて彼輩は最も鋭敏活潑なる一箇の實業商人たり其一日の業務を終れば其夜食に必要なる食料を携へ歸り母親に致して調理を託し以て之を食ふ必ず一物も父の費用を仰で食することを爲さゝるなり

(四)宗法上其日の時を區分してチールスと稱するものは午前九時に始り十二時に終るノンといふは午後三時に始まるミチールスは規定には一定しあらざれどチールス即ち午前九時とセキスト即ち十二時との中間に在るべし(案)ユール氏の註にカルドヲエルの說を載す其說に據ればチョイヤクはチヤクの轉訛なるべし印度古星家の說に陰曆の一个月の内に月のシヤクラ即ち月の宿次毎に其月の宿り居る間には日々不吉の時刻あり此時をチヤウジヤと名く除け時の義なり其の長さ平均一時三十六分に中る其時の始は月宿毎に同じからず即ち陰曆月の日毎に殊なり晝間に始まることもあり夜間なることもあるなり南印度の發音にて之をチヤカムといふ其尾音を除けば即ちチヤクとなる本書のチョイヤクの語の因て生ずる所といふも妨なし(又案)チールスとは第三の義なり午前九時に中るノンは第九の義なり午後三時に中るノン又ノナとも云ふミチールスはメッサテルサともいふ半チールスの義なり又晩をプリムといふ第一の義なり正午をセスタといふは第六の義なり

第四節　此地方のみならず印度全國に通じて之を見るに一切の鳥獸皆な我本國の者とは全く同じからず只鶉のみは全く同一類なれど其他は總て殊なりとす蝙蝠あり大さ兀鷹に似たり而して兀鷹は黑きこと鴉の如く歐羅巴の者に比すれば甚だ大なり其飛翔殊に迅速にして如何なる鳥に逢ふも捕へ得ざることなし

寺院内には無數の佛像あり男子の形せるあり女子の容貌なるもあり父母は己が女兒を以て此等の佛像に供獻するなり既に供獻せられし女兒は寺院の僧侶の要求ある時は何時にても佛心を滿悅せしむる爲に往て佛像に奉仕せざるべからず斯る時は其所に赴て歌舞奏樂祝祭を勤むるなり此の如き少女の無數なる實に數箇の大樂部隊を爲す毎週數回其奉仕する佛像に食物を捧げ供ふ而して自

ら謂ふ佛神必ず之を受納し給ふと之が爲に常に佛前に卓を置き卓上に食物を供へて數時間其傍にあらしめ其間少女は歌舞奏樂已むことなく放縱淫蕩の態度を現し來る施主檀越が都合好く食事を畢る迄は連綿として此喧鬧を繼續するなり而して後曰ふ佛像の神靈已に既に供物を受納せりと乃ち佛像の周圍に並び立て一統供物を取て之を食ふ事終て各其家に歸る少婦を集て右の如き儀式を爲す所以を問へば僧侶之に答て曰ふ男佛の靈女佛と氣色善からず之に對し憤怒の狀ありて相交り相話することを嫌ひ給ふに似たり若し双方の親睦元に復し和平を調訂するの方法を講せざるに於ては寺院の事務一切佛神の擁護を失ひ遂に破壞し去るべし我輩が信者に請て僅に一布を以て腰部に纏ふの外全身赤裸々の儘男女の佛神に對し聖歌を諷誦せしむるは畢竟是が爲めなりと蓋し此輩土人は男佛時々女佛と相馴れ相樂むものと爲すなり



土人は竹製の輕き一種の寢臺を用ふ其構造甚だ巧にして其上に臥して將に眠に就かんとするに當りては之に具へある紐を引けば帳帷直に閉鎖して其周圍を覆ふ是れ毒蜘蛛を防て咬傷の苦難を避け兼て蠅其他小蟲の煩を防がんが爲なり之と同時に酷熱を輕減緩和するに必要なる空氣の流通は毫も妨げざるの妙あり但此類の贅澤は只僅に高貴富豪の徒のみ受用し得るなり其他下級の輩は屋外街路の中に居る

此マーバル州には(一)名聲赫々たる殉教者使徒聖トーマスの遺骸あり聖人は蓋し此地にて宗教の爲めに一身を殺して仁を爲せしなり遺骸は一小市に在り諸商賈の輩には往て訪ふ者多からず商業には適せざる土地なればなり(二)然れども信心熱誠の意思より其基督教徒たり回々教徒たるを問はず此地を訪ふ者殊に少なからずといふ但回々教徒は之を其自己の宗教に屬する大豫言者として尊崇し之を名けてアナニアスと曰ふ神聖なる人物の義なり(三)基督教徒は巡拜の爲に來り使徒の害せられし地の赤色の土を採り謹て持ち歸りて之を以て屢〻奇事を示すに用ふ又水を加て之を稀くし病人に與へて病苦を救ひしことも多しといふ耶蘇降生一二八八年當國に有力なる一國王ありけり(四)或年の秋穫期に當り米穀の量巨萬を得たり悉く之を蓄積するに足るべき程の大なる穀倉あらざりければ聖トーマスの寺院に屬する教務上の家屋を以て之に充るも固より逆支なしと自ら斷定して之を實行せり然るに此事大に寺院の監守者等の意思に反せり此輩連署して此光榮ある聖

人の遺體を拜せんとて諸方より集り來る巡拜者甚だ少しとせず專ら其使用の爲に設けし屋宇を以て此の如き雜用に供せらるゝは困却の至りなり願くば思ひ止り給ふべしと切願したれど彼頑然固執して聽許せざりき其翌夜神聖なる使徒手に短き槍を持て彼が夢に現れ來り槍を以て彼の喉に差向けて告て曰く爾速かに爾が穀物を積みし我屋宇を明け渡すべし然らざれば我將に爾をして慘死せしむべしと彼夢覺て劇しく恐怖し直に令を下して眼のあたり使徒を見し由を公表し使徒の告げられし如く其屋宇を明け渡せり唯之のみならず當時は日々使徒に由て種々の奇蹟現れ來れりといふ此寺院を管理する基督教徒は椰子樹の林を所有し一樹に就き毎月一グロート宛の稅を王弟の一人に納め而して其食料を此林に仰げり（五）此至聖なる使徒は左の如き次第にて死去せられたりと云ひ傳ふ一日祈禱の事果てゝ小港に退かんとする時此國に無數に棲息する孔雀の一羣の爲に圍繞（とりまき）れ居たり其時前述せしゴヴィ族の一人が恰も其道を通り過ぎ聖人の居るとは知らず一箭を放て孔雀を射けるに其箭は傍に在りし聖人に中りたり聖人は自ら傷けられしを知りて上帝に向ひ其仁慈愛憐を謝し其言未だ終らざるに早く既に靈魂を上帝の手に歸せり（五）

（一）著者はマーバル國を以て半島の南端より起りコロマンデル海岸一帶に沿ひ北は南印度語の通用する限りの土地迄即ち麻打拉薩（マドラス）の稍〻北に至る迄を包含する者と爲すに似たり即ち印度地理學者の所謂ドラヴィダデサ地方一帶のことなるが如し

（二）愛に一小市とあるはサントメ（聖トーマス）市を謂ふなり麻打拉薩（マドラス）の郊外にて聖ジョージ砦の南方大約三哩半に在り今猶ほ存せり寺院は一小山の上に立てり此市土人はマイラプルと名く孔雀市の義なりと云ふ同地サントメ山と稱するもの大小の二山あり大なる方の上に在る寺院は蒲萄牙人の建る所なり昔の寺院は必ず小き方に在りしなるべし

（三）アナニアスは巴悉敦（パスル）兒の羅甸語本にはアゾリジャムとあり亞剌比亞（アラビア）語ハロリイの轉訛にして耶蘇基督の使徒の義なり著者之を解して神聖なる人物と爲すは誤れりと說く人もあり

（四）普通の解說に據れば當時半島の東邊を統治せしはナルシンガが王にして其都はヴィジャナガラ俗に所謂ビジャナガルなれど此有名なる都府は一三三五年迄は未だ建設せられず且コロマンデル海岸の南部即ち印度地理學家の所謂ドラヴィダ地方はテリンガナ國一名アンドレー國の首府ウォラングラに在位の王の統治する所なりき此王は一二六八年より一三二二年迄在位なれば本文記載の一二八八年は無論其在位中なり王の名をプラタパルドラと稱す一三〇九年即ち著者マルコポロが此方面に到りし時よりは大約十六年の後此テリンガナ國は北印度叢離（デリ）の回々王マラエッヂンの爲めに襲擊せられウォラングラ王は終に其附庸となれり本文愛に謂ふ所は一大王の下に在て一地方を領する一小王たるに過ぎざるなり

（五）愛に所謂グロートは恐くは此地方の通貨たるファナムを謂ふならんファナムは大約二ペンス半の價格なり（茶）一年の納稅金十一圓程となる毎月とあるは恐くは毎年の誤ならん然れば一樹の稅一年金一圓以下となるなり查し蘇門答臘（スマタラ）にて椰子樹一本の產額は普通金二十四五圓程なりといふ

此邦の土人は黑きが上にも黑きを好む生れ得て色既に黑きも尙ほ之を淡しとし人工を加へて更に之を黑くし以て全美を盡せりとす之が爲めに毎日三回宛は胡麻の油を以て其兒の全身を摩するなり彼等が虔敬する所の神佛の像は皆な其色を黑くし而して惡魔は皆な之を白色に彩す是れ彼等は

諸惡鬼を認て悉く白色の者と爲すに由るなり彼等の中に牡牛を崇拜するものあり凡そ戰に臨む時は野牛の毛を携へ之を以て馬の鬣に結び付く之を携ふる者は其効德に由て一切の危難を免るべしと信ずるに由る故に野牛の毛は此國にては甚だ高價を以て賣買せらるゝなり

第二十一章

ムルフィリ國一名モンスル國

マーバル國を去り北に進むこと五百哩初めてムルフィリ國に入る(一)居民皆な偶像を崇拜す獨立國にして他國より羈絆を受けず米穀肉類魚肉果物を以て食料とす國內山中金剛石を產す (二)雨期に至れば山中の水激流となりて巖隙洞間を突過し降る其退くを待ち居民爭て河底を探り數顆の金剛石を得て歸る予が聞く所に據れば夏日熱劇く雨なき時は非常の疲勞を耐へ忍び無數の毒蛇に惱まさるゝ大危難を侵して山に登り頂上に近き處に至れば處々に深き谷あり無數の巖洞ありて之を繞り懸崖絕壁ありて其四方を圍む中に金剛石ありて散在す爰に無數の鷲と白鶴とあり蛇を食はんが爲に集り來り常に止て其巢を作る金剛石採集の者は巖洞の口に近きて立ち其處より數片の肉を投下す鷲鶴之を逐て谷に進み肉片を啄み去て巖上に到る是に於て寶石採集者は直に巖上に登て鳥を逐ひ行り肉片を取て檢すれば金剛石屢〻之に附着しあるを見る若し鷲を逐ひ行る迄に時刻移て彼其肉を食ひ盡す時は其夜間棲止する處を見定め置き翌朝鳥の排泄せし糞と汚物とを取て檢し之より金剛石を得ることあるなり (三)金剛石の採集此の如く多し其良好の者必ず基督教國にも來らんと思ふは誤なり彼等は之を大可汗に奉り其自國の諸王首領に送り致すのみ此國又木綿の製あり印度國中の何れのものよりも良好なり (四)國內又家畜に富む羊に至ては其大さ世界無比なり而して諸種の食料品實に無盡藏なり

(一)ムルフィリの名諸本各異なりムツフィリ、モルフリ、モルスリ抔とあり麻打拉薩省內ガンツル郡の海港ミツパレ市の訛誤なりムクリパタンともいふキスツナ河口に近き貿易港なり聖ジョージ砦の北大約百七十哩に在り抑も著名なる市府の名を以て國名と爲すの誤は古來より人の屢〻陷す所にしてマルコポロも亦此誤謬に陷るを免れず港名を以て國名と爲せしに過ぎず其實はテリンガナ國即ち今のゴルコンダを謂ふなり當時海德拉巴の北東なる威闌合府に在位せしカカテヤ王一名ガナパチ王の領せし所なりミツパレ市は其一海港にして北四緯加耳の南界に近し小舟を以てすれば河水に依り內地に迄航逆すべき著明の貿易港なりカカテヤ王は其名をプラタパ、ガナパチ、ルドラ、デヴと稱す當時廣く海岸の地を征略しネロールより北は絮裂薩の境に至れり子なくして王后ルドラマ、デヴイ位を繼ぎ二十八年を經て其女の子に傳へたり之をプラタパ、ヴイラ、ルドラデヴと稱す一二九二年の事とす此國最後の王にして一三二二年の頃義離軍の掠虐となりて國亡びたり著者の此國に入りしは蓋し女后ルドラマ、デヴイ在位の時なり

(二)ゴルコンダは金剛石の一坑として有名なりキスツナ河の沖積層にして三角洲を距ること遠からずカヂパとカルヂルの近

後にも金剛石の坑所ありといふ

(三)不測の谷底より寶石を採集する奇談は小亞剌比亞(アラビア)夜話中の船夫シンバッドの一節と殆ど相似たり然れども印度其他東洋にては古來より口碑に存するものと見え諸書に之を記載するを見る

(四)コロマンデル海岸の地は古今通じて精良細緻の綿布を産するに名あり歐洲人は之をカリコと名くモッパレ市は殊に更紗木綿に有名なり

第二十二章

寶石國(マイソール)

ラル洲

名聲赫々たる使徒聖トーマスの遺體を葬りし地を距り西に向て進めばラル州に入る(一)婆羅門(バラモン)の宗徒此を原地とし出でゝ印度全國到らざる處なし此徒は世にも稀なる善良正直の商賈なり(二)如何なる事を以て之を誘惑するも假令其生命を危くすることあるも此輩をして一言の詐僞を云はしむるを得ず彼亦盜奪に類する所業他人の物品を竊取する行を憎惡すること殊に甚しく克己節慾の德を守り一妻を以て自ら滿足する等最も貴ぶべし若し外國の商賈にして此國の習俗を知らず自ら來て此徒の一人に就き其商事を以て之に委ぬる時は彼能く之を整理し成るべく細心に注意して旅商の利益となるやう其商品を取捌き賣揚勘定等精細にして信用すべし假令商品主が無作法にも彼に任意の謝儀を怠ることあるも其煩勞を名として一も報酬を望むことなし彼等肉を食ひ自國製の酒を飲む然れども自ら如何の獸類をも屠ることを爲さず都て屠殺は回々教徒の爲す所に屬す婆羅門(バラモン)宗徒は一定の徽章ありて之を區別す徽章は太き綿絲より成る其絲をして胸前と背後とに能く見えしむるやう肩より斜に懸て腕の下にて結び留む國王は非常に富有にして有力なり殊に眞殊寶石を所有することを愛すマーバルより來る商賈にして優(すぐ)れて美麗なる者を國王の覽に供ふることあり玉を呈出し來る者殊に多し(三)土人は一般に野卑なる偶像教徒にして迷信甚しく最も魔術卜筮等に心醉す一物を買はんとする時は先づ日光の中に立ち地上に移りし自己の影を見て之を占ひ其影が爾(しか)あるべき筈の大さなる時は之を買ひ若し其あるべき筈よりは長短ある時は其日は買入を中止す若し又買物せんとて賣店に在るに當り此國に多き毒蜘蛛を見付くる時は先づ其蜘蛛が前後左右の何方より來るやを見定め之に由て買ふべきか買ふべからざるかを決す人若し家より出で行かんとするに當り噴嚏(くさめ)する者あるを聞く時は家に歸り入て外出を止めるなり此國の人民は飲食の度を嚴にし之を節すること最も甚だしく而して何れも長命を保つなり平生慣て某植物を咀嚼し以て其齒牙を健全に保護することを努む隨て之に由て其消化を善くし通じて身體をして健康ならしむる

なり（四）

（一）ラルデサとはラル國の義にて今の古賽拉德州北緯廿地方及びサイムル（今のコール）タナ、パロクを包含せる土地全帶の古名にして北岸の西にある海を昔の回々時代にはラールの海と稱し其沿岸地方に通用する土語をラーリと喚做せり現にブルフェダの書にはラルと古賽拉德を以て同地異名と爲せり然れば其位置は印度の四北部にて孟買よりは北に在り決して麻打拉薩の西とはいふべからず著者が云ふ所の方角に據て之を索むれば當時ドワラサムダラのレラル王の所領地今の賽索爾地方を指して謂ふに似たり

（二）（案）婆羅門は印度四姓中の一にて最も勝れたるものと爲す世々道學を以て業と爲す所謂士分なり四城記に云く印度の種姓族類四分せり而して婆羅門特に尚貴たり道を守り貞に居て其操を潔白にす二を刹帝利と曰ふ王種なり奕世君臨す三を吠奢と曰ふ商賈なり有無を貿遷し利を遠近に逐ふ四を戍陀羅と曰ふ農夫なり身を稼穡に勤むゝ木芬婆羅門を以て尊ら商賈と爲すは誤なり婆羅門の種族にして商業を營むゝの必ずしもなきにはあらざるべけれど其尊らとする所は僧侶なれば吠奢と婆羅門とを錯綜混合せしものなるべし

（三）是れ亦一部の王にして前述せしテリンガナ王の下に隸屬し居りしものなるべし其の領地は何れも蘆離のパタン帝の爲に滅亡せし後は印度王ナルシンガの領地中に入りしものと見ゆナルシンガ王の都府はヴィジャナガルなりヴィジャナガラといふを正音とす

（四）是は檳榔膏と名くる合劑なるべし婆羅門には檳榔樹の葉檳榔樹子及び貝殼の燒灰を和合するなり

此地方の土民中に一種の異類あり專ら一身を宗教に委ぬと稱す之をチングイと名く其佛神の爲に非常なる難行苦行を修むるものなり（五）此輩は身體何れの部も掩ふことなく全くの赤裸にて往來す且つ曰く我等が世に生るゝや實に赤裸の儘ならずや其自然儘の赤裸にて歩行するも何の恥づべき事かあると陰部と名くる所に關してさへ彼尚ほ論じて曰く我輩敢て罪惡の器具を佩ぶるにあらず之を露出するも毫も恥づべき道理なしと此輩牡牛を崇敬し常に鍍金の黃銅又は他の金屬にて製せし小形の牡牛の像を携へ之を前額に懸く此輩又牛骨を燒き粉末として煉膏を製し之を用て身體の各部に記標を印し以て崇敬の禮表とす途上若し懇意の人に出逗ふ時は此調製せし灰を以て其額の中央を塗抹す彼等は蠅蚤虱の微と雖ども靈魂ありて活動するものと爲して一切諸物の生を奪ふことなく野菜の葉根といへども枯れざる間は戒て之を食はず此等も亦生々の中は靈魂ありとの說を持するなり彼等は食ふに匙を用ひず皿を用ひず一切の食物は芭蕉の葉の上に載せ食ふなり彼等便通を催す時は海岸に走せ行き砂の中に排泄して直に之を諸方に散布す是れ其中に穢蟲の發生するを妨ぐ爲なりといふ若し其結果として穢蟲飢て死する時は其道心に於て悲むべき罪を負はんことを恐るればなり彼等は常に直に地上に寢臥するも身體健全勢力旺盛にして大概長命なり時には百五十歲に至る者もあり是れ畢竟其節慾と心神の寬大なるとに歸するなり此輩死する時は其體を火化す是れ亦穢蟲を生せしめざるの理に由るなり

（五）チングイ一本にはクギとありジョギの訛なり又ヨギともいふ印度の一種の世棄人なりサンニヤシと稱するもあり又其一

種類なり其裸體の儘歩行するは古に所謂赤脚仙の類なり

セイロン錫蘭島
ラニカ枳迦山

第二十三章

セイラン島

前にセイラン島(錫蘭)に就て述べし時說き落せし事あり予曾て歸國の途次此國に遊びて親く聞きし所なり空く看過するを許さず此島内に頗る高き山あり巖石峨々懸崖絶壁頗る險峻を極む鐵鎖の扶を借るにあらざれば山巔に攀ぢ登ること難しと云ふ此鐵鎖に依て山の頂上に登れば上に我等の首祖たる亞當(アダム)の墳墓ありと云ひ傳ふ此は是れ回々(フイ〳〵)教徒の傳ふる所なり象教徒は其宗教の教祖たるソゴモンバルカンの遺骸を葬りし處なりといひ神聖無上の人として之を尊崇するなり此島の國王の子なり自ら國土を棄て王位を棄て人世の一切萬事を謝絶し塵俗を脱離して身を虚無の生活に委せんと決せり父王之を憂て美婦を勸て之を誘惑し心を盡して種々の歡樂を授け以て其決心を飜さしめんと努めたれど其盡力盡く効なく王子は私かに身を脱し逃れて此高山に登り獨身を守り禁戒を嚴にし終に其難業を成就せり(一)象宗徒は總て之を神聖として崇敬措かざる所なり父王は悲嘆に堪へず黄金寶石を以て其容貌を摸(もう)せる像を作らしめ島内の人民に命じて貴賤老少の別なく之を神として虔敬尊信せしめたり是れ此國に於て偶像を崇拜するに至りし嚆矢なり而して今に至て猶ほソゴモンバルカンを尊信して天地間之に過ぐる者あらずとして敬重する所なり此信心よりして遠方の各地より年々歳々其勞を厭はず集り來て之を埋葬せし此山上に巡拜瞻禮して已まず佛髮佛牙及び其使用せし盂鉢も今猶ほ保存せられ壯嚴の式禮を以て人に示さる然るに回々(フイ〳〵)教人は此說を非とし之を以て一切其首祖亞當(アダム)に屬する物とし信仰敬虔の意を以て同く山上に來て禮拜して已まず(二)

一二八一年大可汗曾て此山上に到りし回々教徒より我輩人類の首祖に屬せし遺物の評說を聞て好奇の念勃然として起り熱心に之を得んと思ひ立ち其讓與を請はしめん爲め使をゼイラン王に遣はし玉ふ遥遥(はるゝ)の旅行の後漸くにして目的の地に達し國王より大なる黑き二片の牙と些少の毛髮及び綺麗なる雲斑石の盂鉢の分配を受けたり大可汗は其專使が斯くも貴重なる奇品を齎し歸り來るとの通知を得玉ひし時上都内の居民一統に令し市外に出でゝ之を迎へ行列を盛大にし壯重嚴肅に之を闕下に導かしめ玉へり

ゼイランの高山に關する詳細は今既に述べ終れり之より再びマーバル國に還りカイル市の事に及ばんとす

(一)(案)ソゴモンバルカンは一本にはサガモニボルカンとあり釋迦牟尼佛のことなりソゴモンといひサガモニといふ俱に釋迦牟尼なりバルカン又ボルカンは羅古人が佛陀を轉訛してブルカンといふより再び轉訛せしなり又曇無佛陀とも稱す

爰に高山とあるは初伽山のことなり四洋人は之を亞當峯と喚ぶ唐の玄奘三藏の西域記に曰く僧伽羅(錫蘭)國の東南の隅に楞迦山あり巖谷幽峻にして神鬼游舍せり昔佛此に於て楞迦經を說けりと又傳ふサマンタクダ(初伽山)のサマナ王佛陀の初迦國即ち錫蘭國内に到るを聞くや佛陀に請て曰く我が守護の下に在る此高山の上に紀念の爲めに會衆諸王の前に於て足跡を印し留め玉はんことを願ふと時に佛陀は東方に向ひ足跡を印し玉へり長さ尺二寸あり是れ初迦國は佛陀の享有し玉ふ國土にして其教の敷及繁盛すべきことを表する印象として今に存する所なりと錫蘭の土人間に於ては往古より此山を以て尊榮無比と爲す所以の源は此等の傳說あるに由るなり然るに中古よりは婆羅門の徒は山上の巖にある凹處はシヤ神の足跡なりと曰ひ佛徒は否是は佛陀の足跡なりと爭ひ回々教徒は之を以て人間の元祖亞當のものと爲し葡萄牙人は兩派に分れて一は聖トーマスの足跡とし一はエチオピア女后カンダスの宮人の跡となし衆說已む時なし著者は足跡の事には一言も及ばず只之を亞當の塚とし又釋迦の墓とのみいへり

(二)(案)著者釋迦を以て錫蘭國王の子とし丸山に入り道を學びしと島内の事と爲す甚だ誤れり

釋迦は幼名を悉達多と曰ふ迦毗羅衛窣都國(今の烏爾の境界近邊恒河々北の一小國)の刹帝利種族の王侯首圖駄那の子なり年十六にして歇利王の女耶輸陀羅を娶り其後心を決して夜中宮門を逃れ出て摩揭陀國(今のマナレス)の山林中に到り茲に道を修むること七年業成て佛道の教祖となりしは遍く世の知る所なれば敢て之を詳說するの要なし今は聊か本文の誤を正すのみ

(三)(案)釋迦の遺物たる施物を受る鉢盂梵名パーツラは最も貴重の寶物にして阿輸加大王曾て之を錫蘭に送り南印度の一君長の爲に持去られしが晉の法顯は健駄邏國の布路沙布羅(今の帕沙允兒)に在るを見たりと云ふ玄奘三藏の時に最早此に在らすして波斯に在りといひたれど今は尙カシクルと稱して健駄羅に在りといふ佛牙は錫蘭に在り西域記にも王宮の側に佛牙の精舍ありとあり西域記に記す所を見れば佛牙は縛喝にも在り其長さ寸餘廣さ八九分色黃白にして寶光淨とあり迦濕彌羅國にもあり長寸半許其色黃白或は齊日に至れば時に光明を放つとあり羯若鞠闍國の拘蘇摩補羅城四にもあり并に髮爪もあり佛牙長さ寸餘殊光異色朝に反し夕に改まるとあり支那の福州に在るは或は忽必烈可汗の時錫蘭より來りし者か佛牙も斯く多くありては信じ難きに似たり

第二十四章

カイル市

カイルは著名の都市にして(一)マーバル國王兄弟四人中の一人アスシャル之を領す(二)此王黃金寶玉に富み國内無事太平を謳歌す是を以て外國の商賈最も喜て爰に往來し王も亦之を歡迎優遇す故に西國より來る諸船假令へばオルムス、キス、マデム其他亞剌比亞諸港より商品馬匹を積み來る者は皆な此港に入る殊に此港は最も貿易に適する位置を占め居れり此王宮には常に三百人以上の佳人ありて王に侍す其狀最も華麗を極めたり

(一)カイル昔は今の麻打拉隆省のチンネヴェリの國なり港の所在地はタムラパルニ江の河口より大約一哩半の上流に在て近隣にては之を蒔カナルと稱す昔は海に接近せし海港なりしが今は埋沒して一哩半の上流となり僅に寒村の有樣を存するのみ

なれども城壁寺院倉庫墻壁等の迹カナル村北に於て今猶歴々見るを得べしといふ

(二)ナルシンガ王即ちテリンガナの王は其廣大なる領地の南部諸國を分ちて諸兄弟の直轄に置き其管轄地域内に在ては各自に國王たるの全權を行はしめしものと見ゆ其後此地方は馬拉巴爾(マラバル)海岸のコーラム王の爲めに全く占領せられたり

此都市の人民のみならず印度全國に通じて土人は絶えず好て檳榔樹の葉を口にする習俗あり其葉をテムブルと名く(三)蓋し一は習慣よりし一は之を嚙めば快感を覺るより來るものなるべし之を嚙めば唾液湧き出づるを以て頻々之を吐き出して已まず高貴の者は葉に調和するに龍腦其他の香料を以てす石灰の合劑を加ふることもあり此葉を嚙む所以を問へば殊に健康に稗益ありといふ人を侮辱する心にて甚しき粗暴輕蔑の態を以て此葉を咀嚼せし唾液を以て其の面に吐掛くる事ありスの如き侮辱を受けし者は走て之を王に告げ其狀を愁訴して闘を以て其爭を決せんことを請ふ王は之を聽て兩造に劍と小き楯とを與へ居民一統集て其爭闘を見證し何れか一方此處に死するに至て已む然れども劍の尖頭を以て敵を傷ることは嚴禁せらる

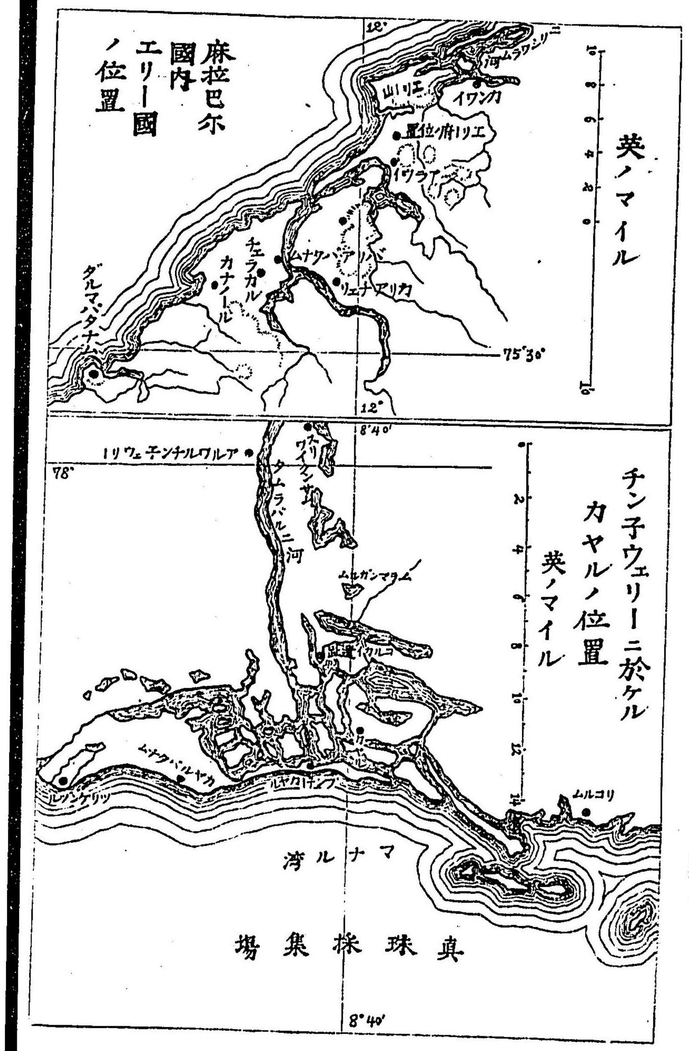
(三)テムブルとは波斯(ペルシヤ)語にて檳榔葉を謂ふなり梵語のタムブラより來る

第二十五章

達拉王國(タラワンコク)ナルシンガ(ナルシン)王國の周圍港(コーラム)國

マーバル國を去て西南に行くこと五百哩(マイル)にしてコーラム國に到る(一)基督教猶太教の者多く住し各其本國の通語を用ふ國王ありて之を治め他の國に貢を納るゝことなし國内良好の蘇木を產すること多く胡椒も亦其量甚だ夥し國中山林と平地とを問はず其に之を生ず之を收穫するは五月六月七月の月なり而して其の莖は農夫之を栽培增殖するなり(二)藍も亦盛に栽植す質佳良にして量も亦多し此は草本の植物より製するなり先づ根を併せて之を拔き取り桶中の水に浸し放置して腐るを待ち壓搾して其汁を取る汁を得て太陽に曝し水分を蒸發して糊狀となるに至り小片に切る吾輩の市場に見るは即ち此形なり

此地數月の間暑熱殊に酷烈にして殆ど耐ふべからず然れども商賈は巨利を得易きに引かれて世界の諸方支那蠻子(マンジ)亞剌比亞(アラビア)の如き國々より此に來往して輸入し來りし貨物を賣りて後歸り荷物を積取り去る此地產する所の獸類には世界に類なき者多し虎は全身純黑なり鸚鵡類の鳥種々あり中には雪の如く白くして足と嘴の赤き者あり紅色藍色を混ずるものあり或は其形甚だ小きもあり孔雀も亦歐羅巴產よりは美にして且大なり其形も甚だ異なり其外家畜にも奇形異態のものあり果實も亦同樣にて他邦とは同じからざるもの多し是れ此地方の暑熱最も猛烈なるに因るといふ酒は一種の椰子より得たる砂糖より製す其性殊に良く人を醉はしむること葡萄製の物よりも速かなり穀類



は米を除くの外産出なしといへども人の食料と爲すべき物は何品を問はず皆な夥し米の產量も亦甚だ大なり人民の中には占星術醫術を業とする者多し何れも能く其術に熟達せり人民は男女に論なく色皆な黑く一小片の布帛を以て體の前部を掩ふのみにて渾身全く裸體なり風俗淫慾放縱にして血緣の者其他父の死後生母ならざる庶母兄弟死後の其妻を取て妻と爲し聊も顧慮する所なし然れども予が聞く所を以てすれば此風は印度の各地何れにも行はるゝなり

（一）（案）コーラムは一にコイルムとあり往時は印度と西部亞細亞との間の一大貿易港にて葡萄牙が初て印度に來りし頃には最も有名の土地なりき今は固闌と稱す途拉王哥爾州の中に在りコモリン海角の西北海岸なり然れば則ち著者はコマリ國即ちコモリン海角を述べ了て次に此地に及ぶべきに此地を先にせしは如何との論もあれど此書の體裁只著者の想出するに隨て口述せし迄にて地理の前後せし事は敢て此一處のみに止まらず前にも往々此例少なからざるを思へば必すしも怪むに足らざるなり

（二）著者は胡椒收穫の時季を誤記するに似たり麻拉巴爾海岸には胡椒莖の花は六月にして其實を收穫するは十二月なり

コモリン海角地方

第二十六章

コマリ州

瓜哇に於て見ることを得ざりし北斗星の一部が此コマリ州にてはそれより大約三十哩程海に出で

て眺れば恰も之を見ることを得べく水平上一尺五六寸位の高さに見ゆるなり（一）此國は耕耘未だ多く開けず主として樹林を以て被はれ種々の獸類の棲家なり殊に短尾の猿を多しとす其大さ人の容貌に類す尾長の猿猴もあり大さに至ては前者とは甚だ異なり虎豹大野猫も亦多し

（一）コモリン海角附近の國を謂ふなりコマリは梵語クマリの訛なり處女の義にて女神ヅルガの稱なりアブルフェダ曰くうスクマリは麻拉巴爾（マラバル）とマーバルの間に挾まると（案）今は達拉王哥爾（クラワンコール）の内に屬する地なるべし

第二十七章

エリー山地方

デリー國

コマリ州を去て西に進むこと三百哩（マイル）デリー國に達す（一）固有の國王あり一種の國語あり國は獨立にして何れの國へも貢租を納るゝことなし人民は偶像を崇拜す邦内絶て船積に適すべき港なしといへども大河ありて船を入れて安全停泊すべし（二）國の勢力は民庶の多きに因るにもあらず其勇敢なるに因るにもあらず四境通路困難にして敵の來襲殆ど不可能なるに因るのみ邦内胡椒生薑を産すること夥しく又諸種の香料も少なからず若し入港する意にあらず不慮の事にて偶然にも船の河口内に入り來るものある時は船中積む所の貨物は殘らず取て之を沒收し且告て曰ふ汝等は此地に來る意思にあらず而して我佛神汝等を導て我國に來らしむ是れ我をして汝等の所有物を盡く享受せしめ玉はんが爲めなりと蠻子（マンジ）よりする船は未だ好天氣の季節の終らざる中に此に來り着し一週をも過さず成るべく短時日の内に荷積を了らんとを努む海岸一帶皆な沙濱なるが故船掛り場甚だ安固ならず假令へ船には强風に耐へ得る爲に巨大なる木の碇を具へありといへども往々危險に陷ることあればなり國内には虎其他獰惡なる猛獸甚だ多し

（一）デリーの名一本にはエリーとあり今はエリーともデリーとも名くる市邑あるを見ず只山の名にデリー山といふありデは佛語に（の）といふ語格に用ふる字にてエリーの山といふを正しとすべし麻拉巴爾（マラバル）土人は之をエリマラといひ北海岸地方の口碑にはシャブタシャイラと稱せり七ツ山の義なり是は麻打拉（マダラス）隈内に於て海岸迄横亘するガーツ山の支派たるに過ぎず大約北緯十二度麻拉巴爾（マラバル）國の尾端加那拉（カナラ）國の首端の處に在り山嘴岬角を爲して海に出づカナノールの北十六哩（マイル）程なり

（二）爰にいふ大河とは著者が通行せし頃には猶ほ繫え居しクリカル王一名コラストリー王の國内を流れ來りデリー山の南方カナノールより遠からざる處に至り海に注ぐものを謂ふ其市街の名に因りワリヤパッタナム河と稱す

麻拉巴爾國

第二十八章

麻拉巴爾國

麻拉巴爾（マラバル）國は西方に在り大印度中の廣大なる一國なり（一）此國に就ては今其二三の事實を詳說せざ

るべからず居民は其固有の國王に由て管轄せられ且固有の國語あり王は他の何れの國よりも羈絆を受ることなし此國に於ては水平上大約二尋程の處に北極星を見る此國にても近隣のグゼラト國と同じく無數の海賊横行し年々百以上の小船を以て附近の海面を巡邏掃蕩し此方面を通過する一切の商船を捕へて掠奪し盡す此賊は海に出づるに妻子大小殘らずを伴ひ夏期の巡海中は絶えず之と同船し居るなり一商船をも見逃がさゞらんが爲に彼等は互に五哩宛間を隔てゝ一列線に碇を下して船を停め居るなり故に二十艘の船にて百哩の海面を哨視し居るものとす其中の一小船にて商船の近づき來るを見る時は火又は烟を以て合圖を爲し諸船皆な集合して將に通過し去らんとする商船を掠奪するなり船中に在る水夫等には害を加ふることなく船中在る所の物を分捕し終れば直に之を陸上に運び且商船の水夫に告て曰ふ往け汝等行て他の貨物を積め而して再び此路を通行する時復來て我輩の巢中を富ませよと(二)

此國には胡椒生薑畢澄果椰子を產すること甚だ夥し最緻最美の綿布の製造あり世界無比と稱せらる燈子方面より來る船は銅を船脚として此外金襴錦繡絹布羅紗金銀地金其他麻拉巴爾地方に生せざる多種の藥品等を積み來り之を以て此地方の物產と交易す此地亦商人ありて燈子よりの貨物を得て再び之を船積して亞丁に輸る亞丁よりは又別に商船ありて之を亞歷山港に轉送す

麻拉巴爾國は述べ了れり是より此國に隣接するグゼラト國の事を說くべし

今若し印度全國の一切の都府殘らずを論じ盡さんとせば言最も冗長となり徒に讀者の疲勞を買ふに止まるのみ故に予は聊か予が詳說を要すべき地方のみに筆を止めんとす

(一)麻拉巴爾の名は普通には半島の西部沿岸地全帶を喚ぶに用ふれども格別にデルラ山即ちデリー山の南の地方のみに限りし名とする是當然とす土人は之をマラヤラといひ又マラヤラムといふ然るに著者は既に自らコモリン海角より大約三百哩と算定せし北方の地方と爲すべき筈なるに却て世人が加那拉及びコンカン州と稱する沿岸の地を以て麻拉巴爾國と爲せり疎漏と曰はざるべからず(案)麻拉巴爾は尤も之を廣義に見做せばコモリン海角より大約緯度十五度に至る間の地名とすべけれど學者によりフナヌルよりクマーリに至る迄とするもありシンダブル即ち俄亞も亦其領域中に屬すと爲すもあり然れども北はデリー山とマンガロールを限り南は固剛港地方限りを麻拉巴爾の境域と爲すを常とす

(二)麻拉巴爾の北部加那拉コンカン邊は古來海賊の巢窟なりデリー山近傍を以て其最とす

第二十九章

古塞拉德國

古塞拉德國(グゼラット)は西の方印度海を以て限りとす自國の王ありて之を統轄し國內固有の邦語ありて通用す(一)北星は此地に於ては高さ六尋程に見ゆ此國の港には最も暴戾なる海賊棲息し其巡海の時に

於て通行する旅商を捕ふる時は直に强て彼をして數升の海水を飲ましめ以て下痢を起さしめ海賊の近き來るを知て眞珠寶石の類を隱匿せんが爲に嚥下し居らざるやを檢す(二)

國內生薑胡椒藍を產すること甚だ多し綿は多重に綿樹より產す樹の高さ大約一丈八尺其齡二十年を限度とす二十年に達せし者より採りし綿は紡績用には供すべからず只蒲團の中入に用ふるのみ之に反して十二年を經し樹より採りしを最も能く綿紗(セスリン)其他極細精好の物を織るに適するものとす

(三) 此地又山羊水牛野牛犀等の獸皮を鞣すこと莫大にして之を船に積み亞剌比亞の各地に販賣す臥床の上被を製するに靑紅色の革を以てす殊に柔軟にして精美なり金銀線を用て刺繡を爲す回々教徒は好で此の如きものを用ふ金線を以て禽獸の形を飾とせし椅褥も亦此地の製造なり時には其價銀貨六マークの貴き物もあり要するに此地にて作りし刺繡の精巧なるは天下無類なり

是より進てカナンと稱する國を說くべし

(一)(案)現今に所謂古塞拉德(グゼラット)半島は果して古に所謂古塞拉德(グゼラット)國の全部なるや稍〻疑なきにあらずと雖ども之を以て麻拉巴爾(マラバル)に隣接する者とし且次章以下三市府を後にして先づ之を前に說くに至ては位置の前後轉倒甚し是れ例の著者の記憶、錯誤ならざるべからず

(二)古塞拉德地方が孟買(ボンベイ)の東古諸帝の所領となりし以來は嚴法を以て居民の海賊生活を禁ぜしを以て十五六世以後サルセット島のダナ以北に至る迄は强盜の行はれしを聞かず

(三)(案)マーステン曰く著者は印度の吉貝樹(パンヤイ)を誤認して滿木綿著くは草綿と倣すに似たり吉貝樹は林木にして一丈五尺より二丈の高さにも生長す然れども其綿は紡ぐべからず僅に蒲團類の心に用ふのみと然れども拉施特(ラシド)の印度紀の古塞拉德(グゼラット)の條に此地にては葡萄一年に二回實を結ぶ土質肥沃なるが故に木綿は楊柳樹の如く生長し十年は續て棉花を收穫すべしとあり マスムの印度史にも木綿生長して樹木の如く棉花を採集するには之に攀登らざるべからずとあれば强ち著者の述ぶる所を誤とといふべからず

ダナ市即ちサルセット島

第三十章

カナン國

カナンは西方に在る重要なる一大國なり(一)之を西方に在りといふものは著者は東方より旅行し來りしが故に到る處の國每に自ら之を西方に見たるを以てなり讀者之を諒せよ一君主ありて之を領し他に貢租を納むることなし人民は象敎徒にして固有の邦語あり此國には胡椒生薑共に產することなく一種の香を產すること多し其物色白からずして却て暗黑色なり此香料と他の諸品を積取らんが爲に船舶の來泊するもの少なからず船中又多く馬を積み居れり之を印度の各地に搬て賣らんが爲めなり

(一)洋字TとCとの誤寫よりタナンがカナンとなりしなり其實はダナなり即ち孟買(ボンベイ)の北二十哩(マイル)にあるサルセット島の陸側に

ある市街なり大半島鐵道ありて海峽を越え此地に達し居れり又コンカンダナとも稱す

第三十一章

カムバヤ國

カムバヤは亦西に在る廣き國にて固有の王ありて之を統御し何れの國へも貢租を納むることなく亦固有の邦語あり（一）人民は象教徒なり此國にては北極を見るに前諸國よりも更に一層高し是れ其位置更に西北に在ればなり貿易盛に行はれ製藍の量極て多し綿布の製織も亦盛大にして棉花の產出殊に夥しく絲製せし皮革類を輸出し其代として金銀銅粗製酸化亞鉛を輸入す

其餘記すべき事なければ次にセルヴェナツ國を說くべし

（一）案）孟買の北の方甘買灣底の繁盛なる貿易港なり今は甘買と稱すれども土人はカムバヤトと喚ぶ往古の市府は今の甘買市よりは三哩隔りて今は荒廢殘滓に委れたり

第三十二章

セルヴェナツ國

セルヴェナツも亦西方に在る國にして（一）人民は象教を信奉し國王ありて之を治め他國に貢納せしことなく固有の邦語ありて通用す能く濟ふたる人民なり商業工業を以て生活の專業とし他邦の商賈多く茲に往來して種々の貨物を輸入し歸路は此邦の產物を持ち去る一般の人民は既に彼が如くなれども象教の寺院に勤務する僧侶は世界第一等の不信殘忍の徒のみなり次にケスマコラン國を論ずべし

（一）セルヴェナツはソムナツの訛なりソムナツはソーラスツラ沿岸にて古塞拉總半島中に在り一〇二五年回々教の頑迷者かズニのマームッド來襲して有名なる佛寺を破壞し巨大の佛像を毀ちこれを飾りし寶石等を持去りし處なり此地は商業も盛なる港にて亞丁の商船等屢〻來り泊するなりアブルフェダの記す所に據れば當時回々教徒の爲に民衆多く屠殺せられしを以て回回教の者に對して反感を懷くこと今に多く殊に僧侶間に於て最も甚だしとあり著者は回々教徒の船員より聞取りしものなるべければ自ら本文の如き說も生ぜしなるべし

第三十三章

ケスマコラン國

ケスマコランは一大國にして其固有の國王あり又固有の國語あり（一）人民は中には象教徒もあれど多分は回々教徒なり貿易製造を以て生業とし米麥を食料とし兼て肉と乳とを用ふ其產出の量甚

だ多し他邦の商賈海陸より多く來り聚る路を西北に取て進まば此國は大印度の最後の地なり蓋し大印度はマーバルに起り此地に至て止ればなり而して予は只大印度の沿岸に在る州郡市府のみを說けり若し其内地に在る者を併せて詳說せんとせば敢て一小冊子の能くする所にあらざるなり

(二) 是より海上の二島を說くべし一を男島と喚び一を女島と名く

(一)クスマコラン(ペルチメクラン)は卑路斯坦のメクラン州なること論なし東方の人は一般にキズマクランと言ひ慣れたり州名と市名とを併せ喚びしに外ならず往時はカンダハル、ヘラト、カブルと共に印度の境内に屬せしなり

(二)マーバルは麻拉巴爾(マラバル)に非ず混ずべからずマーバル半島の東海岸地キスツナ河近傍より尙ほ盛密に謂へばペンナル河より コモリン岬迄の間を謂ふなり即ちタムル語(南印度語)を通語とする境域を謂ふなり

第三十四章

男女二島

ケスマコラン(メクラン)を離れて海上を南に航すること大約五百哩(マイル)にして二島を見る相隔ること大約三十哩(マイル)一は男子のみ住して一人の女子なし之を男島と名く一は婦人のみ居て男子なし之を女島と稱す(一)二島共に人民は同人種にして洗禮を受けし基督教徒なれども舊約書の規則に遵ふものとす男子は女島に赴き三四五の三个月間續て其の島内に居住し各人毎に其妻と同棲す此三个月を除くの他は終年男島に歸りて一切女子の伴侶なく獨棲するなり婦人男兒を產む時は十二个年間は手元に置て之を育て其齡に達するに至れば男島に送て父と共に居らしむ女兒は婦人の家に置き結婚すべき時に至り別居せしめて男島の一人の男子に與ふ居民一生を過ごすの方法斯の如く奇妙なるは畢竟風土氣候の一種異なる所ありて終年男女同棲するを許さず然らざれば身を危くするの害あるに因るなり島内には監督僧正ありソッコトラ島の大僧正の部下に屬す男子は穀物を播種して各其妻の食料を得るに供へ妻は自ら之を耘り之を收穫することを努む島内又諸種の果實を產す男子は牛乳肉米魚を食とす男子は何れも熟練なる漁師にして魚類を捕ること甚た多し或は新鮮の鹽或は鹽藏して之を島内に來る商人に賣る但其商人の主要の目的は龍涎香を買取るに在り島内此物の採集場も多し

(一)(案)是れ東洋には往古より行はれし奇談なり文獻通考にも東女國四女國を載せ唐の玄奘の西域記にも拂菻國の四南の海島に四女國あり皆な是れ女人にして男子なし拂菻王歲毎に丈夫を遣はして之に配すとあり云ふ所本文と正に相同じ我が邦にも古より女護の島の說行はれ博物志にも日本の東海に女護島ありとあり何れも假撰の一奇談に過ぎざることは明かなれども往時より之を實にせんとしてヴェニス人コルチリ氏の地圓球にもガルダフィ岬の附近に在るアプツルクと稱する島々を以て之に當て其他の四洋人も此奇談を種々に揣摩して臆說を立つる者少からず著者の述ぶるが如き方角には一島もあることなし强て之を索むればメクランとソコツラ島の中間亞剌比亞海岸に近き海中の二小島クリア、ムリアを指

すものに似たり

第三十五章

ソッコテラ島

男女二島を去て南に進むこと五百哩にしてソッコテラ島に達す甚だ大なる島にして人生必用の諸品に富む（一）居民其海岸に於て許多の龍涎香を漁取す是れ鯨の内臓中より排泄する所の物なり商品として最も需用多き物なるを以て人民は之を採るを以て生業とす鐵ある鐵製の漁叉を鯨の體に強く撃込みて脱離せざらしめ漁叉には長き綱を結び付て其端に浮標を付け鯨魚死して沈みし處を見出すに易からしむ之を見出す時は海岸に曳き來り腹部を割て龍涎香を採り其頭よりは數十桶の鯨腦油を獲るなり

人民は男女共に殆ど赤裸々なり只僅に象教者輩が記載し置きしが如く體の前後を被ふに止まるのみ島内米の外には穀類なし即ち米と肉乳とを以て食料と爲すのみ宗教は基督教にて正當に洗禮を受け現身靈魂共に大教正の政權の下に支配せらる此大教正は羅馬法王の部下には屬せず報達府に住する教長の支配に屬して其任命する所に係る或は人民自ら之を選擇任定することもあり此島へ

は海賊他にて掠奪せし貨物を携へ來て賣り拂ふ島民は毫も狐疑することなく象教徒と回々教徒より掠め來りし物と斷定して好で之を買取るなり亞丁に向ふ一切の商船は皆な此に寄港して多量の魚類龍涎香及び島内にて製織せし諸種の綿布類を購買し去る大教正の禁令ありて除名賞罰を嚴にすと雖ども人民は他邦人に比すれば最も多く魔法妖術を好み教正の禁令を以て眼中に置かず若し海賊に屬する船舶抑にて其島民の一人を傷害することもあらば彼等は猶豫なく呪文を以て海賊を束縛し其損害に對し滿足を得る迄は巡洋の途に上ることを得せしめず假令快速なる順風を得て其束縛を逃れんとすと雖も彼輩其風向を變ずるの能力を具へ賊をして已むを得ず島地に船を返さしむ或は海面をして無風平穩ならしめ又は風を起して波浪險惡船舶破壞の難あらしむ其他無數異常の事を生ぜしむるも亦右の如く都て咄嗟の間に在り今は敢て之を詳說するの要なし是よりマダガスカル島の事を述ぶべし

（一）ソッコテラは紫番拙拉島なり阿弗利加洲の東北端ガルダフイ岬近海亞丁灣の入口に在り（案）幅員百六十方里人口五千六半亞剌比亞種にて風俗最も兇暴なり藥草香水顔料等を出すと輿地誌略に見えたり

第三十六章

阿弗利加洲馬達加斯加留島

馬達加斯加留島（マダガスカル）

ソッコテラ島を去て針路を南々西の間に取り一千哩（マイル）を航すれば馬達加斯加爾（マダガスカル）大島に着す世界中の最大最肥沃なる島の一なり周廻三千哩（マイル）とす（一）居民は回々教徒にして瑪哈瑪特（マホメット）の法規を守る四セイクありて庶政を分ち統ぶセイクとは長者の意なり（二）島民は商賣製造を以て生業とす國内象に富む許多の象牙を得て之を販賣することゼンジバル島に於けるが如しゼンジバル島よりも之を輸出す其量同く夥し四季に通じて食ふ所の主要の食料は駱駝の肉なり他の家畜の肉も食はざるにあらざれど駱駝の肉には及ばずとす是れ此地方に於ては其肉程味美にして且人の健康に益ある物はなければなり山林には紅蘇木多く而して其産量に比すれば價格甚だ廉なり鯨魚より龍涎香を得る量も亦甚だ多し海潮之を海岸に打揚げ來る之を取て販賣すること殊に夥し土人が野猫虎其他無數の獸類假令ば牡鹿羚羊黄白斑鹿等を獵獲すること極て多く鳥類も亦少なからず只我雀の風土に居るものとは同じからず（三）

世界各地の船舶多く此地に來り泊す錦襴其他各樣の絹帛類より成る許多の貨物を積込み來て島内の商人に賣り又は土地の産物と交換す之に由て皆な巨利を博す此地より更に南の方には數多の島嶼散在せざるにあらざるも船の來りて寄港する者なく獨り此島とゼンジバル島とを以て無二の港と爲すのみ是れ他なし此方面に向て來る海潮の流勢非常に急劇にして歸舟をして最も困難ならしむるに由るなり麻拉巴爾（マラバル）の海岸より發して此島に達するには二十日乃至二十五日にて足るも此を去て歸航するには三ヶ月間海潮と戰はざるべからず海潮斷えず南に走り其の急なること此の如し（四）

島民の言に曰く年内某季に至れば珍異驚くべき邦言にルクと稱する大鳥南より現れ來る其形は鷲の如くなれども其大さに至ては比すべくもあらず其大にして猛力なる能く象の尾を喙て之を捕へ遥に空中に携へ行て後之を地上に落し死するを待て屍の肉を食ふと此鳥を見たる者の斷言する所なり又云ふ其兩翼を張りたるを見しに甲端より乙端迄廣さ十六歩を測れり一羽の長さ八歩に餘り其厚さ之に稱へりと著者マルコポロは當時此怪物は歐羅巴にて古書に見る所の半ば鳥にして半ば獅子なる所謂グリッフヒンなる者にはあらずやと考へ殊更に此鳥を見たりと稱する者に就き此點を問ひ糺せしが彼等頭を振て否然らず其形は全く鳥なり尚確言すれば鷲の形なりと稱す大可汗（クブライ）忽必烈帝此奇談を聞き此島に特使を遣はし其一臣僕が曾て島中に拘留せられしを解放せられんことを求むるを名とし其實は島内の實況を探査し此怪物奇談の事實を確めしめ玉へり使臣還り來て復奏し所謂ルクの一羽を齎し歸り御前に於て之を實測せしに其長さ六十七尺餘あり翼部にて太さ周圍

六寸ありたりと聞く陛下此驚くべき實況を叡覽ありて叡感淺からず使臣へは厚く恩賞を賜へりといふ(五)此時肥大水牛の如き野猪の大牙をも持歸りしが其量十四ポンドありしといふ(六)島内豹駝驢馬の野獸にして我邦抔のものとは遥に殊なる類を產す島中の事は述べ終れり次にゼンジバルに就て說くべし

(一)正實の周廻は大約二千哩なり三千哩にはあらず

(二)セイク又エセクに作る爾義あり一は著者の再するが如く年長者の意なり一は族長の意となる普通には此第二の意義に用ひらる即ち酋長なり

(三)阿弗利加水洲の沿岸地に象及び象牙の多きは前章にもあるか如く事實なり然れどもマダカスカル島には之なし著者の誤聞ならざれば聞く所を誤記せしなり(案)此島の紀事は多く其實を失せり現に島内には一象一駱駝を見るのみなり豹熊獅子の類は固よりなしといふ

ユール氏曰く著者は馬加多朔の紀事と馬逸加斯加爾の紀事とを混亂錯雜せしに似たり居民は回々教徒にして瑪哈瑪特の法規を守るといひ國内象に富み群多の象牙を販賣すといひ殊に駱駝を屠殺して食ふといふに至ては都て索謀利地方と馬加多朔とに關する事實なりと(案)馬加多朔は桑給巴爾の一部なり土地海に沿て窪下し林木鬱雜野象群を放し惟禽奇獸多く内地は山嶽合沓し四南一帶は最も盛稍にして江河廻繞し土田肥饒一ならずと流環志略にも見えたり

(四)此邊の海潮はモサムビク海峯を通過して南に流れ夫より四に進て喜望峰を過ぎ行く其流勢甚だ急なり東印度航行の諸海客間に最も著明なるものにして馬逸加斯加爾の聖マタクスチン浦の對岸なる阿弗利加本土地方回歸線の下に當る處は蒲萄牙の海客の名けて潮流地方と做す所なり

(五)亞剌比亞花話を讀みし人はロクといふ大鳥ありて其巨大驚くべく其怪力甚しき由を知りしならんが此物必ずしも夜話の夢の空言虛談に止らず亞剌比亞波斯字書にもロクは巨大異常なる鳥の名にて其力能く犀を啄み去るに足るとあり東方諸國に於ては實際世に生存するものと爲して疑はざりしに似たり著者も自ら其實物を見たりとは云はざれど其實在を疑ふを得ずと信ぜしものゝ如し(案)莊子に北溟に魚あり其名を鯤と曰ふ化して鵬と爲る鵬の背は幾千里なるを知らず怒て飛べば其翼は天に垂るゝ雲の如しとあり是は例の莊子の寓言なるべけれど亦必ずしも其形跡なきにもあらず近世濠太剌利亞のニウージーランドにて發見せし化石の鳥骨あり是れ大鵬即ちロク鳥の往古世に實在せしを証する第一歩なり博士ハースト氏オタゴ州のアレンマークの沼にて恐鳥(駝鳥類の巨鳥)の遺物と共に大腿骨有爪の趾骨肋骨を發見せしが全く巨大なる猛禽の遺骨にして氏は之を以て恐鳥を食餌とせし者なるべく其高さ少なくも一丈以上に達せしものなるべく決して象を食り貪ひしといふロク鳥に劣らざる者と爲せり博士オーウエン氏の一八三九年の紀錄に恐鳥の事を記し次に此諸骨は驚屬の巨禽の骨なりと土人より聞けりと記せり盟言にあらざるに似たり現に巴里の博物館にも麻逸加斯加爾島より得たる由にて二箇の大卵殼と脚骨とを藏す卵の大さ直徑縱一尺一寸二分横七寸四分半周圍極二尺八寸容五凰横二尺三寸四分容積は水四升八合五勺を盛るべし普通の駝鳥卵より大なること六倍に過ぎ雞卵に百六十倍す現時の鳥類は駝鳥を以て最大とす而して今此卵之に六倍すと爲せば其鳥の大なること知るべきのみ然もハースト氏の發見せし鳥骨は尚此大禽を食餌とせし巨大の鳥に屬する骨なりといふ大鵬の寓言其實は寓言にあらざるに似たり

(六)阿弗利加の野猪には四牙あり二牙は共だ大にして上顎より生じ上に向て角の如く長き九インチ根にて周圍五インチ以上あり二牙は下顎より生じ口外に突出すると殆ど三インチに及ぶ然れども木文曰ふが如く其量十四ポンドありしとすれば決して野猪の牙にはあらず河馬の牙なりしに相違なし河馬の牙は麻逸加斯加爾よりは出でざれど桑給巴爾より輸出する著名の商品なり時には其量十二三ポンドに至るものありといふ

阿弗利加洲桑給巴爾

第三十七章

センジバル島

麻達加斯加爾島外にゼンジバル島あり周廻二千哩なりといふ(一)土人は偶像を崇拜し固有の方言あり他の國の羈絆を受くる事なし身材大なれども高さは其體の大なるに比例せず若し然らざれば巨人たるを失はず然れども强健多力にして我邦人抔の四人を要する貨物を運搬するに容易なり同時に其食を要するは五人前なり色黑くして裸體の儘往來し僅に一片の布を以て隱部を掩ふのみ毛髮捲縮して水に浸すも容易に梳ること能はず口大にして鼻頭額に向て反り耳長く眼大くして恐るべく殆ど妖鬼かと怪まる婦女も亦等く醜怪にして口廣く鼻太く眼大なり其手と頭顱とは比例外に大なり此島中の婦女は世界第一等の醜を極めたる者にて大口廣鼻偏胸其狀他の婦人に比すれば大さ殆ど四倍せり土人は肉乳米穀蚩椰子を食料とす島內葡萄を產せず米と砂糖とを以て一種の酒を釀し一二の香料を加ふ頗る佳味にして人を醉はしむ島中象多く繁殖し其牙を以て重要の貿易品とす此獸に就て特に記すべき點は交尾の方法他の一般の獸類とは反對にて女陰の位置殊なるの故を以て殆ど人類の交接と同樣なるに在るなり(二)此國にては豹貔も亦之あり甚だ綺麗なる動物なり體の格好能く釣合ひ前脚長くして高く後脚は短かし頸甚だ長くして頭顱小く動作甚だ閑雅なり普通の色は淡くして紅色の圓斑あり高さ即ち頸の長さ頭を込て三歩なり羊は歐羅巴の者と殊なり頭部のみ黑くして他は悉く純白なり犬の色も亦然り之を要するに諸獸一般に歐洲の者とは其外觀を殊にするなり多數の商船來り泊し積み來る所の貨物に代て象牙と龍涎香とを積取り去る海中鯨魚に富むを以て島の諸酋長時としては互に相戰ふ人民は戰に臨て多く勇氣を現はし死を輕視す彼等戰ふに馬なく唯だ象と駱駝の背上に在て戰ふのみ象の背上には木城を架し中に十五人乃至二十人を容れ劍鎗石を兵器として戰ふなり其將に戰はんとするに當ては先づ象に呑ましむるに酒を以てす斯くすれば象の氣鋭くなりて進で敵を毀ふに最も猛烈なりと信ずるに由るなり(三)

(一)センジバルは桑給巴爾なり專ら阿弗利加東岸に近き一小島の名とし用ふれども一般には南緯十二度四十分の邊より北緯二度に至る迄の海岸地一帶を稱するなり桑給巴爾島は大陸を距ること僅に十里許長さ十九里半人煙最も稠密なり地性豐饒樹木鬱生し肥田沃野巷く開け珠色至て美なり氣候相照寒溫變化少なく島內處々に繁華の地ありシャンガンニは蘇爾壇の都なり城砦あり人口六萬に過ぐ亞剌比亞人の商家甚だ多く貿易最も盛なり

(二)昔時は一般に此の如き奇獸行はれたり畢竟其實況を見るの機會稀れなるより生ぜし誤なり麻葉を推て取りし汁液をパンゲと名く麻醉の性あり印度にては賊に臨み糸に欲ましむるに此汁液を以てし之をして狂暴の性を發作せしむといふ

第三十八章

印度洋中の群島

前に印度の諸州を述るに當ては只其著明重要の地のみを擧げたり島に就ても亦然り其餘の諸島の數に至ては實に無數無量予が此方面を航せし海客及び有名の水先に聞き印度洋を通航せし人の紀事を讀て知る所に據れば其數實に一萬一千七百以上なり而して中には人烟なきもあり人口稠密なるもあり（一）大印度と稱するはマーバルよりケスマコランに至る迄にして內に十三大國あり予は既に其十を數へ擧げたり小印度はジャムバ（古城）に始りムルフィリに終る內に八王國あり但島國は此外とす是れ亦其數甚だ多し余は今第二印度即ち中印度を說かんとす之をアバッシアと稱す（二）印度洋の群島とはマルダイヴ一群無數の島嶼とラッカダイヴ一群の數島とを指すや明かなり其全數を一萬二千六百とするは誇大に過ぎたりといへども印度及び其諸島に於て一般マルダイヴのみにても一萬一二千島ありと信じ居るより著者も本文の如く述べたるなり其實は然らず

（二）案印度の名稱は古より漠然として一定する所なし記者に由て各其指す所の境域を異にせり本書の著者マルコポロの小印度は波斯（ペルシヤ）に隣接せる信地（シンド）方メクラン（卑路斯坦）と印度本地の四海岸一帶麻拉巴（マラバル）爾を除きし部とを包含し大印度は麻拉巴（マラバル）爾より東方無邊の地區即ち印度本土より支那の南邊に及び中印度は即ち阿弗利加（アフリカ）の桑給巴（サンギバル）爾なりコンチ氏は印度を三部に分ち波斯（ペルシヤ）より印度河に至る即ちメクランと信地（シンド）を一部とし印度河より恒河（ガンジス）迄を一部とし恒河（ガンジス）以外の地即ち印度支那と支那とを一部とせりアンドレアビアンコの地圖には曰く小印度西方は波斯灣に至る曰く大印度、州國十四民種十二を包含す曰く上印度、州國八民種二十四を包含すとあり其餘皆に依り圖に依て同じからざれども大印度と稱するは印度の本土なるは略皆な同じ但三部の一を以て阿弗利加（アフリカ）洲中に置くは亞剌比亞（アラビア）人の所說に基きしものなるべし之を要するに著者の印度の地理實況を精知せざりしとは掩ふべからざる所にして其列擧せし所謂十國なるものは一にマーバル二に圍陽（クロン）三にコマリ四にエリ五に麻拉（マラ）巴爾（バル）六に古塞拉德（ゲゼラト）七にタナ八に甘賣（カムバイ）九にソムナツ十にケスマコランなり其位置の順次既に錯雜を極めしのみならず若しコマリ即ちコモリン海角エリー山地ソムナツ府の如き小地域を以て特別に列擧すべきものとせば大印度內には必ずしも十三に止まらず尙數十國を數へ擧げざるべからず當時世間に大印度には十二王ありといへる說專ら行はれ居けるを襲聞して十三王國ありと述了せしより來りしものなるべし

第三十九章

阿弗利加
亞比西尼
亞

第二印度即ち中印度其名をアバッシアと稱す（亞比西尼亞）アバッシアは廣き國なり中印度一に第二印度と稱す（一）其地に首位を占むる王は基督敎徒なり其外六王あり第一の王に貢租を納む六王の中三王は基督敎徒にして三王は回々敎徒なり予聞く此地方の基督敎徒は自ら他の宗敎と區別せんが爲に顏面に三箇の標記を印す額に一箇兩頰に各一箇宛なり其兩頰の者は燒鐵を以て押すなり而して彼等自ら謂ふ先づ水を以て洗禮を施こし再び火を以

て洗禮を行ふなりと回々宗徒は只一箇の標記のみ之を額に印して鼻の中央に達せしむ此地猶太教徒も亦多し是は標記二箇を印し兩頰に各一箇宛とす

基督教徒たる大王の都は國の内部に在り(二)回々教諸王の領土は亞丁國の方に在り(三)此地の土人をして基督の教に轉宗せしめたるは實に使徒聖トーマスの赫々たる偉勳なり使徒は先づ努皮亞に於て福音を講說し居民を改宗せしめて後此アパッシア國即ち亞比西尼亞に來り講論說教の感化奇蹟異事の示現に由て同く土人をして改宗せしむるの効を奏せり此事畢て遂にマーバル國に居を轉じ無數の人衆を感化改宗せしめて後前章に詳說せしが如く殉教者たるの冠を戴き其地に埋葬せられたりアパッシアの人民は勇敢なる良兵士にして斷えず亞丁蘇爾壇努比亞人其他隣境の國民と戰を交へ居れり斯くも休止なく兵器を執ることに熟錬せしを以て此方面にては實に最良の戰士と稱賛せらる

予が聞く所によれば此亞比西尼亞國の大王の臣民は年々多數に耶路撒冷に巡拜せしを以て王も亦一二八八年自ら基督の墳墓に參拜せんと決せしが政府諸官吏之を諫めて我が敵たる回々教徒に屬する多數の邦國を通過せんには必ず不測の危害を受くることあらんとて切に之を止めたり由て王は一人の僧正を選み其代理者たり且神聖尊重の人として遣はしたり乃ち耶路撒冷に着一祈念を師し國王より命せられし供物を捧げ畢て該府を辭せしが歸途亞丁蘇爾壇の領地を過るに當り蘇爾壇の命にて其面前に引出だされ强迫を以て回々教に改宗せんことを勸められたり僧正は斷乎として基督教の信心を棄ることを拒みしかば蘇爾壇は亞比西尼亞王の憤恚を輕蔑し僧正の陽根を截斷して後放ち歸らしめたり僧正歸り來て蘇爾壇より受けたる侮辱强暴の次第を細かに明言せしかば王は之を聞て直に令を下し軍を聚めて自ら其先頭に立ち蘇爾壇を則滅せんとて進みたり蘇爾壇は乃ち其近隣の回々教徒たる二王に援軍を請ひ連合の大軍を以て之に當りしが大爭鬪の後亞比西尼亞王の提利となり亞丁府を攻略して大に之を刼掠し以て僧正の身に加へし侮辱强暴の仇を復せりと

(一)(案)ユール氏曰く亞比西尼亞は亞剌比亞にてはハブシ又ハッシといふ著者のアパッシと稱するは正に之と相似たり著者は中印度を以て亞比西尼亞の一名とす波斯亞剌比亞何れの學者も未だ印度の名稱を阿弗利加の亞比西尼亞に用ひしことあらず著者は何れより此名稱を得來りしか甚だ怪しと思ひしにベンジャミンに八日にして中印度に達す之を亞丁とす聖經にあるエデン是なり此國山多く山上猶太人多く居住す彼其山を下てマーツム國に入り之と戰へりマーツム一に努比亞と稱す基督教國なりとあり亞丁を以て紅海の西に移せり(著者マルコポロも亦然り共にアデルの誤なり)猶太人既に山を下て努比亞人と戰はんとす必ず亞比西尼亞の山間に要害を索めざるべからず乃ち知る其所謂中印度なるものはマルコポロの所謂中印度と殆ど同一なることを其他尙ほ之に類するもの多し今之を贅せず

(二)國の内部とはショアを謂ふなり(案)ユール氏云くマルコポロの所謂大王とはソロモン家の當時の王イコン、アムラクの事なるべく次に一二八八年とあるは亞比西尼亞史に據り一二七八年と爲すべし

(三)當時回々諸王中の盟主はアデル國にして其蘇爾壇の首府はオーッサといふ當時主要の海港ゼイラより少距離の內地に在り本文此に亞丁とあるは即ちアデルの誤りなり又アダルともいふ亞丁とアデルとの間には紅海ありて亞丁は亞剌比亞の方に屬しアデルは紅海の南岸亞比西尼亞の方に在りて其隣境なり

亞剌比亞
亞丁國

此國の人民は小麥米肉乳を食料とす胡麻より油を搾る凡そ食料としてあらざるはなく殊に其量豐富なり國內象獅子豹駝其他野驢等の各種獸類多く殊に猿に至ては人の形貌を爲したる者あり野鳥家禽の類も亦少なからず(四)殊に黃金に富み諸邦より商賈入り來て大利を博す次に亞丁國を說くべし

(四)糸原豹駝は平低の國に棲息すれども獅子豹類に至ては絕閉ぜし國には居らず亞比西尼亞は勿論阿弗利加洲內には虎を見ずと聞けり諸種の獸類群を爲し之に加ふに狒々を以てし何處にても粟畑を苦すといふ國內鳥類を產すること獸類の比にあらず

亞丁國

第四十章

亞丁國は王ありて之を統轄す之を蘇爾壇と稱す(一)人民は皆な回々教徒にして最も基督教徒を憎惡す國內市街城邑の地多く良港ありて其便を極め印度より香料藥品を積みて往來する船舶甚だ多し土地の商賈之を買ひ輸入し來りし船より卸し再び小き船艇等に分け積み天氣の都合にて長短はあれど大約二十日間紅海を航してアレキサンドリアに輸送する目的を以て先づ其港コセールに着し夫より駱駝の脊に積て四十日間陸地沙漠を運搬しナイル河(ケネ)に達し再びゼルムと稱する小舟に積て河水を下り改羅に屆き夫よりカリゼンと稱する堀割を過ぎ遂にアレキサンドリアに達するなり是れ最も困難少なくして最も捷き路なるを以て商賈は其所有の印度產なる貨物をアレキサンドリア府に運ぶには常に此路を取るなり而して商人は又此亞丁の港に於て多數の亞剌比亞馬を積込み印度の諸邦諸島に送て高價に販賣し以て巨利を得るもの多し

(一)此にいふ所の亞丁は前章の亞丁とは異にして眞誠の亞丁即ち亞剌比亞也門部の東南端紅海の入口より遠からざる處に在る有名の市府亞丁港なり前章の亞丁は其名の似たるよりアデルを聞き誤りしものなり

亞丁の蘇爾壇とは也門の蘇爾壇ないふなりモッカの東北タイズを以て居所とすマルコポロ時代の蘇爾壇はマリク、ムザッファル、ジャムスヒン、アブル、マハセン、ユスフといふ長き名の王なり父をマリク、マンスルと云本はアユバイト朝の從臣にして其兄ムアッザム、ツランシと共に其君サラヂンの命に依り也門に來り兄の死後繼て知事となり遂に自立して國を建つるに至りしなり

亞丁の蘇爾壇は賦課の租稅印度より輸入品の課稅返り荷として港內にて積込む貨物の課稅等より無量の富を有せり蓋し亞丁は此方面に於ける諸商品交易の最大市場にして諸商船の必ず輻輳する

處なればなり予之を聞く巴比倫の蘇爾塁が初て軍を出してアクル府を襲撃占領せし時亞丁府民は常に基督教民に對し怨恨を含みしを以て蘇爾塁に助勢し之に給するに馬三萬頭駱駝四萬頭を以てせりと(二)

次にエシール府を述ぶべし

(二)既に前にも解釋せし如く巴比倫は埃及改類の中古名と知るべし

亞剌比亞阿曼部ソハル市

第四十一章

エシール府

此府の酋長は回々教徒なり亞丁蘇爾塁の主權の下に在て其政治頗る公正なり亞丁の東南大約四十哩に在り(一)非治下之に屬する市街城邑の地少からず府は良港にして印度より無數の商船來泊し多く駿秀の馬を稽去て之を高價に販賣す印度に於ては最も之を貴重するなり

此地方には品質最良の白乳香を產す其量甚だ多し樅に類する小樹より點滴となりて浸出す(二)土人は時々樹身を叩き或は其皮を剝ぐ乃ち其傷口より乳香次第に浸出して後凝結するなり之を傷けざる時といへども液汁の浸出するを見る是れ風土の酷熱なるに由るなり椰子樹も亦多く佳良の椰子を結ぶこと甚だ夥し穀類は米粟の外はなし他邦より輸入して其供給を仰がざるべからず酒は葡萄より製せざれども米砂糖椰子より製す好飲料なり此地一種小き羊を產す尋常の羊種とは異なりて其耳のあるべき位置には耳なく之に代て二本の小角を生し鼻の方に垂れ其垂れたる處に二孔ありて耳の用を爲す居民は漁を以て專業とす鉛錘魚を漁すること其數無量にしてヴェニスの一グロートを投ずれば二尾を買ひ得べし居民は之を日に乾かす炎熱極て劇くして地面灼熱するが故に野菜青草を見ず是を以て牛羊馬駱駝の如き家畜を飼ふにも乾魚を以てし常に之に慣るゝが故に食て毫も嫌ふの狀なし之に用ふるは無論小魚のみにて三四五月の間其漁獲甚だ多し乾して家に蓄へ以て家畜の飼料に供す新鮮の魚も亦た之に與ふといへども常に乾魚を食ふに慣らすなり穀物拂底なるが故に人も亦稍〻大なる魚にて製せし乾魚餅を用ふ其製法左の如し魚肉を取て極細密に剉切し漿汁に穀粉を加へて粘稠にせし者を以て之を潤和し全體糊狀と爲るに至り一種の蒸餅の如き形と爲し炎天の日に當てゝ乾固す此乾魚餅を貯藏して以て年中の食料に供す上述せし乳香は此國にては非常に廉にして目方百磅金貨十ベザントの割にて酋長より買取らるゝ程なり酋長は再び四十ベザントを以て商人に拂ひ下ぐ是れ亞丁蘇爾塁の命にて此の如くするなり蓋し其領内に產出する全額を上述の割にて買上げ再び拂下げて巨利を得るは蘇爾塁の專賣特權とする所なればなり此地の

事は此に止め進てゾルファル府を說くべし

(一)エシールはシフル又セフルなり之に冠辭を加へ、エッセフルといふ亞丁の東大約三百三十哩亞剌比亞阿曼部の海岸に現存する如街と其一帶の地方とないふなり然し昔の市府は今の市街よりは四方十哩程の處に在りし由にて今尚舊蹟屋宇等の迹を存すといふ英の地圖にはサハルと記せり本文亞丁の東南とあるは東北の誤なり四十哩とあるも無論誤謬なり

(二)セフルと、ダファルの山々は亞剌比亞乳香の大產出地なりしが今は衰退して見るべきものなし

第四十二章

ゾルファル府

ゾルファルはエシールより東南二十哩を隔てたる重要なる一大市府なり(一)居民は回々教徒にして其政務官も亦亞丁蘇爾壇の臣下たり此地海邊に在て良港あり船舶常に輻輳す內地より亞剌比亞馬多く此に集り來り商賈之を買て印度に輸り販賣して巨利を博す乳香の產出もありて商賈之を買ふ其他此地の支配に屬する市街城邑あり

次にカラヤチ灣を述ぶべし

(一)ゾルファルはダファルなり又ゾルファル、ドファル、ザファルともいふ今は此名に當るべき市街はあらざれどハイネ氏の說に據ればセフルの東四百哩程の處に海に臨み水利能く開けし肥沃の原地あり其名をダファルと稱すと廣原の東端にメルベトと稱する地あり是れ或は中古のダファル港ならんか其四端に廣き廢墟ありといへるは猶其以前の市府の迹なるべし

第四十三章

カラヤチ府

カラヤチはカラッと稱する海灣近傍に在る大市街なりゾルファルを距ること南東の方大約五十哩なり(一)人民は瑪哈瑪特の法規を遵守し惡末嶼メリクに隸屬す惡末嶼メリクは一朝外敵の侵襲を受け劇く壓迫せらるゝ時は必ず此府に來て掩護を求む蓋し此府は頗る强盛にして實力を有し能く地の利を得て未だ曾て敵の爲に攻略せられしことあらざればなり府外周圍の土地には五穀を產せず一切之を他國の輸入に仰ぐ海港甚だ便にして多數の商船印度より入港し其布帛香料を賣て大利を占む內地の市街城邑海岸を距ること遠きが故に其供給を需むること甚だ多ければなり而して其船は歸航に馬を積み去て印度に到り又大利益を得て之を販賣す

カラッ灣の入口に堡壘あり殊に好位置を占む其許可を得ざれば一艘の船も灣に入り灣を出ることを能はず此府のメリクは波斯起兒曼王の約束を受け之に貢を捧げ居れども時には王の訴求異常なるが爲に其服從の盟を破り之を拒て要求に應せざりしかば王は軍を送てメリクを壓せりメリク乃ち

惡末嶼を逃れカラヤチに入て之を守り自ら兵力を以て一切の船の出入を禁せり之れに由て貿易の途絶え起兒曼王は納税を失ひ大に歳入の欠耗を告げしかば力なくもメリクとの爭を止て和を講ずるに至れり此の如き堅城ありて此の如き位置を占むるは啻に灣口の關鍵たるのみならず實に洋海全面を制して之を通過する船舶は一として其注視を逃るゝこと能はざるなり (二)此國の人民は一般に椰子と魚類とを食とす魚類は或は新鮮或は鹽藏して之を用ふ米魚共に絶えず豐富にして欠耗を告ることなし然れども高貴の人及び富者の輩は他より輸入し來る穀類を用ふるなり

カラヤチを去て東北に進むこと三百哩惡末嶼島に達すべし

(一)カラヤチは今の阿曼部の都府木斯甲に近く南方の海岸に在るカラトを謂ふなりカラトは又カラヤチともいふなり本文は例に依て方角と里數を誤れりダファルよりは東北に當る最捷の海路を取るも大約五百哩あり此地は地震に由て全滅し今は僅に一小漁村を見るのみ人民は往と金貨を掘り出すといふ

(二)此堅城所在地は疑もなく今の木斯甲なり當時はカラト府の内なりしなるべし

第四十四章

惡末嶼島

惡末嶼島に華麗なる一大府市あり海に接して建設せりメリクありて之を治むメリクの稱は我邦を以て言へば邊疆の諸王に當る人民は回々教徒にて何れも皆な瑪哈瑪特の法規を守る此地炎熱の威力を逞くすること殊に烈し然れども家々何れも通風塔の設あり之に依て各階各室意の如くに風氣を通ずべし若し此設なくんば暫くも此に生存すること能はざるなり

此地は第一篇に怯失島、起爾曼と共に既に說きたれば今は再び言ふの要なし

大印度の諸州諸府にして其所在海岸に近き者と中印度と稱する以日阿伯亞（黑人國の總稱にて亞比西尼亞を謂ふ）の一二邦國とは右にて既に詳說し了れり今は此書を終るに臨み姑く初めに返り前篇言ひ漏せし北方の疆域に就き少く述る所あらんとす

此世界の北部地方(一)には其名を海都と稱する王ありて(二)之に臣屬する無數の糙粗人(蒙古人)居住す海都王は成吉斯汗の系統にして大可汗忽必烈帝の親戚といふべき人なり而して彼は他の何れの君主にも臣屬せず此人民は祖先の作法習俗を其儘遵守して變ずることなく世之を喚で眞正の韃靼(蒙古)人と做す象教宗徒にして主神として崇拜する者をナチガイと稱す即ち所謂地の神なり之を認て土地及び地上の萬物を主宰する神と爲す此假神の爲に偶像と毛氈の像とを造ること第一篇中に述べしが如し王自身も軍隊も城中に住せず寨壘の中に居らず市街の中にすら居ることなし常に廣原山谷及び其地方に多き深林の中に棲息す疆内一も五穀類を產せず人民は肉と乳にて生を保

ち互に和平親睦にして相爭ふことなし而して皆盡く王に忠順服從して毫末も異心なく王の至重の目的とする所は專ら臣民間の平和結合を保持するに在て之を認て人君たる者の專要なる天職と做す國内馬牛羊其他家畜の大牧場多し此地には白色の熊あり其體非常に大なり長さ大約二十指尺(一丈八尺)のもの多し此に又皮毛純黑なる狐あり野生驢馬も亦多し小き獸にして黑貂あり之をロンデと稱す此外貂鼠鼬鼠の類にて種々の小き獸類ありファラオの鼠と名くるものもあり其群集する數に至ては實に信ずべからざる程なり韃靼人は巧なる工夫を以て一匹も漏さず之を捕獲すといふ

此區域に到らんとするには全く無人の沙漠たる廣原を横過して十四日の旅行を爲さゞるべからず時には無數の滙水飛泉流溢して沿澤を成す處もあり是れ久しく冱寒の季節中凍結せし者一年の間二三月にても溫暖の時に逢て日溫之を解くに至れば地面は總て泥水と成ればなり之を渡て行かんこと最も困難にして全地氷結の時よりは旅人をして疲勞せしむること萬々なり然れども商人の利を得るに急なる此等の地方に到て毛皮を買取るを以て專業とする者あり此業の爲に毎日毎晚地方の者にて客の宿泊すべき處に木造小家を作り地上より床を高くし而して自ら此に居を占て商客の來るを待て便宜を與へ次の日は之を導て次の宿泊地に到らしめ以て商客をして沼澤の廣原を旅行することを得せしむ此の如くして宿泊地より次第に次々の宿泊地に進みて初て沙漠を通過するなり氷結せし地面を旅行するには一種の車を用ふ我ヴェニス近傍の懸崖絶壁なる險峻の山中に住する人の用ふる者に稍〻相似たり之をツラグラと稱す即ち橇車なり車輪なく底は平なり前部は半圓形に上に卷き上がる此構造に由て氷上を容易く走るなり此車を牽かんが爲に犬に似たる一種の家畜を飼養す大さは驢馬に近しといへども尚犬と稱すべきものなり此者體力甚だ强し能く車を牽くに耐ふ其六匹を一隊として一車に連結す御者一人のみを以て犬を制御し一人の旅客其旅囊と共に之に乘る一日の旅行を終れば旅客は犬と俱に之を捨て日々新たに車と犬とを取換て途に沙漠横斷の旅行を終るに至り而して後毛皮を買ひ得て歸路に就き以て之を歐羅巴の諸國に販賣するの途を索むるなり(三)

(一)(案)本章は專ら西比利亞(シベリア)の全體を說くなり白熊黑狐抔は氷海の海岸地に居るものなり但野生驢は西比利亞の南部にのみ棲息す

(二)(案)此王の名を海都(カイドゥ)とするは大なる誤なり一本にカウンチスとあるを是とすべし海都は阿留桑山(アルタイ)より四の方喀什庫留(カシカル)に至る全領せり王にして突厥基斯坦(トルキスタン)種旅之に屬す專ら韃靼(タルタル)人と謂ふは之を指すなり西比利亞(シベリア)地方は往時は蒙古の種屬各地に割據せしが太祖成吉斯汗(ジンギス)の長子朮赤(ツシ)之を併呑し爾後二百五十餘年其子孫の管轄せし所なりき一本にカウンチス王とあるは朮赤王の第五子シャイバニの第十二子なり西部西比利亞(シベリア)に葛都(クチューマン)の古趾あり韃靼人は今にチンギストラと稱す成吉斯(ジンギス)

の義なり是れ或は四比利亞(ベーリア)故王の系統に屬せしものならんか

(三)冬(カムサツカ)堪察加邊の土人は穴居して常に犬を使用して運輸の便に供すれども西比利亞本土の者は今は犬を用ふることなし專ら快鹿を飼養して橇車を牽かしむ

第四十五章

暗黑地方と名くる諸邦

上文の如く毛皮を得べき韃靼地の極遠部より更に進めば北方の極界に迄達する一區域あり之を暗黑地方と名く冬季の間は大抵大陽の面を見るべからず大空暗黑にして猶ほ我邦の黎明(レイメイ)の頃萬物見ゆるが如く見えざるが如き時と一般の有樣なればなり(一)此地方の人は身の丈高く體形惡からざれども顏色甚だ蒼白なり未だ一王侯の政府の下に統一することあらず太古野蠻の儘にて定りたる法度もなく恒例もなし知識甚だ鈍く蠢爾たる風を存す(二)韃靼人屢〻進て遠征を企て其家畜什物を掠奪せんとし之が爲に暗黑の季月を利用し其近づき行くを發見せられざらんことを期せり然るに分捕品を携へて歸り來らんとするに當て其方角を識ること最も困難なるべきを考へ時に乳馬を有する牝馬に乘り行かば路に迷ふの憂なかるべしと爲し因て各自に牝馬に乘り其領地の界迄乳馬を伴ひ行き暗黑地方の首端に至り相當の注意を爲して之のみを留め而して後暗黑境裏に出發せり暗中充分の掠奪を爲し得て後光明の鄕に還らんと欲し牝馬の頸に轡(クツワ)を懸けたる儘自由に其行く所に任せしかば牝馬は母たるの自然性に依り其乳馬を殘し置きし處を指して一直線に路を取て歸り來れり之に由て騎乘者は皆な安全に住所に還ることを得たりといふ(三)

此極地に住する人民は夏季は晝夜の別なく續て日光あるを利用し許多の黃鼬(イタチ)貂(テン)鼠(ネズミ)アルコクニ狐其他此種の獸類を獵獲す其毛皮は韃靼地に棲息する者に比すれば柔かにして價格最も貴し是を以て韃靼人の利心を誘起し前段述ぶるが如き遠征掠奪を企つるに至るなり

此地の住民も夏季の間毛皮を隣境に携へ行て高價に販賣す聞く處に據れば遠く露西亞國迄も運搬し來るといふ(四)

次に露西亞國を說て此書の大團圓を結ばんと欲す

(一)本文北極圈內の實況を說て稍〻其の正鵠を得たり其地冬季は太陽常に水平下に在り然れども散光の力ありて尙全然たる暗黑には至らしめず

(二)此にいふ所の土人とはトンゲース族か然らざればサモイーズ族なるべし或はレナ河附近に居るヤクート族なるべしトンゲースはトンゲスカ河邊より北氷海迄の林中に棲息す

(三)此は古代よりの昔語(ムカシガタリ)に過ぎざるべし非實とは爲すべからず

(四)當時は西比利亞の猶ほ獨立し居りし頃にて歐羅巴へ輸送する毛皮は一旦都てトボルスキー河の露西亞側のウェルカツリアといへる地即ちウェルカツルスキーと名くる山脈の近傍迄送りしなり此山脈は露西亞と西比利亞とを分界し南北に走り連るウェルカツリアは國界の市街にして西比利亞より露西亞に入る唯一の門口なりき

第四十六章

露西亞國

露西亞國は廣大無邊なる國にて數部に分割す北は前述せし暗黑地驅に界す人民は皆基督教徒にして其教會の宗務は希臘派の儀式に遵ふ容貌溫雅身の丈高く顏色優美なり女子も亦美にして身材大小度に適し頭髪柔かにして常に長く垂るゝを好む東部は西部韃靼領國に界を接し其王に歲貢を納む(一)國内黃鼬アルコリニ、黑貂貂鼠狐其他此種の獸の毛皮夥しく採集せらる鼬を產するも亦多し處々に鑛山ありて多量の銀を得べし此國は非常に寒き國なり聞く所に據れば北は北氷洋迄も達すと前にも述べし如く北氷洋沿岸には多く兀鷹旅鷹を產し夫より世界の各邦に輸出す

(一)此に曰ふ所の露西亞は僅に其一部の邦國たるに過ぎず一二四〇年の頃成吉斯汗の孫拔圖王の韃靼軍の爲にポーランド匈加利の若干部分と共に割き取られ著者が此書を口述せし頃迄は韃王の軛絆中に呻吟し居りしなり四部韃靼とは拔圖以下其子孫をいふなり拔圖は北赤の嗣子として成吉斯汗の領地の一部を分地として世襲し奇卜察克阿剌羅新学合剌の諸國を領せし者なり旭烈兀の子孫にて闊剌散波斯を領せし者は東部韃靼と名けて之より區別せり

まるこぽろ紀行 終

著作權所有

明治四十五年四月十九日印刷
明治四十五年四月二十日發行

まるこぽろ紀行奥付

定價金壹圓五拾錢

譯者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　瓜生寅

發行者　東京市小石川區久堅町百八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　水谷景長

印刷所　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
振替貯金口座東京二四〇番
電話新橋本局三六二〇番

（工場製本）

博文館發行紀行書類

文學士　大町桂月君著

◎關東の山水

（寫眞版三十四圖挿入）

全一冊罢判上製
紙數五百五十頁
正價金壹圓
小包料金八錢

露を吸ひ霞を吸ひ嘯々乎として行き、悠々然として止まる、高山の嶺、窮谷の底、徒歩到らぬ所なく、霞霧縱横、國八州の名所細大漏らさず、文章山水渾然一致し、高士紙裏に躍動し、靈魂机邊を繰横し、入をして遠世超俗の思あらしむ、淘にこれ桂月先生閑得の文境、加ふるに地圖あり、數十葉の寫眞あり、中村不折、小杉未醒、丸山晩霞、高村眞夫諸畫伯の挿圖あり、若當代の逸品、錦上更に花を添ふるの觀あらしむ

文學士　大町桂月君著

◎行雲流水

全一冊袖珍裝釘
紙數三百頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

大町桂月先生の近業數十篇を收む、議論敍事抒情何くに行くとして可ならざるはなく、高きを求めずして自ら高く、街はず、伴らず、氣骨稜々として氣韻生動す、行雲流水の趣ひ、當代の文壇獨り桂月先生の筆にのみ見るべし

故大橋乙羽君著

◎增補千山萬水

（風景寫眞百廿景挿入）

全一冊袖珍上製
紙數七百二十頁
正價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は昨くも九重の御覽を賜ふの榮を得、發售以來既に二十數版を累刊するに至るの盛況に會す、總紙數七百餘頁、各地の名山、大川、古蹟、勝景等優美なる寫眞版を挿入して、一々懇切に解述したれば、實に一面完全なる旅行案内なると同時に、繞麗なる大文章なり

故大橋乙羽君著　（風景寫眞百廿景挿入）

◎續千山萬水

全一冊袖珍上製
紙數六百五十頁
正價金五拾錢
郵稅金八錢

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は、北部する所の地東北に止まりしを、烟霞の癖は更に著者をして、東海幾内中國四南より、北陸濱州を跋渉せしめぬ。是に於てか壞編あり、之を初編に比するに、經る處廣きに從うて、寫眞に上れる絶景亦頗る多し。製版の美麗亦優るとも劣ることなし

故大橋乙羽君著

◎耶馬溪

全一冊袖珍上製
紙數百五十六頁
正價金四拾錢
郵稅金四錢

耶山陽なして耶馬の溪山天下に敵無しと絶叫せしめたる耶の耶馬溪亦著者の周踏する所となり其明媚の紀文と靈妙の寫眞とは本書となれり從來勝を髣髴する者は獨り山陽の紀文ありしに著者は山陽の未だ到らざりし所まで到り其未だ寫さざりし奇勝なも寫したれば斯書を一讀する者は遊意勃興を禁導か得たるを謝せざるべからず

文學士　大町桂月君著

◎一簑一笠

全一冊袖珍上製
紙數三七六頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

◎富士だより◎八鹽島◎迎賓紀行◎海の◎杉田の◎熱海の春◎杉田の◎のいで◎出雲の美◎筑波山◎二月◎春の三瓶山◎一夜◎雨の◎斯◎魚溪◎金崎城址◎川越遠足◎興野の櫻◎保閑◎丹後の宮津◎曾遊鄙◎大江山◎立山の三夜◎日光だより◎足子◎鴻臺遠足◎片◎出雲雜誌◎金澤◎山◎加賀の山中溫泉◎八景◎相州の雨降山◎親不知氏の古城址◎島根半

田山花袋君著　（全一冊袖珍五〇〇頁）

◎南船北馬

正價金四拾錢
郵稅金六錢

同　君　著　（全一冊袖珍四一六頁）

◎續南船北馬

正價金廿五錢
郵稅金六錢

大橋乙羽君校訂

◎紀行文集

全一冊罢判上製
紙數一千六頁
正價金七拾五錢
小包料拾貳錢

◎東遊記◎日本行歸文集◎東遊記後編◎筑紫紀行◎西遊記當國里八談◎西遊記後編◎奥の細道上記の各篇は何れも江湖に珍什するもの、之を集成し、之を校訂して、帝國文庫の一册に編す、乙羽君が慎密の校正を經たるもの、又多言を要せざるなり

岸上質軒君校訂

◎續紀行文集

全一冊罢判上製
紙數一千卅四頁
正價金七拾五錢
小包料拾貳錢

本書は殿島御幸記を首として、紀行文長短四十七編を收め、是れを年代を以て次序し、變遷沿革の迹を考ふるに便せり、特に其の集成せるもの皆悉く當代の名文なれば、一讀當時の風土風俗を窺ふに足るべく、殊に卷頭には詳密なる解題を附したるを以て其便利最も大なり

岸上質軒君校訂

◎續々紀行文集

全一冊罢判上製
紙數一千六頁
正價金七拾五錢
小包料金拾貳錢

遠くは鎌倉時代より、近くは德川時代の末に至るまで、學者文人の紀行文中、最も趣味あるもの數十篇を集む、觀難を極めたる旅行記あり、壯快なる冒險談あり、風流なる遊記あり、各篇自ら一の妙味を具へ、而も通觀すれば、時代に伴ひて、風俗志尚の輕變を見るべし

小杉未醒君著

◎漫畫と紀行

全一冊菊判上製
紙數三百卅五頁
正價金八拾錢
郵稅金八錢

輕妙洒脫なる漫畫二百三十個
外にアートペーパ寫眞版八頁挿入

二六新報評　この書は未醒氏が最近に於ける諸新聞雜誌に發せたる漫畫及び紀行文を輯めたるものにて卷頭寫眞版の中にある機上は李白の詩をして巧みに俳諧的に畫きたり此の邊は氏の特色を最も能く發揮したるものゝ一ならん　吾人は氏に望むに其のむしものなり木曾路、御嶽詣、上毛の秋等は氏が畫風に一段の進境を開きたるも のあるを見

紀行文に對して專門文士遜色なく

畫と相俟つて讀すべきものなり

讀賣新聞記者　松川木公君著

◎樺太探檢記

全一冊菊判美本
寫眞版八葉挿入
正價金參拾八錢
郵稅金六錢

是れ著者が厳寒の樺太を踏破して其眞相を描ける書なり　書中奥山あり氷河あり　高嶺アイヌあり　氷濱の木乃伊あり　記事奇に富み文に趣味多し　狀地に秘密を知らんと欲する人は必ず　此少壯の勇者が齎らせる一卷を求めざるべからず

文學博士　姉崎嘲風君著

◎花つみ日記

全一冊菊判上製
紙數六百餘頁
正價金壹圓卅錢
小包料金八錢

口繪コロタイプ版六枚寫眞版三十三枚

南伊太利亞の美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇。その中には湖畔の佛蘭會に異國の友を會して、佛教を語り、ロマの寺附に聖教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然美術の記錄、宗教文明の評論として江湖の一讀を望む

巖谷小波君著　（久保田米僊畫伯裝釘）

◎新洋行土産

全二冊新形中判
表裝美麗函入
正價各壹圓卅錢
小包料各金八錢

曩に伯林二年の觀察を洋行土産二卷に著はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめし著者は彼の渡米實業團に加はつて在米三月間の見聞を新洋行土産として發表す。著者が鋭利なる眼光と、輕妙なる筆致とは世已に定評あり。而して彼の實業團の渡米や亦本邦空前の壯擧なりとす、本書他の外遊記に比して、非光彩を異にせるの素より論を俟たざるべし

田中湖人君著　（寫眞版十二枚挿入）

◎最新倫敦繁昌記

全一冊菊判上製
紙數七百二十頁
正價金壹圓
郵稅金八錢

神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇警の觀察と輕妙洒脫の筆致を揮つて倫敦の裏表兩面を縱横無盡に活寫せる"信"を綴次して一卷となせるなり　本書に於て最も取るべき處は忠實にして倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せるが如き觀あらしめたる所にあり　倫敦案内記としては尋常凡庸なるものゝ一に算ふるを得べし　卷末に渡邊小城氏の趣味あるハガキ便を附す

吉田博君著　並畫

◎寫生旅行魔宮殿見聞記

全一冊菊版上製
紙數四百餘頁
正價金九拾錢
小包料金八錢

○寫眞版十二枚及原色版二枚挿入

東京朝日新聞評　採錄せる傳說の大部分はアービング氏のアルハムブラを譯述したる書にて寫宮殿後記中の歷史上の考證は上田黑潮氏の筆に成るものなれど大體は著者の寫生旅行記なるべき事疑なし　西班牙は歐洲の貧窮國なれど歷史を尋へば歐洲の古國也　歐洲が富强を致したる政治科學以外西班牙グラナダ市のアムハンブラ（寫宮殿）の如きものゝある怪しむに足らず　即つて政治科學以外歐洲研究者に最も趣味を覺えしむる此書の如きもの二三種はありて可なるべし

水田英雄君著

◎大英國漫遊實記

全一冊菊判美本
紙數七百頁
正價金七拾錢
郵稅金八錢

まとと新聞記者　岡雷平君著　（寫眞版八枚挿入）

◎南洋群島珊瑚島探檢記

全一冊袖珍美本
紙數三百十六頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

冒險世界主筆　押川春浪君編

◎中村春吉自轉車世界無錢旅行

全一冊菊判美本
紙數三百四十頁
正價金參拾八錢
郵稅金六錢

五大洲探險家　中村直吉君
冒險世界主筆　押川春浪君　共編

◎五大洲探檢記

四六判洋裝美本
紙數三百頁以上
正價各四拾五錢
郵稅各金六錢

（既刊書目）

第壹卷◎亞細亞大陸横行　第四卷◎亞弗利加一周
第貳卷◎南洋印度奇觀　第五卷◎歐洲無錢旅行
第參卷◎鐵脚縱横

文學博士　姉崎嘲風君著　（寫眞版四十餘頁）

◎停雲集

全一冊　洋裝　判上製
紙數五百八十頁
正價金壹圓卅錢
郵稅拾貳錢

亡友を想ひ、異國の友と思を交へ、替遊の地を追懷し、停雲徘徊して　追へども去らざるの情この一篇をなす。感想と紀行とを經とし、繪畫と戲曲とを緯とす、清閑の友旅窓の伴侶として情趣と趣味の人に薦む。

天眼鈴木力君著　（雄拔快奇なる寫眞多數挿入）

◎南亞南米行

全一冊　菊判　洋布上製
紙數三百廿頁
正價金九拾錢
郵稅拾錢

帝國の隆運を負へる巨經生駒に依り航海一萬二千海里なる海上陸面の見聞所感を著者寫眞に努め三大洋の雲容濤力と南半球の日星風月とを活現せしめ更に大英民族の植民成功の秘線に觸れ南阿無盡の天然寶料――新雄邦結成の情由――現代的擴充の消息――英雄セシル、ローズの氣魄精根等を筆路に深刻し汎く一般の老少に海外空氣を會得せしめ進取發展の氣分識想を吹銘する者は本書の所期なり文章は劃切調直ち斬新至せる海國健兒一讀忽ち奮起せむ

坪谷水哉君著

◎世界漫遊案内

洋裝　菊判　洋布箱入
上製　紙數七百六頁
正價金壹圓七拾錢
郵稅金拾錢

坪谷水哉君著

◎山水行脚

全一冊　洋裝　菊判上製
紙數四百九十頁
正價金八拾錢
郵稅八拾錢

一枝の筆と一個の寫眞器とみ友とし、嘸が有つても無くても毎年數回必ず山水の間に漫遊し、殆ど旅行狂と呼ばるゝ著者が過去十數年間の紀行を集めたるは本書なり。五畿八道は言ふに及ばず、琉球臺灣の隅々まで曾れり。駐蹄里程の遠きを上に、抑入せる百餘の寫眞と相俟ち北時その光景を寫し出して實地に諧るが如し。失敗あり滑稽あり冒險記趣味頗る豊富なれ御へ、旅行にも臥遊にも、最好の友として推薦す。

文學博士　井上圓了君著

◎日本周遊奇談

全一冊　四六判上製
紙數三百八十頁
正價金七拾錢
郵稅八拾錢

井上博士廿餘年間の旅行紀念!!

本書は井上博士が旅中に於ける珍談奇談を

動物　植物。牛馬舟車。山水溫泉。名勝舊蹟。名物七奇。市町村里。衣服飲食。住家庭園。宗教教育。妖怪迷信。俗習俗解。產婚葬祭。學校。風俗習慣。娛樂興行。人名地名。言語文學。童謠俗歌。世態人情。修養訓誡。吟詠詞句。滑稽諺語。二十五類に分ち四百二十五人累ね的おり一休的あり一讀頓腹絶倒の興ある內にし先生の本領を談笑の間に分されたるは嘆服の外なきなり敢て机上の友として世に一本を薦む

東京帝國大學理科大學講師　鳥居龍藏君著

◎蒙古旅行

洋裝　菊判上製
紙數六百五十四頁
正價金壹圓八十錢
郵稅拾貳錢

334
180

334
180

022340−000−3

334−180

マルコポロ紀行

瓜生　寅／訳補

M45

ADA−0872